

60 戸春名神社〔とはるなじんじゃ〕

表60-1

神社名	戸春名神社	所在地	高崎市倉渕町三ノ倉4040
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 戸春名神社
主祭神	火産靈神、埴山姫神	神事	春祭り(4/15)、秋祭り(11/23)
創立・沿革	創始不詳。室町時代に三ノ倉の氏神であった社が権名神社の神徳にあやからうと分霊を願い、「外権名神社」となったことが始まりと考えられている。樹齡四百年と伝える杉並木や寛永8年(1631)の水帳に「外権名前田」などとの地名代わりに使われていることから、江戸前期には既にその形態を整えていたと考えられる(『倉渕村誌』)。		
文化財指定	戸春名神社の大杉(市天記 平成17年7月)		

位置・配置(図60-1、写60-1)

高崎市街から北東へ25kmほどの位置にあり、北東に榛名山、南に鳥川を望む。旧信州街道に面した石段の上に鳥居があり、道路を挟んで参道が続く。市指定天然記念物になっている樹齢推定500年の杉の

御神木の間を抜けて石段を上り、社務所のある中庭(昭和中頃まで獅子舞を奉納)に至る。さらに急な石段の上に社殿がある。社殿の裏は切り立った崖になっていて、境内は鬱蒼としている。諏訪神社、稻荷神社、天満宮、その他の石祠も祭られている。

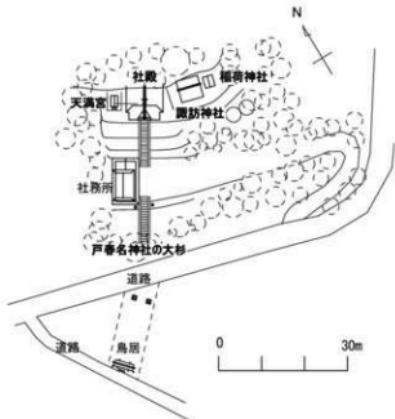


図60-1 配置図



写60-1 境内全景

由来および沿革

もとはこの地方の住民の氏神として祀られていたものを、中世以降になり、氏神に合わせて権名神社の祭神を分霊勧請したと考えられている。保管されている享保17年(1732)の「宗源宣旨」には「正一信満行大権現 上野国群馬郡上三倉村」とあり、権名神社の里宮であったことがわかる。「倉渕村誌」によると、当神社の建築時期について2つの伝承があり、1つは水害で壊れて享保2年(1717)に建築したというものの、もう1つは火災の火の粉で出火焼失し

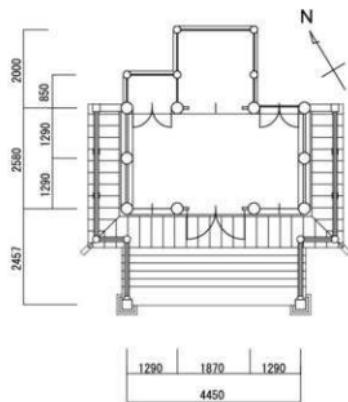


図60-2 平面図(社殿)

たので榛名神社神楽殿または拝殿の古材を利用して再建したというものである。後陣奥の神穴が榛名神社本殿に通じているという伝説からも榛名神社との深い繋がりが推測される。明治維新の廃仏毀釈時に榛名神社から預かり難を逃れたという、勝軍地蔵を御神物としてもつ。

社殿（図60-2、表60-2、写60-2～60-7）

正面3間を南に開き、側面2間で隅木入春日造でこけら葺を板金で覆っている。正面中央に唐破風付きの1間向拝をもち、正面側面の三方に切目縁を廻す。脇障子を備え、正面に木階、向拝部分には1段

幅広い板をもつ。身舎外部壁面の彫刻は正面のみで、内法長押より上に充填されている。木鼻は獅子および猿の彫刻鼻である。向拝は、飛竜および獅子の彫刻で飾られており、組物は連三斗、木鼻は正面が獅子、側面は牡丹丸彫である。水引虹梁は渦や雲が一体となった刻線彫絵様で装飾化が進んでいる。向拝と身舎を繋ぐ海老虹梁はいくぶん装飾的であるが、当初材と考えられる取り外された海老虹梁には古風な絵様が彫られている。

内部は一室となっているが、丸柱が切り取られた床跡や区切られた天井跡から、当初は外陣と内陣の2室であったと考えられる。中央正面奥が後陣でそ

表60-2 社殿

建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	三間社隅木入春日造(4.45m)、側面2間(2.58m)、向拝1間軒唐破風付、こけら葺(板木覆)
工 匠	不明	基 础	[身舎]自然石、切石
軸 部	[身舎]丸柱、切目・内法長押、頭貫 [向拝] 角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎内部]出三斗 [身舎外部]出組 [向拝] 連三斗
中 備	[内外陣擗]轔股 [外部正面]轔股・嵌込彫刻 [向拝]詰組・嵌込彫刻	軒	[正面]飛燕垂木打越二軒繁垂木、菱支輪
要 飾	虹梁 大瓶束、雀形、緒付鰯懸魚、六葉	柱 間 裝 置	板戸、腰板付格子、横板壁
締・高欄・船障子	浜縁、三方切目縁、脇障子、擬宝珠高欄、登高欄付	床	拭板張
天 井	[外陣]竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木(柱・梁)、朱塗(壁・組物)、極彩色、金 箔塗(内部扉)	飾 金 物 等	柱: 金欄巻、扉: 引手金物、長押: 八双金物、 唐破風: 唐破風飾金物
繪 画	不明	材 质	檜、その他
彫 刻	[身舎]木鼻(獅子、猿)、正面長押上充填彫刻(波に扇、牡丹、梅)、脇障子(松に鳥) [向拝]海老虹梁・水引虹 梁(絵様)、木鼻(獅子、牡丹)、向拝中備充填彫刻(龍、獅子、狛犬)、手挾(桐の丸形、絵様)、鬼の毛通(飛龍)		



写60-2 全景



写60-3 側面



写60-4 向拝



写60-5 内部正面



写60-6 内外部境



写60-7 金箔貼りの組物

の左右に金箔の残る黒漆塗りの扉がある。内外陣壁面および埋木や溝跡が残る柱にも金箔の跡が見られる。外部および内外陣境にはそれぞれ異なる棊股を配するが、はらわたの彫刻は棊股面内に納まり古風である。内外陣堀中央の出組2組のみ金箔が張られ、肘木端の形状が他と異なる。

建造時期については、古風な細部意匠や向拝の装飾化など総合的に判断して18世紀後期と推定した。

まとめ

古くから榛名神社の参詣路にあり、里宮として信仰されてきた神社である。創始不詳で社殿の建造年代を示す棊札も見つかっていない。向拝は、古風な細部と装飾化が進んだ意匠を持ち併せ、一里宮としては豪華すぎる金箔の細部設えを内部に残している。そして、榛名神社の古材を利用していると伝える。現状材跡や形状から、古材利用の可能性も十分に考えられる。榛名神社神楽殿の建築は明和元年(1764)、本社・幣殿・拝殿は文化3年(1806)とする。国祖社は享保年間(1716~1735)の建築であるが、神楽奏時に棟敷を敷いて神楽拝見所となる額殿

を文化11年(1814)に増築している。さらに天保12年(1841)に大修理されたと考えられている。

榛名神社の本社・幣殿・拝殿および国祖社は、流派的又は地方的特色において顕著なものとして国の重要文化財に指定されている。それら建築古材等を利用して戸春名神社が再建されたとすれば、榛名神社の古来意匠を引き継ぐ意味でもその価値は大きい。急な山腹に榛名神社とつながる神穴を守るように建てられたその姿には古来の人々の祈りが感じられ、大切に未来に引き継いでいきたい神社である。

(吉垣内英子)

【参考文献】

- 『倉渕村誌』倉渕村長 昭和50年
- 『新編 倉渕村誌 第二巻 資料編II 近代現代』倉渕村誌刊行委員会 平成20年
- 『新編 倉渕村誌 第三巻 民俗編』倉渕村誌刊行委員会 平成19年
- 『新編 倉渕村誌 第四巻 通史編』倉渕村誌刊行委員会 平成21年
- 『倉渕村のあゆみ』倉渕村教育研究所 所長関茂 平成2年

62 椿名神社【つばきなじんじゃ】

表62-1

神社名	椿名神社	所在地	高崎市倉渕町椎田60
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 椿名神社
主祭神	元湯彦命、埴山姫命	神事	春大祭(4/3)、秋大祭(11/23)、太太神楽保存会(8/31)、2年参り(50年)
創立・沿革	「倉渕村のあゆみ」によれば、綾清天皇御宇、宇摩志摩遼命の御子、元湯彦命が東国平定の時に椎田村地内に留まりここに社を建て、祭ったのが始まり。その後何度も野火で焼失した為、火災にあっても古称を失わないという事から1744年(延享元年)石宮建立した。		
文化財指定	椿名神社の大銀杏・大ケヤキ(市天記 昭和57年4月)		

位置・配置(図62-1、写62-1)

高崎中心部より西北西方面へ約29km。国道406号を之中条方面に進む。椎田自動車手前右手に見える神社の案内を左に入ると、少し進んだ先に真赤な鳥居がある。境内敷地へはそこから約150m先に位置するが、境内へ至るまでの参道は、坂を下るように進む。正面を東に向き、境内に入ると建物南側には天然記念物に指定されている、大イチヨウ・大ケヤキの木が目を見張る。入口正面には拝殿から奥に本殿覆屋、それより時計回りに境内を回るように社務所、神楽殿と、建物が並び、更にその建物を覆うよ

うに樹木が生い茂っている。

由来および沿革

綾清天皇御宇、宇摩志摩遼命の御子、元湯彦命が東国平定の時に椎田村地内に留まりここに社を建て、命が持っていた石劍・石玉を神体として祭ったのが始まり。この時東国鎮護の神として埴山姫命を祀られたという。当時、この地には多くの社家があったが、安土桃山時代、天正の頃に上杉と武田の戦いにより兵火にあり、焼失したという。また、神社の社殿や家屋も焼失し、更に社家が武田家に属して後に古文書、宝物等も全て失ってしまったそうだ。その後、神社を移したが野火にて数度焼失したという。このように幾度となく焼失を繰り返した為、境内社には石宮が祀られ、焼失した建物の存続を後世伝えるに至り、当時の人々の篤い思いが伝わってくる。ここに祀られている祭神は、土の神の埴山姫命であるが、五穀豊穰をも守られる。この地域における人々はこの神様に守られ、大正6年から続く太々神樂は今もなお年に2回奉納されているという。



図62-1 配置図



写62-1 境内全景

本殿(図62-2、表62-2、写62-2～62-8)

建築年は棟札より明和3年(1766)である。一間社侧面1間の春日造。美しい素木造で、正面、側面、

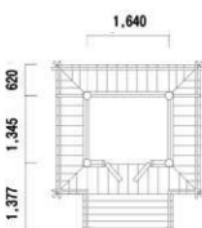


図62-2 平面図(本殿)

写62-2 本殿

建造年代／根拠	明和3年(1766)／棟札	構造・形式	一間社春日造(1.64m)、側面1間(1.35m)、向拝唐破風付柿葺
工 匠	[大工]佐藤喜八郎安信	基 础	切石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、長押 [向拝]角柱	組 物	[身舎外部]三手先組 [向拝]一手先組
中 備	[外部]詰組、幕股 [向拝]幕股 [腰組]木鼻、幕股、支輪	軒	二軒垂垂木、軒支輪
妻 飾	なし	柱 間 装 置	両開き棧唐戸 板壁
縁・高欄・脇障子	四方博縁、登高欄、脇障子、登高欄、階段木 7段	床	板
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	[向拝柱]丹塗(隅木芽負) [桁]丹塗(隅木芽負)	飾 金 物 等	木口金物、破風板
繪 画	[博縁]雲形、花・波 [側面板壁]堆・竹、紅葉、鶴	材 質	漆
彫 刻	[身舎]海老虹梁(花)、支輪(波、花)、幕股(花)、木鼻(獅子)、側面壁(天女)、脇障子、手鉄(花)、隅脚木(龍)、台輪(花) [向拝]水引虹梁(梅)、柱、地長押、縁長押、地紋彫、木鼻(獅子)、中備(龍)、丸桁上(花)		



写62-2 正面



写62-3 水引虹梁



写62-4 海老虹梁



写62-5 側面



写62-6 腰組



写62-7 妻飾

脇障子は見事な高肉透かし彫がみられ、彩色されている。また、海老虹梁の裏面なども塗装されているのか、表面より深い色をしている部分がある。大床は腰組により支持されている。建物周囲に手摺が巡り、高欄の先端を削高欄にし、更に向拝の高欄の親柱は逆蓮柱で、禅宗様の形もみられる。向拝柱は地紋彫で、水引虹梁には透かし彫りの龍の姿がみられ、背部には籠彫手鉄がある。水引虹梁の端の木鼻は唐獅子をつけ、左右には象がつく。その様子は優雅さを残し、18世紀の特徴を映している。組物は三手先組、妻飾は二重虹梁で、大瓶束で支える。更に三段に迫り出した軒支輪にも波や雲の彫刻が描かれている。

なお、本殿棟札には「奉造立清水谷掃部藤原真宴以曲尺實是」という文字が中央部に記されており、左右に「本棟梁佐藤喜八郎安信 脇棟梁城田七五郎……」とある。そして裏面に「明和三歳戊霜月良辰棟梁當国室田住人」という墨書が記されている。

拝殿 (写62-3、表62-3、写62-9～62-10)

建築年は棟札が確認されており、嘉永3年(1850)である。春日造銅板葺、向拝1間をつける。向拝柱は地紋彫の角柱、水引虹梁には若葉の彫刻で、更に上部に透かし彫りの彫刻が施されている。端の木鼻は獅子で左右には狛がつく。海老虹梁は水平で、波の彫刻がされ、手鉄の彫刻もつく。身舎木鼻も若葉

の彫刻がされている。天井は格天井で、鳥や草花の絵図が極彩色で描かれている。工匠は、棟梁 藤井繁蔵、脇棟梁 丸山佳達藏。他 牧野時五郎、加部治朗、市川富吉などで、造営に関与した職人も、建造年と同様に棟札に墨書きされており、貴重である。格天井には極彩色で鳥や草花の絵図が描かれている。

まとめ

椿名神社の歴史は古く、人皇第二代綏清天皇の時代に遡るといわれている。

まず、拝殿の外観を見ると、春日造と呼ばれる切妻を正面としており、拝殿は妻部分に庇を付け、これを向拝としている。この拝殿は造営時の棟札があり、嘉永3年(1850)に上棟し、棟梁等施工者の名前も記載がある。棟札の中央に記載されている主文には「岡象女神」の文字が記されており、これは、水を司る神であるという。また、左側には「五帝龍神」と記され、これら2つの神は「鎮火防火」を司る神であるという。幾度となく焼失を繰り返した地域の人々の篤い願いが込められて建造されたことがうかがい知れる。

また、本殿造営の際の棟札も残され、建造年が嘉

永3年とされているが、その建造年を現わす建築様式として、海老虹梁の湾曲が緩やかな形状や木鼻の獅子の優雅さ、籠彫手鉄や高肉透かし彫影刻といった深い彫刻などがあげられる。19世紀の寺社建築技術を示す貴重な建物である。

(堤 雅之)

[参考文献]

『倉渕村のあゆみ』倉渕村教育研究所 平成2年

『椿名神社の調査報告』

『椿名神社の御由緒書』



図62-3 平面図(拝殿 寺殿 覆屋)

表62-3 拝殿

建造年代／根拠	嘉永3年(1850)／棟札	構造・形式	正面5.45m、側面2.73m、向拝1間春日造鋼板葺
工 匠	大工]棟梁：藤井繁蔵 脇棟梁：丸山佳達藏 他 牧野時五郎、加部治朗、市川富吉	基 磨	基壇、切石基礎、土台有、礎盤有
軸 部	[身舎]角柱180Φ [向拝]角柱、手鉄	組 物	[身舎外部]出三斗 [向拝]出三斗
中 備	[身舎外部]木鼻 [身舎内部]木鼻 [向拝]幕	軒	正面一軒疊垂木、側面二軒疊垂木
妻 飾	笈型付大瓶束、拝懸魚	柱 間 装 置	棟唐戸
縁・高欄・船障子	三方切目縁、高欄無、船障子有	床	拭板
天 井	[拝殿]格天井(絵画有)	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[向拝]木鼻、裏甲、朱	飾 金 物 等	なし
絵 画	[幣殿]花・鳥・魚	材 質	檜
彫 刻	[身舎]海老虹梁(絵様)、木鼻(絵様)、懸魚(花)、頭貫木鼻(禪宗様: 漢文) [向拝]水引虹梁(草の蔓と花)、木鼻正面(獅子)、側面(猿)、手挾(波)、水引虹梁(龍・劍士)、柱(地紋彫)		



写62-8 全景



写62-9 向拝虹梁 手鉄



写62-10 木鼻・粹肘木

63 (生原)北野神社 ((おいばら)きたのじんじゃ)

表63-1

神社名	北野神社	所在地	高崎市箕郷町生原1
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 北野神社
主祭神	菅原道真	神事	春祭(3/25)、秋祭(10/9)、新嘗祭(11/23)
創立・沿革	菅原道真公、他5柱の神をまつる。勧請は永禄2年(1559)と伝えられる。明治41年(1908)6月17日許可を得て字諏訪に祭祀していた。無格社諏訪神社、同境内末社1社と字中内出無格神明宮、字中新田無格社白山神社を合祀した。明治44年(1911)9月1日、神饌幣帛料を共進する神社に指定された(『箕郷町誌』)。		
文化財指定	生原北野神社の本殿(市重文 昭和52年11月)、生原北野神社の獅子舞(市重無民 昭和48年7月)		

位置・配置 (図63-1、写63-1)

県道高崎東吾妻線を高崎市内より西明屋への途上、上芝東の交差点は直進し次の交差点を右折し、約百m程で左折すれば、生原一区集会所の駐車場がある。その出入口に北野神社の石柱があり長い参道の中ほどの石鳥居越しに拝殿が望まれる。その鳥居をくぐり、数段の階段を上ったところに社殿はある。本殿は拝殿と一体となった覆屋の中にある。拝殿に向かって左に手水鉢、牛石像があり右手に二つの石宮と稻荷様がある。社殿の東南は駐車場、西面及び北面は杉林になっている。参道の途中から分かれる窄地が庚申塔への道である。

由来および沿革

北野神社の勧請は永禄2年(1559)と伝えられる。明治41年(1908)6月17日、許可を得て、字諏訪に祭祀していた無格社諏訪神社、同境内末社1社と字中内出無格神明宮、字中新田無格社白山神社を合祀



写63-1 境内

した。明治44年(1911)9月1日、神饌幣帛料を共進する神社に指定された。

本殿 (図63-2、表63-2、写63-2~62-7)

現在の本殿は、棟札より文久元年(1861)の再建である。棟札では富岡村大棟梁、清水和泉正藤原充

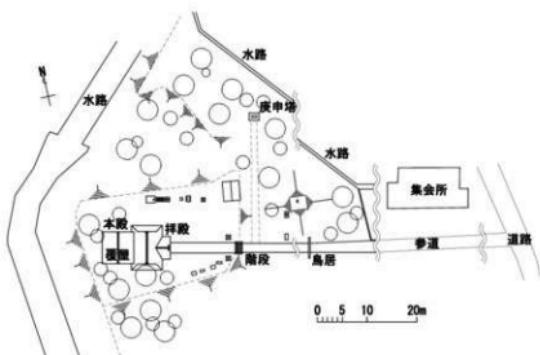


図63-1 配置図

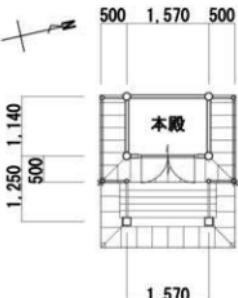


図63-2 平面図(本殿)

賢、越後国刈羽郡五ヶ市村大工：渡辺富蔵、下芝村脇棟梁：小沢熊太郎、江戸の彫工、後藤三次郎、武藏国谷熊宿小林源太郎の名前が読み取れる。本殿北面の彫刻の中には、東都：後藤恒徳作と刻まれた部分がある。

本殿規模は一間社流造（1.57m）、側面1間（1.14m）、向拝1間軒唐破風、檜皮葺、浜床より、階5段、高欄は擬宝珠高欄、三方切目縁をめぐらし、縁床より地覆、平行、架木の3本があり、縁の行き止まり部分に臨障子、基礎は切石、亀腹の上、

腰組は土台に束建て出三斗。木鼻は獅子頭、中備は三手先出組、尾垂木。向拝角柱正面の木鼻は獅子頭、向拝角柱の側面は象鼻、向拝屋根唐破風、懸魚は唐破風懸魚、向拝水引虹梁上連三斗、蛙股部分は彫刻で埋められている。

海老虹梁部分には竜が巻き付いている。手挾には彫刻が帆施されている。軒は二間繁垂木、妻飾は、二重虹梁、大瓶束。東の左右は彫刻で飾られている。

内部には（内陣一室）菅原道真公の木像が祀られている。床は拭板張、天井は竿縁天井。本殿の向拝

表63-2 本殿

建造年代／根据	19世紀中期／棟札（表上段には、天満宮本地十一面觀音を撰んで、右は文久元年星舎幸面、左は秋九月吉良辰。下段中央は、再建殿宇一字である。）	構 造 ・ 形 式	正面1間、側面1間、流造、檜皮葺、平入、1間向拝、軒唐破風付
工 匠	大工棟梁：清水和泉正藤原充賢 大工：渡辺富蔵、脇棟梁：小沢熊太郎 彫刻師：後藤三次郎、小林源太郎	基 础	切石基礎、亀腹
軸 部	[身舎]円柱、土台、腰長押、地長押、内法長押、台輪 [向拝]方柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]獅子鼻、三手先出組、尾垂木 [向拝]拳鼻付出組、手挾
中 備	[身舎]三手先出組、尾垂木 [向拝]拳鼻付出三斗、彫物	軒	二軒、繁垂木
妻 飾	二重虹梁、大瓶束、懸魚	柱 間 裝 置	板戸、両開戸、側面背面：全面彫刻
締・高欄・船障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、平行、地覆（水縁欠）、架木、樋束、斗東	床	拭床
天 井	竿縁	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	板戸前面：花模様、長押：長押金物
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[本殿]水引虹梁棊轍 [向拝]手挾、臨障子、海老虹梁（龍）		



写63-2 本殿正面



写63-3 本殿向拝



写63-4 本殿背面



写63-5 本殿侧面 腰組



写63-6 本殿 背面



写63-7 本殿 妻面

虹梁上をはじめとして、身舎正面および両側面、背面のすべての部分に彫刻が施されている。

まとめ

境内の掲示板には当神社本殿の棟梁は、原山の棟梁清水和泉正藤原充賢（当、神社棟札では、富岡村大棟梁 清水和泉正藤原充賢）及び彫物師の名は小林源太郎とある。この両名は、棟名神社の双竜門などを造った工匠である。幕末装飾神社建築としては最高峰の一つといえる。

（城田富志夫）

【参考文献】

神社保管資料よりご提示品の閲覧

『箕郷町誌(昭和50年版)』箕郷町誌編纂委員会 昭和50年
『上野国神社明細帳 6』群馬県文化事業振興会 平成14年

68 (吉井)八幡宮 ((よしい)はちまんぐう)

表68-1

神社名	八幡宮	所在地	高崎市吉井町吉井甲372
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 八幡宮
主祭神	品陀和氣命	神事	例大祭(4/15、10/15)
創立・沿革	神社創建は不詳、天正18年(1590)徳川家康の関東領有に伴い、吉井領二万石を賜沼定利が領有したが、定利は吉井宿の町割りを整備し、自らは氏神乾八幡を祀ったのが現在の八幡宮と伝える(「吉井町誌」吉井町誌編さん委員会 昭和49年)。		
文化財指定	吉井八幡宮(市重文 平成16年11月)		

位置・配置(図68-1、写68-1)

八幡宮は、高崎市吉井町今泉に鎮座している。国道254号線吉井郵便局交差点を北に向かい、吉井駅手前を西に折れ、200m程の場所にある。祭神は「品陀和氣命」他6柱で、明治末に町内の多くの神社を合祀して村社の格を得ている。本殿は精緻な彫刻や、作者を示す墨書きがあることなどから、平成16年(2004)11月19日、高崎市指定重要文化財となっている。

境内は東西に長く東に向く。東端に位置する鳥居を潜ると広場を抜けた正面に拝殿が東面して建つ。奥の覆屋の中に本殿が祀られている。

由来および沿革

創建及び由来は不詳であるが、社伝によると天正18年(1590)徳川家康の関東領有に伴い、吉井領二万石を押領した沼定利が、吉井宿の町割りを整備し、自らは氏神「乾」八幡を祀ったのが現在の八幡宮と伝える。



写68-1 全景

本殿(図68-2、表68-2、写68-2～68-4)

拝殿奥の覆屋の中に本殿は東面する。一間社流造板葺屋根で、屋根正面に千鳥破風を付け、向拝は軒唐破風とする。

屋根は板葺で、軒は二軒繁垂木としている。向拝に一对の手挾を付ける。正側面及び背面の四方に大床を廻らし、脇障子をおく。組物は身舎を尾垂木付きの三手先、向拝を連三斗としている。身舎の中備は彫刻嵌込みで、向拝は水引虹梁上部に彫刻を嵌込

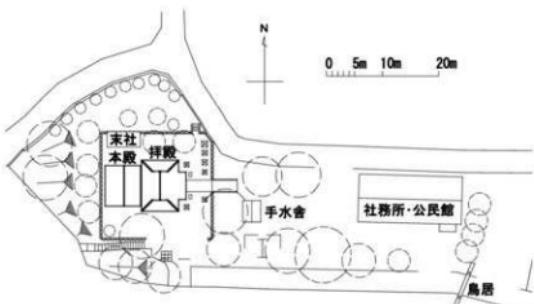


図68-1 配置図

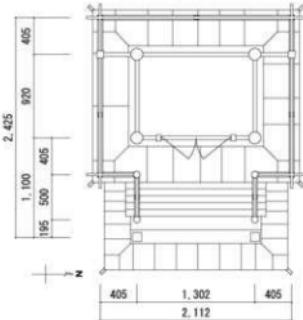


図68-2 平面図(本殿)

表68-2 本殿

建造年代／根拠	弘化5年(1848)／腰支輪墨書	構造・形式	一間社流造(1.30m)、側面1間(0.92m)、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、板葺
工 匠	[彫工]高崎鉛治町 勘蔵	基 础	切石基礎
輪 部	[身舎]丸柱、切目長押、内法長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]三手先、尾垂木 [向拝]連三斗、出三斗
中 備	[身舎]彫刻 [向拝]二重虹梁、彫刻	軒	二軒繁垂木
妻 飾	大瓶束	柱 間 装 置	正面棟唐戸、両側面背面板嵌込
縁・高欄・脇障子	三方大床、脇障子有、階有、浜縁、浜床、階擬宝珠、高欄、跳高欄	床	板張
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[身舎]素木 [向拝]素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎]獅子木鼻、懸魚、支輪彫刻、正面棟唐戸及び脇・両側面背面壁・脇障子(人物、植物)、縁下(蔓草、波模様) [向拝]海老虹梁(唐草絵様、龍一体彫)、木鼻(獅子、狛)、水引虹梁(唐草絵様、松)、手挾(松)		



写68-2 側面



写68-3 海老虹梁



写68-4 虹梁彫刻

んでいる。海老虹梁は反りが少なく、唐草絵様と龍の一体彫とし、渦の巻きは複雑である。彫刻は身舎正面棟唐戸自身と両袖、両側面背面壁に中国故事の彫刻を嵌める。縁下四面にも蔓草、波模様の彫刻とする。身舎向拝に獅子頭と狛、板支輪に波の彫物としている。手挾は植物の彫刻、海老虹梁は龍の一体彫としている。

令和元年から2年(2019~2020)にかけて覆屋と、石組の基壇、本殿の改修工事を行った。主に石組は組直し、大床、高欄の一部、浜縁、浜床の全面改修縁下の蔓草、土台の付替工事とした。

本殿の建造年は縁下の彫刻の裏に、「弘化5年(1848)高崎鉛治町彫師勘蔵」との墨書きがある。他本殿の彫刻、虹梁の絵模様など江戸末期の特徴が現れており、本殿の建造年もほぼ弘化5年(1848)とみて良い。

拝殿(図68-3、表68-3、写68-5~68-7)

正面3間、側面2間、瓦葺入母屋屋根の平入で1間の流向拝が付き東面している。屋根は桟瓦葺で、軒は一軒半繁垂木とし向拝に一对の手挾を付ける。正面及び側面に縁を設け、脇障子をおく。組物は身

舎を出三斗とし、向拝は連三斗としている。身舎の中備は板を嵌込み、向拝は彫刻を嵌込んでいる。海老虹梁は反りが少なく、唐草絵様を掘り込んでいる。巻は多少意匠的な彫になっている。向拝水引虹梁上部に波形と花の彫刻と、獅子鼻が付く。柱間は正面を格子戸とし、両脇を舞良戸、両側面は舞良戸と板戸としている。内部は床を板張で天井を竿縁天



図68-3 平面図(拝殿)

表68-3 拝殿

建造年代／根拠	19世紀中期／建築様式	構造・形式	正面3間(5.54m)、側面2間(3.03m)、入母屋造、平入、向拝1間、瓦葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎
軸 部	[身舎]角柱、切目長押、内法長押　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]出三斗　[向拝]出三斗、連三斗
中 備	[身舎]板　[向拝]彫刻	軒	一軒半繁垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	正面板戸、両侧面背面板張
縁・高欄・脇障子	三方大床、脇障子有、階有、高欄無	床	板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[身舎]素木　[向拝]素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎]錦懸魚　[向拝]獅子木鼻、海老虹梁(唐草絵様)、手鉄(唐草絵様)		



写真68-5 正面



写真68-6 海老虹梁



写真68-7 向拝

井とする。

拝殿の建造年についてはそれを証明する資料は確認できなかったが、水引虹梁の唐草絵様が装飾的であること、水引虹梁の上部の彫刻などから、江戸末期から明治初期の建設と推定する。

まとめ

本殿の建造年代は、弘化5年(1848)の墨書きがある。多彩豪華な彫刻群、虹梁の唐草絵様の巻き具合

などから弘化5年でほぼ間違いない。

拝殿は水引虹梁の唐草絵様の彫刻などの様式は、本殿に比べ比較的新しい。拝殿の建造は本殿に近い建造年代かもう少し新しいと推定され、19世紀中期か後期でよい。

(羽鳥 悟)

【参考文献】

『吉井町誌』吉井町誌編さん委員会 昭和49年

69 辛科神社【からしなじんじゃ】

表69-1

神社名	辛科神社	所在地	高崎市吉井町神保甲435
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人 辛科神社
主祭神	須佐之男命、五十猛命	神事	例大祭(4/9、10/9)、みそぎ流し神事(7/31)
創立・沿革	社伝に大宝年間(701~704)創建と記されている。その後和銅4年(711)多野郡建郡に伴い總鎮守となる(『多野郡誌』)。		
文化財指定	辛科神社(市史跡 昭和46年6月)		

位置・配置(図69-1、写69-1)

辛科神社は、高崎市吉井町神保に鎮座している。鍋川沿いの国道245号線吉井市街地から、富岡方面に向かって左に折れた高台にある。赤城櫻名の山容が一望できる、開けた台地に鎮座している。この地は多胡碑を代表とする上野三碑の所在地に近く、これらをもたらした朝鮮半島からの渡来人が、祀ったといわれる古い歴史を持つ。

南面する鳥居を抜け石段を登ると隨神門となり、さらに階段を登ると奥に拝殿、本殿と続く。左に祈禱所と神楽殿がある。境内を囲むように、杉の大木が覆い鎮守の森を形成し、歴史をしのばせる雰囲気を漂わせている。



図69-1 配置図



写69-1 境内

由来および沿革

社伝によると大宝年間(701~704)の創建と言われ、和銅4年(711)新郡となる多胡郡建郡に伴い總鎮守となる。当時この地は「韓級郷」と呼ばれ「辛科神社」の由来ともいわれる。その後大勧進惟宗入道、小勸進清國、源頼朝の銘のある懸仏が奉納され、寛文元年(1661)領主倉橋久盛により本殿が再建された。祭神は須佐之男命、五十猛命。明治25年(1892)に古社寺保存法、明治39年(1906)郷社の指定を受ける。また昭和46年(1971)6月25日に吉井町文化財指定を受け、現在は高崎市指定史跡となっている。

本殿(図69-2、表69-2、写69-2~69-4)

一間社流造銅板葺屋根で向拝を設け南面する。身舎は間口1間、側面1間で正面に1間の向拝を設け

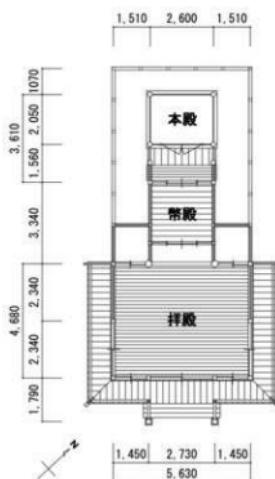


図69-2 平面図(本殿・拝殿)

表69-2 本殿

建造年代／根拠	寛文元年(1661)／棟札	構造・形式	一間社流造(2.60m)、側面1間(2.05m)、向拝1間唐破風付、銅板葺
工 匠	[大工]渡邊市良兵衛	基 础	切石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、切目長押、内法長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]出三斗 [向拝]出三斗、連三斗
中 備	[身舎]板幕股 [向拝]幕股	軒	二軒繁垂木
妻 飾	大瓶束(菱形付)	柱 間 装 置	正面板戸、両側面背面板嵌込
縁・高欄・脇障子	正面のみ縁付、登高欄、階有、浜縁、階擬宝珠高欄	床	板張
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[身舎]朱塗(柱、長押) 極彩色(影刻) [向拝]朱塗(柱、虹梁) 極彩色(影刻)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎外部]両側面、背面壁(花鳥)、木鼻、懸魚 [向拝]虹梁(絵様)、木鼻(象鼻)		



表69-3 拝殿

建造年代／根拠	江戸後期／建築様式	構造・形式	正面3間(5.63m)、側面2間(4.68m)、入母屋造、平入、向拝1間、銅板葺
工 匠	不明	基 础	切石基礎
軸 部	[身舎]角柱、切目長押、内法長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]出三斗 [向拝]出三斗、連三斗
中 備	[身舎]幕股 [向拝]彫刻	軒	一軒疊垂木
妻 飾	板張	柱 間 装 置	正面板戸、両侧面背面板戸・板張
縁・高欄・脇障子	三方大床、擬宝珠高欄、擬宝珠高欄擬宝珠付、 脇障子	床	板張
天 井	格天井		須弥壇・扇子・宮殿 なし
塗 装	[身舎]素木 朱塗(幕股) [向拝]素木 朱塗 (組物、水引虹梁)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎]木鼻 [向拝]獅子鼻、水引虹梁上(龍)		



写真69-5 全景



写真69-6 海老虹梁



写真69-7 内部

は本殿の様式よりは新しいため、拝殿の建築は江戸後期の可能性が高い。

隨神門 (图69-3、表69-4、写69-8~69-10)

隨神門は3間1戸、側面2間の八脚門で、銅板葺切妻屋根で、平入南面する。屋根は銅板葺で軒を二軒半疊垂木とする。組物は出三斗とし、中備は幕股で、妻飾は虹梁大瓶束とする。彫刻は幕股内部、木鼻、虹梁などに見られる。正面虹梁の唐草絵様は花と樹木の浮彫とする。

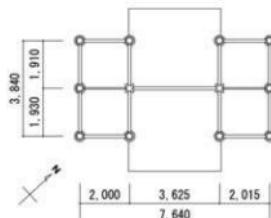


图69-3 平面図(隨神門)

表69-4 隨神門

建造年代／根拠	寛政9年(1797)／棟札	構造・形式	3間1戸四脚門(7.64m)、側面2間(3.84m)、切妻造、平入、銅板葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎(牛伏砂岩)
軸 部	[身舎]丸柱、切目長押、内法長押	組 物	[身舎]出三斗
中 備	[身舎]幕股	軒	二軒半疊垂木
妻 飾	大瓶束	柱 間 装 置	正面板戸、側面板張
縁・高欄・脇障子	なし	床	なし
天 井	なし		須弥壇・扇子・宮殿 なし
塗 装	[身舎]素木、朱塗(幕股)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎]獅子鼻		



写69-8 全景



写69-9 小屋組



写69-10 虹梁 墓股

建造年代は寛政9年(1797)の棟札がある。虹梁の唐草絵様の浮彫、墓股の肩の張り具合などから寛政9年の建造とみてよい。

まとめ

本殿は寛文元年(1661)の棟札がある。前述したように、向拝の象鼻、虹梁に見る刻線彫で比較的よく卷込んだ唐草絵様の渦の巻込み、ほぼ水平に掛けられた海老虹梁、内法長押や組物に極彩色を施した痕跡、比較的肩が張り彫刻が枠からはみ出でていないなどの細部様式から、棟札の寛文元年(1661)と判断する。なお、背面の両側面・背面の彫刻は後補と推定する。

拝殿は身舎の墓股や木鼻の形状と、向拝の唐草絵

様、獅子鼻と明らかに時代の差異がみられる。身舎の木鼻は本殿に近く素朴な形状であるが、時代的に新しいとみる。棟が特定出来ない享保15年(1730)の棟札が拝殿のものと推定できるが、拝殿の様式などから建築は江戸後期と推定する。

隨神門の建造年代は寛政9年(1797)の棟札がある。虹梁の唐草絵様の浮彫、墓股の肩の張り具合などから寛政9年の建造とみてよい。

(羽鳥 悟)

【参考文献】

『多野郡誌』多野郡教育会 昭和2年

『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会
昭和55年

70 土師神社（どしじんじや）

表70-1

神社名	土師神社	所在地	藤岡市本郷字下郷168
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人 土師神社
主祭神	野見宿禰命	神事	太々神楽(3月)、流鏑馬(10月)
創立・沿革	土師神社は本郷及び根岸の鎮守で、野見宿禰を主祭神とする。今から約千三百年の古墳時代に、この地域に土師部の人々が居住して、埴輪や土師器を製造していた時、自分たちの祖先神(氏神)として野見宿禰を祀ったのが起源と言われる(『藤岡市の民家と社寺洋風建築』藤岡市教育委員会 1980年)。		
文化財指定	土師の辻(市史跡 昭和46年4月)		

位置・配置 (図70-1、写70-1)

土師神社は藤岡市南、本郷に位置している。藤岡市から鬼石に向かう前橋長瀬線から東に500m程に入った場所にある。

敷地は南北に細長く、その南端に鳥居がある。鳥居から北に向かって、両側に杉木立が80mほど続く。ここで毎年10月19日に近い日曜日に日光から招いた馬と射手衆で、流鏑馬の神事が行われている。参道を進んだ右手に「土師の辻」(相撲壇)と呼ばれる塚と土俵があり、日本三辻の一つといわれる。相撲の神である「野見宿禰命」にちなんだ古くからの史跡である。

更に進むと右に社務所、左に神楽殿があり、ここでは毎年3月19日に近い日曜日に地元の有志により、32座の神楽が舞われる。正面に草葺屋根にトタ

ン葺の割拝殿があり、そこを潜ると、拝殿・幣殿・本殿と続く。木々に囲まれた境内地は、田畠の中に鎮守の森として存在している。

由来および沿革

この地は国指定史跡の「本郷埴輪窯跡」がすぐ近くにあることから、5世紀後半から6世紀ころに埴輪の生産地であったとされる。この神社の祭神である「野見宿禰命」は相撲の神であるとともに、天皇の死に対してそれまでの殉死を改め、埴輪を埋葬することを進言し、そのことから「土師姓」を与えられたとされる。社伝では6世紀ころの古墳時代に、この地域に土師部の人々が居住して、埴輪や土師器を製造していた時、自分たちの祖先神(氏神)として「野見宿禰命」を祀ったのが起源としている。鎌倉時代の上野国神名帳にも「正五位上 土師明神」と記載されている。明治43年(1910)に近在の十社を合祀し、末社を五社有し現在の形となったとする。

本殿 (図70-2、表70-2、写70-2~70-7)

拝殿の奥に本殿はあり南面する。一間社流造銅板葺で流向拝が付く。

屋根は銅板葺で軒は飛燕打越二軒繁垂木としている。向拝に手挾は無い。浜縁、浜床を持ち、階を登ると正面側面の三方に大床を廻らし、脇障子を置く。跳高欄とし、登高欄は擬宝珠高欄とする。

身舎を丸柱、向拝は面取の角柱とし基礎は土台は無く、自然石の石場建とする。柱間は正面棟唐戸で、両側面、背面とも嵌込みの板とする。組物は身舎を出三斗、向拝を連三斗としている。身舎の中備は鳥の彫刻を嵌込んだ幕板とし、水引虹梁上部に花の彫刻を嵌込んだ幕板とする。海老虹梁は反りが少なく、唐草絵様が彫られている。水引虹梁、海老虹梁とも唐草絵様は線刻彫でよく巻んでいる。妻飾

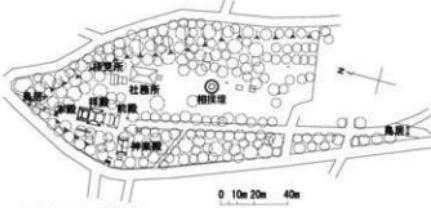


図70-1 配置図



写70-1 境内

は二重虹梁に笈形付大瓶束とする。彫刻は身舎に木鼻と墓股の中、向拝は獅子鼻と象鼻とする。

全体は朱色に塗られ丸柱、垂木脇障子は黒色に塗られている。また墓股内部の彫刻は極彩色で、内法

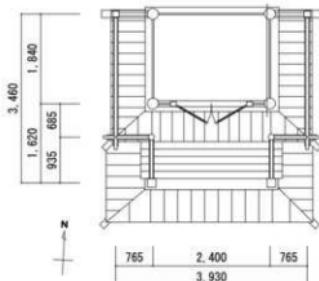


図70-2 平面図(本殿)

表70-2 本殿

建造年代／根据	17世紀後半から18世紀初期／建築様式	構造・形式	一間社流造(2.40m)、側面1間(1.84m)、向拝1間、銅板葺
工 匠 不明		基 础	切石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、切目長押、内法長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]出三斗 [向拝]出三斗、連三斗
中 備	[身舎]墓股 [向拝]墓股	軒	飛燕打越二軒緊垂木
要 飾	虹梁、大瓶束(笈形付)	柱 間 装 置	正面棟唐戸、両側面背面板壁嵌込
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、跳高欄、登高欄、擬宝珠高欄、脇障子有、浜縁、浜床	床	板張
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮鏡	なし
塗 装	[身舎]朱塗(全体)黒色(柱、墓股)、彩色(墓股内、懸魚) [向拝]朱塗、黒色(垂木)	飾 金 物 等	なし
絵 画	[身舎]長押・板支輪、妻板(黒絵模様)、両側面・背面壁(唐獅子絵模様)	材 質	檜、楡
彫 刻	[身舎]木鼻、墓股内彫刻 [向拝]木鼻、象鼻、墓股内彫刻		



写70-2 社殿全景



写70-3 本殿側面



写70-4 正面



写70-5 海老虹梁



写70-6 組物 虹梁



写70-7 墓股 彫刻

長押に青色の模様が塗られている。

まとめ

建造年代を示す資料は見当たらない。向拝の象鼻、虹梁に見る刻線彫で比較的良く巻込んだ唐草模様の渦の巻込み、ほぼ水平に掛けられた海老虹梁、比較的肩が張り彫刻がはみ出していない墓股などの細部様式が特徴的であり、近接する高崎市吉井町の辛科神社の本殿と様式が近い。辛科神社は寛文元年(1661)の棟札があり、この本殿も同時代の17世紀後半から18世紀初期の可能性が高い。

(羽鳥 悟)

【参考文献】

『藤岡市の民家と社寺洋風建築』藤岡市教育委員会 昭和55年

71 大塔寺天満宮（だいとうじてんまんぐう）

表71-1

神社名	大塔寺天満宮	所在地	藤岡市小林中里608
旧社格	不明	所有者・管理者	大塔寺組
主祭神	菅原道真公	神事	不明
創立・沿革	享保11年(1726)建設と伝える。当時の小林大塔寺村の人々が学問の神として祀られる菅原道真公を慕い、九州の太宰府天満宮より分身を受けて、建立したと伝える。昭和62年(1987)覆屋が建設され、その中に祀る。		
文化財指定	大塔寺天満宮(市重文 昭和47年4月)		

位置・配置（図71-1、写71-1）

大塔寺天満宮は藤岡市東部神流川にほど近い低地に小高い築山の上、東に向いて建てられている。北面道路から南に入り、西に向くと鳥居がある。小高い築山に沿って登ると、覆屋がありその中に本殿は祀られている。

由来および沿革

享保11年(1726)の棟札があるが、当時の小林大塔寺村の人々が学問の神として祀られる菅原道真公を慕い九州の太宰府より分身を受けてこの社殿を建立したと伝える。

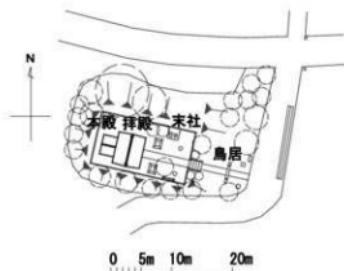


図71-1 配置図



写71-1 境内

本殿（図71-2、表71-2、写71-2～71-7）

覆屋の中に本殿はあり東面する。一間社流造柿葺とし、屋根正面に千鳥破風を付け、向拝は軒唐破風とする。

屋根は柿葺で、軒は飛燕打越二軒繁垂木として、向拝に一对の手挟を持つ。浜縁、浜床を持ち、階を登ると正面側面の三方に大床を廻らし、脇障子を置く。跳高欄とし、登高欄は擬宝珠高欄とする。

身舎を丸柱、向拝は面取の角柱とし基礎は覆屋の床板に乗る。柱間は正面棟戸で、両側面、背面とも嵌込みの板とする。組物は身舎を出三斗、向拝を連三斗としている。身舎の中備は幕股とし、水引虹梁上部に花の彫刻を嵌込んでいる。海老虹梁は反りが少なく、唐草絵様が彫られている。水引虹梁、海老虹梁とも唐草絵様は線刻彫でよく巻込んでいる。妻飾は二重虹梁に笈形付大瓶束とする。彫刻は身舎を木鼻、向拝は獅子鼻と象鼻。水引虹梁上に彫刻と手鉄彫刻とする。全体は素木であるが、彫刻と支輪に彩色がみられる。

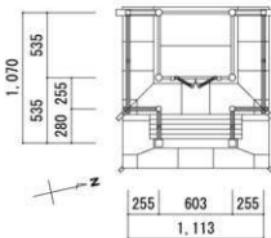


図71-2 平面図(本殿)

表71-2 本殿

建造年代／根拠	享保11年(1726)／棟札	構造・形式	一間社流造(0.60m)、側面1間(0.54m)、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、柿葺
工 匠	不明	基 础	
軸 部	〔身舎〕丸柱、切目長押、内法長押 〔向拝〕角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	〔身舎〕出三斗 〔向拝〕連三斗
中 備	〔身舎〕幕股 〔向拝〕幕股	軒	飛燕打越二軒繁垂木
妻 飾	虹梁、笈形付大瓶束	柱 間 装 置	正面棟唐戸、両側面背面板壁嵌込
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、跳高欄、登高欄、擬宝珠高欄、脇障子、浜縁、浜床	床	板張
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	〔身舎〕素木 彩色痕(脇障子) 〔向拝〕素木 彩色痕(彫刻)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	檜、檜
彫 刻	〔身舎〕木鼻、脇障子(故事) 〔向拝〕木鼻(象、獅子)、水引虹梁上(花鳥)、手鉄		



写真71-2 正面



写真71-3 棟札



写真71-4 虹梁 木鼻



写真71-5 海老虹梁 手鉄



写真71-6 幕股



写真71-7 彫刻

まとめ

建造年代を示す資料は棟札がある。今回の調査では一部しか確認できなかったが、『藤岡市の民家と社寺洋風建築』において全容を確認されている。その棟札から享保11年(1726)の建築となっている。向拝の象鼻、虹梁に見る刻線彫で比較的良く巻込んだ唐草模様の渦の巻込み、ほぼ水平に掛けられた海老虹梁、比較的肩が張った幕股などの細部様式から、

18世紀中期の特徴が現れている。これらからこの本殿は棟札の享保11年の建築とみてよい。

(羽鳥 悟)

【参考文献】

『藤岡市の民家と社寺洋風建築』藤岡市教育委員会 昭和55年

73 地守神社 [じもりじんじゃ]

表73-1

神社名	地守神社	所在地	藤岡市下日野2238
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 地守神社
主祭神	大和武尊、菅原神宮、辛科神宮、八幡神宮、大宮大神宮	神事	なし
創立・沿革	当地は藤岡市西南、金井郵便局から上日野藤岡線を鮎川沿いに6kmほど上流のかつて日野町役場などがあった駒留地区にあり、鮎川左岸に位置する。		
文化財指定	地守神社の大杉(市天記 昭和52年6月)		

位置・配置(図73-1、写73-1)

当地は藤岡市西南、金井郵便局から上日野藤岡線を鮎川沿いに6kmほど上流でかつて日野町役場などがあった駒留地区にあり、鮎川左岸に位置する。県道沿い鮎川右岸に鳥居があるが、神社本体は左岸と



図73-1 配置図

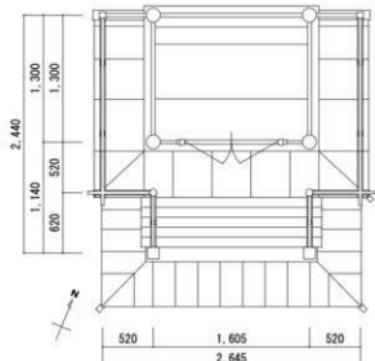


図73-2 平面図(大宮大神宮)



写73-1 境内

なる。かつてはその間に橋があったが、現在は無い。参道を進むと割拝殿があり、その奥、拝殿をかねた覆屋、その中に五つの本殿がある。その裏山を50分ほど登ったところに奥宮がある。

由来および沿革

拝殿奥の覆屋に右から、八幡神宮、大和武尊神宮、大宮大神宮、菅原神宮、辛科神宮の五棟の本殿が並ぶ。大宮大神宮、辛科神宮は同規模で八幡神宮はそれより少し小さく、他の二社殿はさらに小さい。大宮大神宮に正保3年(1646)と享保元年(1716)の棟札がある。規模の大きい三社はほぼ同じ様式から同年代の建立であろう。

大宮大神宮(図73-2、表73-2、写73-2～73-4)

一間社流造板葺屋根で向拝を設け南面する。身舎は間口1間、側面1間で正面に1間の向拝を設け5段の階が付く。屋根は板葺で軒は身舎向拝共二軒繁垂木とし、正面浜縁、浜床で、他に三方大床が付き、脇障子を付ける。階脇は擬宝珠高欄とし、大床は跳高欄が付く。床は板張で、天井は竿縁天井とする。

軸部は身舎を丸柱で、足固貫、腰貫、頭貫を通して、頭貫端には木鼻を付ける。内法長押、切目長押共四方に回す。向拝は面取角柱とし頂部に水引虹梁を架ける。柱間は正面板戸で、両側面背面は組込みの板張とする。組物は身舎を出三斗、向拝を出三斗(側面は連三斗)で、中備は身舎、向拝共幕股である。海老虹梁はやや段違いに掛けられているが、反りはやや大きい。妻飾は虹梁大瓶束で笠形を付ける。彫刻は懸魚、木鼻に見られる程度である。水引虹梁、海老虹梁に見る唐草絵様の渦は円に近く比較的よく巻込んでいる。塗装は全体が素木で彩色されていない。当大宮大神宮本殿は、正保3年(1646)と享保元年(1716)の棟札が有るが、水引虹梁の渦と若葉の様式、幕股などから享保元年とみるのがほぼ妥当である。

八幡神宮(図73-3、表73-3、写73-5~73-7)

一間社流造板葺屋根で向拝を設け南面する。身舎は間口1間、側面1間で正面に1間の向拝を設け5段の階が付く。屋根は板葺で軒は身舎向拝共二軒繁垂木とし、正面浜縁、浜床で、他に三方大床が付き、脇障子を付ける。階脇は擬宝珠高欄とし、大床

は跳高欄が付く。床は板張で、天井は竿縁天井とする。

軸部は身舎を丸柱で、足固貫、腰貫、頭貫を通して、頭貫端には木鼻を付ける。内法長押、切目長押共四方に回す。向拝は面取方柱とし頂部に異形虹梁を架ける。柱間は正面板戸で、両側面背面は組込みの板張とする。組物は身舎を出三斗、向拝を出三斗(側面は連三斗)で、中備は身舎、向拝共幕股である。海老虹梁はやや段違いに掛けられているが、反りはやや大きい。妻飾は虹梁大瓶束で笠形は無い。

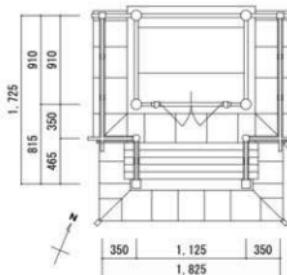


図73-3 平面図(八幡宮)

表73-2 大宮大神宮

建造年代／根拠	享保元年(1716)／棟札	構 造 ・ 形 式	一間社流造(1.61m)、側面(1.30m)、向拝1間、板葺
工 匠	[大工]謙原村 大谷門之助	基 础	自然石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、切目長押、内法長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]出三斗 [向拝]連三斗、出三斗
中 備	[身舎]幕股 [向拝]幕股	軒	二軒繁垂木
妻 飾	大瓶束(笠形付)	柱 間 装 置	正面板戸、両側面背面板張
縁・高欄・脇障子	三方大床、脇障子、階・浜縁、浜床、階擬宝珠高欄、跳高欄	床	板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮鏡	なし
塗 装	[身舎]素木 [向拝]素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎]木鼻、懸魚 [向拝]虹梁(絵様)、木鼻		



写73-2 全景



写73-3 虹梁 幕股



写73-4 海老虹梁

表73-3 八幡神宮

建造年代／根拠	18世紀初期／建築様式	構造・形式	一間社流造(1.13m)、側面(0.91m)、向拝1間、板葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎
軸 部	[身舎]方柱、切目長押、内法長押 [向拝]方柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]出三斗 [向拝]出三斗、連三斗
中 備	[身舎]幕股 [向拝]幕股	軒	二軒繁垂木
妻 飾	大瓶束	柱 間 装 置	正面板戸、両側面背面板張
縁・高欄・脇障子	三方大床、脇障子、階、浜縁、浜床、階擬宝珠高欄、跳高欄	床	板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[身舎]素木 [向拝]素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎]木鼻 懸魚 [向拝]虹梁(絵様) 木鼻		



写真73-5 全景



写真73-6 虹梁 木鼻



写真73-7 海老虹梁

彫刻は懸魚、木鼻に見られる程度である。水引虹梁、海老虹梁に見る唐草絵様の渦は円に近く比較的よく巻込んでいる。塗装は全体が素木で彩色されていない。当八幡宮本殿は、前述の大宮大神宮本殿とほぼ似た造りであり、様式から大宮大神宮本殿と同時期の18世紀初期の建造とみて良い。

辛科神宮 (图73-4、表73-4、写73-8～73-10)

一間社流造板葺屋根で向拝を設け南面する。身舎は間口1間、側面1間で正面に1間の向拝を設け5段の階が付く。屋根は板葺で軒は身舎向拝共二軒繁垂木とし、正面浜縁、浜床で、他に三方大床が付き、脇障子を付ける。階脇は擬宝珠高欄とし、大床は跳高欄が付く。床は板張で、天井は竿縁天井とする。

軸部は身舎を丸柱で、足固貫、腰貫、頭貫を通して、頭貫端には木鼻を付ける。内法長押、切目長押共四方に回す。向拝は面取角柱とし頂部に水引虹梁を架ける。柱間は正面板戸で、両側面背面は組込みの板張とする。組物は身舎を出三斗、向拝を出三斗(側面は連三斗)で、中備は身舎、向拝共幕股である。海老虹梁はやや段違いに掛けられているが、反

りはやや大きい。妻飾は虹梁大瓶束で笠形は無い。彫刻は懸魚、木鼻に見られる程度である。水引虹梁、海老虹梁に見る唐草絵様の渦は円に近く比較的よく巻込んでいる。塗装は全体が素木で彩色されていない。前2棟と同様に、様式から18世紀初期の建造とみるのが妥当である。

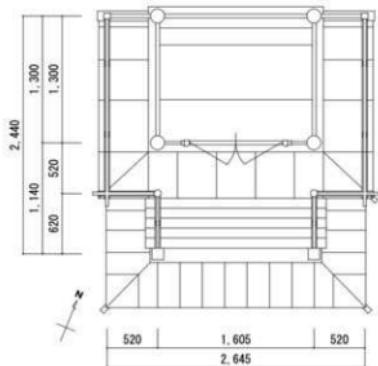


图73-4 平面図(辛科神宮)

表73-4 辛科神宮

建造年代／根拠	18世紀初期／建築様式	構造・形式	一間社流造(1.61m)、側面(1.30m)、向拝1間、板葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、切目長押、内法長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]出三斗 [向拝]出三斗 連三戸
中 備	[身舎]幕股 [向拝]幕股	軒	二軒簷垂木
妻 飾	大瓶束(菱形付)	柱 間 装 置	正面板戸、両侧面背面板張
縁・高欄・脇障子	三方本床、脇障子、階5段、浜床、浜縁、登高欄、擬宝珠高欄、本床跳高欄	床	板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[身舎]素木 [向拝]素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	檜
彫 形	刻 [身舎]木鼻 [向拝]虹梁(絵様) 木鼻		



写真73-8 全景



写真73-9 虹梁 木鼻



写真73-10 海老虹梁

まとめ

大宮大神宮本殿、八幡宮本殿、辛科神宮本殿とも形式はほぼ同様で同時期に建てられた可能性が高い。

正保3年(1646)と享保元年(1716)の棟札があるが、唐草絵様の巻きも少し緩く17世紀中期には遅れないないとみる。3棟とも18世紀初期の建築とみるのが妥当であろう。

【参考文献】

『藤岡市の民家と社寺洋風建築』藤岡市教育委員会 昭和55年

(羽鳥 悟)

75 子寶神社【こだからじんじゃ】

表75-1

神社名	子寶神社	所在地	藤岡市譲原甲644
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 子寶神社
主祭神	大六卒運神、大国主神	神事	なし
創立・沿革	三波川村から譲原村が分離するときに、総鎮守である姥神社の神を分祀し、姥に対して子寶神社を祀るといわれる。		
文化財指定	なし		

位置・配置（図75-1、写75-1）

当地は藤岡市鬼石町（旧多野郡鬼石町）譲原にあり、国道462号を鬼石市街から神流町方面に向かい、1kmほど進むと右に満福寺の山門がある。その先を右に入り、道に沿って100m程の左に子寶神社の鳥居がある。鳥居をくぐり60段ほどの急な石段を登ると境内となる。右に社殿があり、左に手水舎、

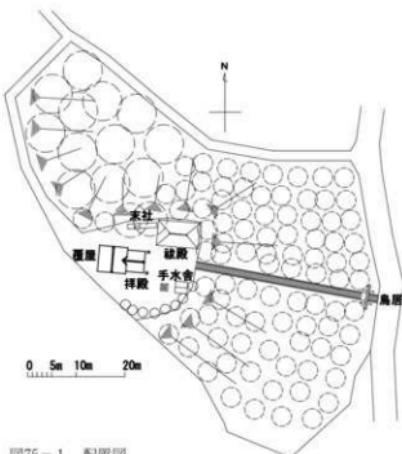


図75-1 配置図



写75-1 拝殿 覆屋

正面に拜殿と覆屋がある。右奥に末社が並ぶ。鬱蒼とした杉木立の中に境内はあり、木々の間から、眼下に神流川沿いの集落が望める。

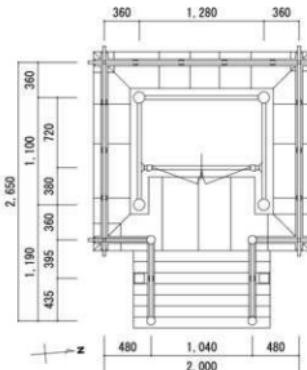
由来および沿革

三波川から譲原村が分離するときに、総鎮守である姥神社の神を分祀し、姥に対して子寶明神を祀るという。

本殿（図75-2、表75-2、写75-2～75-7）

覆屋を兼ねた拜殿の奥に本殿はあり、東面する。一間社流造板葺とし流向拝とする。

屋根は板葺で、軒は打越二軒繁垂木としている。正面側面及び背面の四方に大床を廻らし、脇障子は無い。組物は身舎を出三斗、向拝を連三斗としている。身舎の中備は平三斗の詰組とし、水引虹梁上部に松の彫刻を嵌込んだ幕板とする。身舎と向拝は直線の繁虹梁とし、下端に眉を彫り、唐草絵様は無い。向拝の水引虹梁の唐草絵様は刻線彫で良く巻い



写75-2 平面図(本殿)

表75-2 本殿

建造年代／根拠	17世紀前半から中期／建築様式	構造・形式	一間社流造(1.28m)、側面1間(1.10m)、向拝1間、板葺
工 匠	不明	基 础	切石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、切目長押、内法長押 [向拝]角柱、水引虹梁、繫虹梁	組 物	[身舎]出三斗 [向拝]連三斗
中 備	[身舎]平三斗継 [向拝]幕股	軒	打越二軒繫垂木
妻 飾	虹梁、大瓶束	柱 間 装 置	正面棧唐戸、両側面背面板壁嵌込
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、跳高欄、登高欄、擬宝珠高欄、脇障子無、浜縁、浜床	床	板張
天 井	板張	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[身舎]朱塗(全体)、黒塗(長押) [向拝]朱塗(全体)、黒塗(満)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	桼、檜
彫 刻	[身舎]無 [向拝]木鼻、幕股内(松)		



写真75-2 覆屋 本殿側面



写真75-3 正面



写真75-4 側面



写真75-5 海老虹梁



写真75-6 幕股



写真75-7 組物 木鼻

ている。彫刻は水引虹梁上の幕股内の松の彫刻以外は無く、身舎両側面背面に中國故事の絵模様とする。内法長押、支輪、妻板に黒色の絵模様とする。

この本殿の特徴は正面棧唐戸が1尺ほど柱から奥まって付く。柱のすぐ前に柱巾いっぱいに届く鳥居が置かれている。

が有るが、これが本殿の建造年かは不明である。水引虹梁の渦は簡素であるがしっかりと巻き込んでいる。また幕股の肩も張っていることなどから、本殿は17世紀前半から、17世紀中期の建造の可能性がある。

(羽鳥 悟)

まとめ

建造年は拝殿内の書箱蓋に安永4年(1775)の墨書き

【参考文献】

『鬼石町誌』鬼石町教育委員会 昭和59年

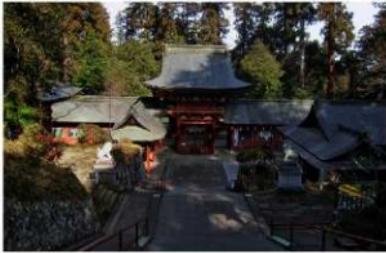
77 一之宮貫前神社（いちのみやぬきさきじんじゃ）

表77-1

神社名	一之宮貫前神社	所在地	富岡市一ノ宮1535
旧社格	国幣中社	所有者・管理者	宗教法人 一之宮貫前神社
主祭神	蘇我守神、葦大伴	神事	年間71度以上の祭事あり。主な祭事 例大祭（3/15）、月次祭（毎月1日）、御戸開祭（3/14、12/12）、鹿占神事（12/8）、式年遷宮（12年毎の御遷宮祭）等、多くの特殊神事が現存する。
創立・沿革	碓氷郡東横野村鷲宮に物部姓磯部氏が奉斎し、次いで南方鋪川岸に至り、蓬ヶ丘綾女谷にお祀りしたのが安閑天皇元年（531）3月15日と伝えられている。天武天皇白鳳2年（674）3月15日に初度の奉幣があり、醍醐天皇の延喜の制には明神大社に列せられ、上野國一ノ宮として朝廷や民間の崇拝を集め、明治4年（1871）國幣中社に列格されたが、終戦とともに社格制度の廃止より、一ノ宮貫前神社と称し現在に至っている（本殿・拝殿修理工事報告書2014）。		
文化財指定	貫前神社本殿（国重文 明治45年2月）、貫前神社拝殿、楼門（国重文 昭和51年5月）、白嗣月宮鑑（国重文 明治45年2月）、銅鏡（梅雀文様、竹虎文様）（国重文 大正6年4月）、貫前神社の鹿占習俗（県重無民 昭和56年5月）、貫前神社奉納鏡、貫前神社銅製燈籠（市重文 平成9年4月）、貫前神社のスダジイ（市天記 昭和60年6月）		

位置・配置（図77-1、写77-1）

一ノ宮貫前神社は群馬県の南西部、富岡市一ノ宮の蓬ヶ丘と呼ばれる丘陵の北斜面の菖蒲谷といわれる渓間に南面して鎮座する。北に高田川、南は鍋川を臨む一ノ宮の町が広がっている。東もしくは南から参道をのぼって総門に至り、そこから石階段を下ったところに楼門が位置する、いわゆるぐだり参道となっている。楼門の両脇に東西回廊があり、奥には拝殿、さらに奥へ本殿と並ぶ。楼門に向かって



写77-1 境内全景



左に手水舎、右に社務所があり、その前を過ぎると神楽殿がある。また、総門より境内に入った左手の平地は遷宮の際の仮殿敷地となっている。境内は総面積約26,000坪あり、周囲には杉の大木が林立していて厳肅な雰囲気が漂う。

由来および沿革

創建は、安閑天皇元年(531)3月15日と伝えられている。醍醐天皇の延喜の制には明神大社に列せられた。旧社格は國幣中社に列格されが、社格制度の廃止により「一之宮貫前神社」と称し現在に至っている。御祭神は「経津主神、姫大神」を祀り、年間

多くの祭事がある。なかでも古くから式年遷宮が行われていて、現在は申年の12月12日の真夜中に、仮殿敷地に建立された仮殿に御祭神を遷座し、酉年の3月13日に元の本殿に戻るという神事が続けられている。

写77-2 本殿 (図77-2、表77-2、写77-2~77-7)

建造年代は棟札より寛永12年(1635)11月21日である。徳川三代將軍家光公の命により造営され、大工は棟札により鈴木近江守藤原長次、木原本木充藤原義久の両名である。これを元禄11年(1698)五代將軍綱吉公の命により大修理を加え、その後屋根の葺替

表77-2 本殿

建造年代／根据	寛永12年(1635)／棟札	構 造 ・ 形 式	三間社入母屋造(5.45m)、側面3間(7.36m)、一重二階、妻入、向拝3間、檜皮葺
工 匠	[大工]鈴木近江守藤原長次、木原本木充藤原義久	基 础	切石基礎
軸 部	[身舎]土台、丸柱、足固貫、腰貫、頭貫、切目長押、内法長押 [向拝]角柱、頭貫	組 物	[身舎]出組拳鼻付 [向拝]平部三斗、端部連三斗
中 備	[身舎]幕殿 [向拝]幕殿、手挾	軒	[身舎]二軒本繁垂木 [向拝]打越二軒本繁垂木
妻 飾	猪目懸魚、豕又首	柱 間 装 置	(正面)両開板扉、(側面・背面)板壁
縁・高欄・脇障子	浜縁、三方縁、木階七級、擬宝珠付高欄、彫刻脇障子	床	疊敷(修理工事報告書)
天 井	[外陣・内陣]格天井 [内々陣]竿縁(修理工事報告書)	須弥壇・扇子・宮殿	不明
塗 装	黒漆、朱塗(椎及び浜縁より下)、楓彩色(長押以上)、幕殿及び脇障子影刻	飾 金 物 等	破風、長押、扉、垂木先端、隅木先端、脇障子、高欄、千木、堅男木等多数
繪 画	[外陣・内陣]天井絵(草木)、壁絵(修理工事報告書)	材 質	不明
彫 刻	[身舎]幕殿、脇障子、木鼻 [向拝]幕殿、手挾、獅子鼻		



写77-2 外観：正面・側面



写77-3 外観：側面



写77-4 向拝



写77-5 雷電小窓



写77-6 組物・妻飾



写77-7 脇障子・切目縁

や塗装及び彩色補修など多くの修理が行われ、その記録が残っている。近年では平成21年に屋根の葺替を含み幅広い修理工事が行われた。規模は、正面3間、側面3間の入母屋造妻入で向拝3間を設ける。身舎の桁行3間のうち正面側1間を外陣、背面側2間を内陣とする。内陣中央部に「真御柱」と呼ぶ円柱が立ち、柱より南に向けて2階への階を据える。2階は内々陣と称し素木造りとする。外見からは判別できないが、内部が上下2層の構造で上層に神座

を置いてあるのは珍しく「貫前造」といわれる。また、内々陣の南側東妻面に、「雷神小窓」と呼ばれる窓があるのも他に類を見ない点である。

拝殿（図77-3、表77-3、写77-8～77-10）

建造年代は本殿・楼門と同年代の建造と伝えられている。延享2年(1745)の屋根葺替修理の棟札が残されている。その後多くの修理が行われた記録が残り、平成21年(2009)に本殿と同時に修理工事が行

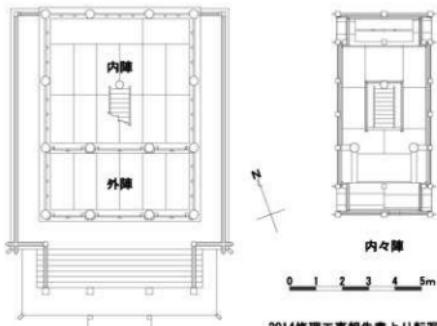


図77-2 平面図(本殿)

2014修理工事報告書より転写

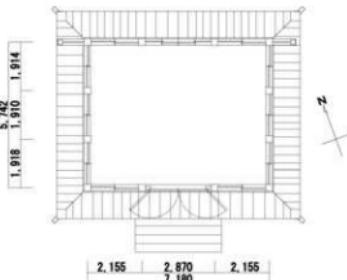


図77-3 平面図(拝殿)

写77-3 拝殿

建造年代／根拠	寛永12年頃(1635頃)／建築様式	構造・形式	正面3間(7.18m)、側面3間(5.74m)、入母屋造、平入、正面軒唐破風付、檜皮葺
工 匠	不明	基 础	切石基礎
軸 部	土台、角柱、足固貫、内法貫、頭貫、切目長押、内法長押	組 物	出組
中 備	幕板	軒	一軒半繁垂木
妻 鮒	猪目懸魚、又首	柱 間 装 置	(正面中央間)両開戸唐戸戸、(背面3間)引連格子戸、(その他)中敷居入引連格子戸、(腰壁)板壁
縁・高欄・脇障子	四方縁、石階四級、脇障子	床	拭板張
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	不明
塗 装	朱塗、黒漆、極彩色(内法長押、行間)	飾 金 物 等	破風、長押等
絵 画	天井画(草木)	材 質	不明
彫 刻	幕板		



写77-8 外観：正面



写77-9 外観：正面・側面



写77-10 内部：格天井・天井画

われた。規模は、正面3間、側面3間の入母屋造平入桧皮葺で正面軒唐破風を設ける。祝詞舎を介して本殿と接続している。正面中央は唐戸造の開き戸で、正面両側及び東西面は腰高窓、背面には格子戸、周囲には溜縁がまわっている。内法長押、行間に極彩色の装飾を施し、他は朱塗としている。

樓門（図77-4、表77-4、写77-11～77-13）

建造年代は上層の東側面の間頭貫内面の墨書きにより寛永12年(1635)9月吉日である。規模は、下層が正面1間、側面2間、組物は二手先とするが、正面は3間分を備え、正背面中央に幕股を配置し、側面

にもそれぞれ幕股2箇所を据えている。

上層は正面3間、側面2間で、側面の寸法は下層より小さいが、正面は同寸である。正背面中柱は方柱で、柱間装置は正面両脇間が蓮子窓、背面中央間が板唐戸とする。組物は、三手先、二軒繁垂木、屋根は入母屋造、妻又首組、銅板葺とするが、もとは柿板葺であった。なおすべてに朱塗を施している。

東西廻廊（図77-4、表77-5、写77-14～77-16）

建造年代を示す資料はないが、建築様式から本殿・拝殿・楼門と同年代の建築と推定する。廻廊は楼門を中心としその左右に取りついている。東・西

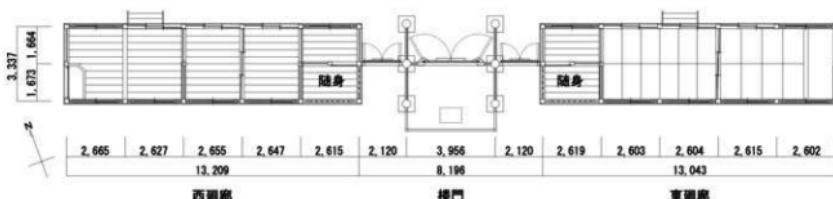


図77-4 平面図(楼門・東西回廊)

表77-4 横門

建造年代／根拠	寛永12年(1635)／墨書き	構 造 ・ 形 式	1間1戸横門(3.95m)、側面2間(3.33m)、上層正面3間、側面2間、入母屋造、平入、銅板葺
工 匠	不明	基 础	切石基礎
軸 部	[上層]丸柱、縁長押、地貫、腰貫、内法貫、頭貫、台輪 [下層]丸柱、地貫、腰貫、内法貫、頭貫、台輪	組 物	[上層]三手先 [下層]二手先
中 備	[下層]幕股	軒	二軒繁垂木
妻 飾	懸魚	柱 間 裝 置	[上層](正面)両脇間蓮子窓、背面中央間板唐戸、他板壁 [下層]板壁、両開戸
縁・高欄・脇障子	[上層]四方高欄	床	[上層]板 [下層]切石敷
天 井	[上層]不明 [下層]格子天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、極彩色(幕股)	飾 金 物 等	釘頭、高欄裏金物巻、裏甲金物
絵 画	なし	材 质	不明
彫 刻	虹梁、肘木、幕股		



写77-11 正面



写77-12 側面



写77-13 二手先、高欄

の廻廊とともに、正面5間、側面2間の切妻造銅板葺、基礎は切石基礎である。軸部は方柱で地覆、腰長押、内法長押、軒桁で固め柱上部には、舟肘木を設ける。軒は一軒疊垂木、妻には虹梁棊股、懸魚がみられる。連子窓を縁、格子戸を黒塗とする以外は朱塗である。内部は化粧屋根裏で、妻と同じく虹梁棊股がみられる。東廻廊と西廻廊で、間仕切りに相違がある他、床の疊敷と拭板張に違いもあるが、構

造面・彩色などは同じである。なお、楼門脇の一間にはそれぞれ隨身像が置かれている。

日枝神社 (図77-5、表77-6、写77-17~77-19)

一之宮貫前神社の末社である日枝神社は、境内西の仮殿敷地北側に位置する。建造年代を示す資料を欠くが本社の旧社殿と伝えられている。仮殿敷地には、日枝神社の隣に内宮、外宮の社が並び、西側に

表77-5 東西廻廊

建造年代／根拠	17世紀中期／建築様式	構造・形式	[東廻廊]正面5間(13.04m)、側面2間(3.33m)、単層切妻造、銅板葺 [西廻廊]正面5間(13.20m)、側面2間(3.33m)、単層切妻造、銅板葺
工 匠	不明	基 础	[東廻廊]切石礎石 [西廻廊]切石礎石
軸 部	[東廻廊]角柱、地覆、腰長押、内法長押 [西廻廊]角柱、地覆、腰長押、内法長押	組 物	[東廻廊]舟肘木 [西廻廊]舟肘木
中 備	なし	軒	[東廻廊]一軒疊垂木 [西廻廊]一軒疊垂木
妻 飾	[東廻廊]虹梁棊股、懸魚 [西廻廊]虹梁棊股、懸魚	柱 間 裝 置	[東廻廊]連子窓、格子窓、格子引違戸、板壁 [西廻廊]連子窓、格子窓、格子引違戸、板壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	[東廻廊]疊敷 [西廻廊]拭板敷
天 井	[東廻廊]化粧屋根裏 [西廻廊]化粧屋根裏	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[東廻廊]朱塗、縁(連子窓)、黒漆(格子戸) [西廻廊]朱塗、縁(連子窓)、黒漆(格子戸)	飾 金 物 等	[東廻廊]釘頭、六葉釘頭、破風板金物 [西廻廊]釘頭、六葉釘頭、破風板金物
繪 画	なし	材 质	不明
彫 刻	[東廻廊]虹梁棊股 [西廻廊]虹梁棊股		



写77-14 東廻廊：正面



写77-15 西廻廊：正面



写77-16 東廻廊：側面

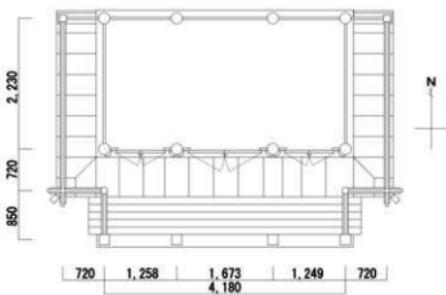


図77-5 平面図(日枝神社)

写77-6 日枝神社

建造年代／根拠	17世紀前半／建築様式	構造・形式	三間社流造(4.18m)、側面1間(2.23m)、向拝3間、銅板葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎、切石基礎
軸 部	〔身舎〕丸柱・土台・切目長押、腰長押、内法長押〔向拝〕角柱・水引虹梁	組 物	〔身舎〕出三斗 〔向拝〕連三斗
中 備	〔身舎〕幕股 〔向拝〕幕股	軒	〔正面〕打越二軒繁垂木 〔背面〕二軒繁垂木
妻 飾	虹梁・琴坂首・蕉懸魚	柱 間 装 置	〔正面〕両開板扉 〔側面・背面〕板壁
縁・高欄・脇障子	浜床、木階六級、登振宝珠高欄付、三方縁組 高欄付、脇障子	床	拭板張
天 井	鏡天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	〔身舎〕朱塗、極彩色(内法長押上)、黒漆(板扉) 〔向拝〕朱塗	飾 金 物 等	破風板拌、破風尻、板扉隅
繪 画	極彩色天井絵画(八雲)、極彩色壁絵(松、梅、牡丹)	材 質	不明
彫 刻	幕股、手挾		



写77-17 外観：正面・側面



写77-18 側面：妻飾り



写77-19 内観：天井・内壁

は、二十二末社が外周を囲うように並んでいる。建物外部は、退色していくで判別できないが、内法長押より上の部材や壁に極彩色の紋様が描かれている。内法長押より下では、板扉を黒漆、軸部・壁・縁高欄などは朱塗とする。海老虹梁はなく幕股、手挾に彫刻が見られる程度で、比較的簡素な外観である。内部は、壁と天井に松や梅などの極彩色の絵が描かれている。建造年代は建築様式から17世紀前半と推定する。

まとめ

徳川三代将軍家光の命により造営された本殿をはじめ、拝殿、楼門は棟札・墨書きなどにより江戸時代前期の建築であり、全国的にも珍しい大規模な下り参道を有する。境内には、前述の建物以外に月読神社、若御子神社、二十二末社、伊勢内外宮などが現存する社殿群であり、これらが一体となって社殿

を形成し、修理を重ねながら建ち並んでいるのは見事である。また、本殿・拝殿は随所が極彩色で塗られた彫刻や飾金物で覆われており、群馬県内の江戸初期における神社建築の装飾化過程を知ることができると貴重な建物である。

(野口忠男、久保喜由、齊藤朋行)

【参考文献】

- 『一之宮貫前神社 社誌』一之宮貫前神社 昭和40年
- 『一之宮貫前神社調査報告書』群馬県教育委員会 昭和53年
- 『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会 昭和54年
- 『貫前神社本殿及び拝殿保存修理工事報告書』公益財團法人文化財建造物保存技術協会 平成26年
- 『群馬縣北甘楽郡史』本田亀三著 昭和3年
- 『富岡甘楽平成神社明細誌』群馬県神社總代会富岡甘楽支部 平成5年
- 『雲のながれに』富岡市観光協会 平成7年
- 『富岡市の文化財』富岡市教育委員会 平成28年

78 横瀬八幡宮（よこぜはちまんぐう）

表78-1

神社名	横瀬八幡宮	所在地	富岡市上高瀬864
旧社格	村社	所有者・管理者	横瀬八幡宮總代
主祭神	菅原道臣命	神事	例祭(10月第2日曜日)
創立・沿革	慶長18年(1613)創建、旧高瀬村の人々によって当地の繁栄と子孫の安穏のために建造されたという(棟札より)。		
文化財指定	八幡宮(横瀬)(市重文 昭和47年2月)		

位置・配置 (図78-1、写78-1)

高瀬西横瀬地区の高瀬会館より西へ60m程の道路北端、丁字交差路の角に位置する。周囲は住宅に囲まれており、お社が道路端に南を正面として建てられていて、境内は存在しない。前面道路は地区の主要道路であり、車の通行もかなり多い。本殿が朱色に塗られていなければ、気付かずに入り過ぎてしまう程の大きさである。

由来および沿革

この社殿の建造年代を示す棟札は2枚残されていて、それによると、江戸時代の初めの慶長18年

(1613)、旧高瀬村の人々によって当地の繁栄と子孫の安穏のために建造され、その後貞享3年(1686)に建替えられたという。聞取りによると、当初は高瀬に同じお社が3つあり、現存する八幡宮は高瀬会館の裏にあったものが現在地へ移転されたという。残りの2社は別のところへ移転されたらしいが、詳細は不明であるという。祭神は菅原道臣命(ほむだわけのみこと、応神天皇)を祀る。昭和47年2月8日付で「富岡市指定重要文化財」に指定されている。

日本式 本殿 (図78-2、表78-2、写78-2~78-7)

本殿は棟札により貞享3年(1686)に建造である。工匠については不明である。

規模は正側一間社流造、側面1間で、向拝1間、切妻平入銅板葺である。当初は桧皮葺であったという。三方に組高欄付の切目縁を廻らし、脇障子を建て、正面に浜床、木階五級を付す。軸部は、身舎では切石礎石に丸柱を立てて切目長押、腰長押、内法長押、頭貫で固め、向拝に角柱を立てて水引虹梁でつないでいるが、身舎とは垂木でつながれていて虹梁はなく手挾で固められている。

組物は、身舎および向拝を出組とし、中備は身舎

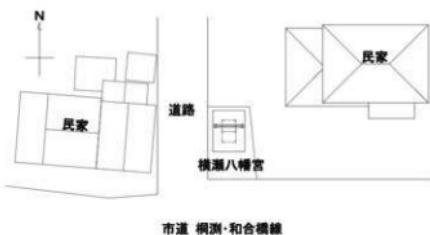


図78-1 配置図



写78-1 境内全景

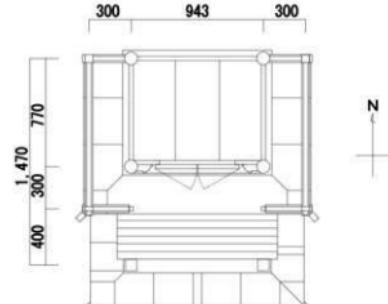


図78-2 平面図(本殿)

表78-2 本殿

建造年代／根拠	貞享3年(1686)／棟札	構造・形式	一間社流造(0.94m)、側面1間(0.77m)、向拝1間、銅板葺
工 匠	不明	基 础	切石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、土台、切目長押、腰長押、内法長押 [向拝]角柱、水引虹梁	組 物	[身舎]出組 [向拝]出組
中 備	[身舎]間斗束 [向拝]幕股	軒	[正面]打越二軒繁垂木 [背面]二軒繁垂木
妻 飾	大瓶束、鍍(ヒレ)付蕉懸魚、降懸魚	柱 間 装 置	[正面]両開板扉 [側面・背面]板壁
縁・高欄・脇障子	浜床、木階五級、三方縁組高欄付、脇障子	床	拭板張
天 井	化粧屋根裏	須弥壇・扇子・宮鏡	なし
塗 装	朱塗	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	[身舎]木鼻(渦文)、虹梁廻(渦文) [向拝]木鼻(渦文)、水引虹梁(渦文)、手挾		



写真78-2 外観：向拝正面



写真78-3 向拝：組物・手挾



写真78-4 側面：妻飾り



写真78-5 側面：腰組・浜床



写真78-6 内部：天井



写真78-7 内部：正面

では間斗束、向拝では本幕股である。柱間装置は、身舎正面を両開き板戸とし、他3面は板壁とする。軒は正面打越二軒繁垂木で、背面は二軒繁垂木とし、妻飾は東西切妻面とも大瓶束として鍍付鈎懸魚を飾る。彫刻は、身舎や向拝の木鼻や虹梁廻りに渦文が見られる。

まとめ

八幡信仰は、菅原別命を祭神とし、弓矢の神として古くから広く武士に信仰され、さらに庶民の間にも広がったものであるという。横瀬八幡宮は古くから地区の信仰も厚く、地域に根付いていて、現在も

しっかりとした管理組織が組まれている。10月の例祭は、近くの高瀬会館で獅子舞い等も行われ、地区のお祭りで賑わうそうである。

建物の彫刻や向拝の幕股の形は質素なつくりであり、中世に近い手法が感じられる。横瀬八幡宮本殿は江戸時代初期の八幡宮建築として、棟札から造営年が判明する貴重な遺構である。

(野口忠男)

【参考文献】

- 『富岡市の文化財』富岡市教育委員会 平成28年
『雲のながれ』富岡市観光協会 平成7年

80 妙義神社【みょうぎじんじゃ】

表80-1

神社名	妙義神社	所在地	富岡市妙義町妙義3
旧社格	県社	所有者・管理者	宗教法人 妙義神社
主祭神	日本武尊、豊受大神、普原道真公、稚大納言 美穂之御子神	神事	例祭(4/15)、山開き祭(5/5)、紅葉祭(11/3)
創立・沿革	宣化2年(537)(社伝)、欽明天皇の代に創立、推古天皇の代に別当を置き、光仁天皇宝龟年(770~781)中に再興(『神社明細帳』)。		
文化財指定	妙義神社本殿・幣殿・拝殿・唐門・總門(国重文 昭和56年6月)、妙義神社 隅神門・袖廻廊・銅鳥居・石垣(県重文 昭和34年8月)、妙義神社波己曾社殿(旧本殿)、妙義神社神楽殿(旧拝殿)(県重文 昭和43年5月)、妙義神社南・東・北社務所及び御殿(市重文 平成元年3月)、妙義神社青銅製燈籠(市重文 平成5年10月)、円空作不動明王坐像(市重文 平成20年3月)、紙本着色地蔵菩薩雲駒記(国重文 昭和34年6月 東京国立博物館收藏)、妙義神社のウラジロガシ(県天記 平成6年3月)		

位置・配置(図80-1、写80-1)

妙義山の主峰白雲山の東山麓に所在し、その主要建物はほぼ標高450~550mに位置する。境内へは県道196号線から参道に入る。正面を東向きとし、總門、参道、隨神門、唐門、拝殿・幣殿・本殿とほぼ一直線に並び建てられている。敷地を形成する石垣は規模の壮大さ、築造技術の高度さといい見事なものである。

由来および沿革

元は波己曾の大神と称し後に妙義と改められた。古くより朝野の崇敬殊に篤く、開運、商売繁盛の神、火防の神、学業児童の神、縁結びの神、農耕桑蚕の神として広く世に知られ、関東甲信越地区より参拝する者が多い。江戸時代は歴代將軍を始め、加賀の前田公ほか諸大名の崇敬篤く上野東叢山の宮、御代々御兼帶御親祭の神社となった。その御宿坊を宮様御殿と称し、御殿よりの東面を望む景色は関東平野を一望できる。



写80-1 境内全景



図80-1 配置図

本殿・幣殿・拝殿(図80-2、表80-2、写80-2~80-7)

三間社入母屋造、側面2間、平入、銅瓦葺、の本殿と、正面1間、側面3間、両下造、銅瓦葺、の幣殿及び正面3間、側面2間入母屋造、平入、銅瓦葺の拝殿がひとつの屋根で覆われた權現造の建築で、拝殿正面に千鳥破風が付き、向拝1間軒唐破風付きとなっている。建物は東向きに建ち、屋根は神社内の他の建物が全て柿葺であったが、この建物だけは、元から銅瓦葺であった。宝曆6年(1756)の棟札や昭和大修理時に構成部材から宝曆4~7年(1754~1757)の年号が確認された。建物は彫刻・漆塗・彩色・鉄奐染め(唐木まがい)・銚金具で全体が覆われた本格的な装飾建築である。特に壁面に嵌め込まれた彫刻パネルはこの年代としては国内トップクラスで、装飾彫刻は床下部分にまで及んでいる(国指定重要文化財)。

表80-2 本殿・幣殿・拝殿

建造年代／根据	宝曆6年(1756)／棟札	構造・形式	權現造[本殿]三間社入母屋造(4.66m)、側面2間(3.962m)、平入、銅瓦葺 [幣殿]正面1間(4.66m)、側面3間(6.059m)、両下造、銅瓦葺 [拝殿]正面3間(9.32m)、側面2間(4.66m)、入母屋造、平入、正面千鳥破風付、向拝1間、軒唐破風付、銅瓦葺
工 匠	[大工]棟梁：飯村正工允藤原久敬、松本播磨 藤原(主計)佳房、松本主計尚吉 [彫工]彫物 師棟梁：江戸安藤利助政成 他	基礎	[本殿]石製亀腹石 [幣殿・拝殿]延石
軸 部	丸柱、地長押、縁長押、内法長押、頭貫、(本殿獅子頭付)	組物	[本殿]三手先、波型尾垂木付(二段) [幣殿・拝殿]二手先、軒支輪に彫刻
中 備	幕股	軒	二軒本繁垂木
妻 飾	虹梁大瓶束、六葉・樽の口付拝懸魚	柱間裝置	[本殿]無目敷鶴居、両開間唐戸、板扉建付數鶴居横板壁、浮彫影刻板 [幣殿]鶴良戸、火頭窓、横板壁 [拝殿]棟戸、舞良戸、横板壁
緑・高欄・脇障子	切目縁、耳板付、縁束、擬宝珠高欄(菊花)、 緑高欄架木が曲線	床	板張、疊敷(須弥壇前)
天 井	格天井(本殿は天井桁が二手出る)	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(和様)、扇子
塗 装	黒漆塗、弁柄漆塗(軸部、組物、軒)、漆塗金箔押(本殿柱)、彩色(彫刻類)、淡黄染胡粉搭	飾金物等	鍍金、煮黒味、焼漆
繪 画	幣殿・拝殿の天井板に狩野派絵師による紙絵、 獅子の内壁画(後世のもの)	材質	檜
彫 刻	欄間透彫(本殿・幣殿・拝殿) 外部 牡丹に唐獅子 内部 松に鷹)、丸桁向拝柱全面、向拝繁虹梁(龍丸彫)、柱頭(獅子)、肘木、尾垂木(波丸彫)、幕股一本造、本殿壁板(波に浮舟彫)		



写80-2 正面



写80-3 侧面



図80-2 平面図(本殿・幣殿・拝殿)

2018.6.6



写80-4 正面組物



写80-5 外部侧面



写80-6 本殿組物



写80-7 拜殿内部

**からもん
唐門 (図80-3、表80-3、写80-8~80-10)**

正面1間、側面1間、平唐門、銅瓦葺。本殿・幣殿・拝殿と同一レベルの境内最上段に位置する。東面し、本社と建物中心をほぼ合わせた同一軸線上の前面に建つ。柱は胡麻殻決りや金欄卷で仕上げられ、木部には軒廻り以外全て鉄塗装（唐木まがい）が施されている。正面棟唐戸と両側面には彫刻技法の異なる鳳凰の浮彫彫刻がある。内部の鏡天井には宝暦時の狩野派の絵師、中澤燕洲により描かれた柔軟な龍が見える。昭和大修理の際に柱頭部の金具裏面から宝暦7年(1757)の墨書きが発見された（国指定重要文化財）。

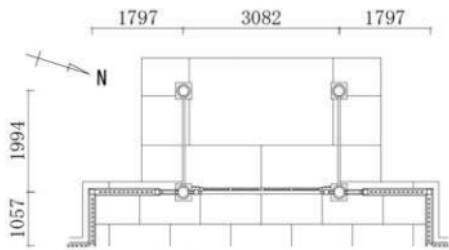


図80-3 平面図(唐門)

表80-3 唐門

建造年代／根拠	宝暦7年(1757)／墨書き	構造・形式	1間1戸平唐門(3,082m)、側面1間(1,994m)、銅瓦葺
工 匠	【彫工】石原藤助珍隆【鎧屋】鶴屋藤二郎 他	基 墓	礎柱礎石、方形加工石
軸 部	柱胡麻殻決・上下棕付丸柱・柱頭籠彫影刻梁行に腰貫、内法貫、四周頭貫、台輪	組 物	禪宗様拳鼻付岡組、繪様付実肘
中 備	詰組	軒	一軒本繁重木、支外垂木茨垂木
妻 飾	虹梁大瓶束	柱間裝置	正面上面縦彫形付蹴放、菊唐草浮彫彫刻小脇板、両開棟唐戸
縁・高欄・脇障子	なし	床	なし
天 井	組物一手先間小天井板張り 鏡天井板張り	須弥壇・眉子・宮殿	なし
塗 装	黒漆塗、弁柄漆塗、漆塗金箔押、置上彩色、平彩色	飾 金 物 等	柱金欄巻、方立柱根巻金欄巻、薑座、頭貫、正面虹梁形頭貫見返し中備、丸桁、妻虹梁木鼻、化粧桟木、垂木、唐破風等
繪 画	天井画(龜)墨絵 狩野玉燕弟子中澤燕州画之の銘あり。	材 質	総檜
彫 刻	正面虹梁、棟戸嵌板、側面貫壁	柱頭部菊花籠彫、妻側松に鷹透彫、棟唐戸鳳凰浮彫	



写80-8 正面



写80-9 側面



写80-10 内部組物

波己曾社社殿(図80-4、表80-4、写80-11~80-13)

三間社入母屋造、側面2間、妻入、銅板葺の本殿と正面1間、側面3間、両下造、銅板葺の幣殿、正面3間、側面2間入母屋造、平入、銅板葺の拝殿からなる権現造りの社殿で、南向きに建っている。屋根は本殿が拝殿の棟を越え、拝殿入母屋造り屋根の正面に千鳥破風となって納まっている。この建物は

現在の本社が建立する前の本社建築であった。『由来記』から、明暦2年の建立とされる。宝暦造當時に現本社両脇に本殿と拝殿が移築され、幣殿は撤去された。昭和47年(1972)に現位置に建っていた本地堂を移築した際に跡地にこの2棟に幣殿を復原して再建した(県指定重要文化財)。

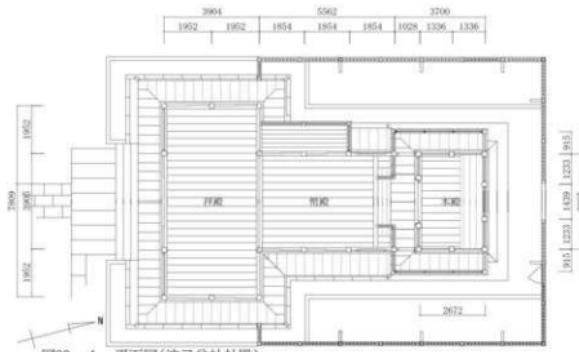


図80-4 平面図(波己曾社社殿)

表80-4 波己曾社社殿

建造年代／根拠	明暦2年(1656)頃建立／白雲山妙義大権現由来。元禄15年(1702)	構造・形式	権現造[本殿]三間社入母屋造(3,905m)、側面2間(2,672m)、妻入、銅板葺 [幣殿]正面1間(3,905m)、側面3間(5,562m)、両下造、銅板葺 [拝殿]正面3間(7,809m)、側面2間(3,904m)、入母屋造、平入、正面千鳥破風付、銅板葺
工 匠	不明	基 础	基礎は切石、本殿は漆喰瓦腹。
軸 部	本殿 身舎柱は丸柱、幣殿境の柱は角 拝殿 全て丸柱 磁石建ち。地長押、内法長押、頭貫(木鼻付)	組 物	出組
中 備	幕板	軒	二軒本繁垂木、化粧屋根裏堅板張。
妻 飾	虹梁、大瓶束、拝懸魚	柱 間 裝 置	本殿 正面棟唐戸、その他付敷鷗居横板張。拝殿 格子戸、蔀戸、舞良戸、横板壁
縁・高欄・脇障子	木口縁、逆蓮頭親柱(本殿のみ)	床	現在は畳敷(旧本社時代は板張)
天 井	出折 越格天井(拝殿、本殿)、竿縁天井(幣殿)	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	黒塗(元は表面金箔押)(柱)、極彩色(内法長押上小壁、肘木、幕板)	飾 金 物 等	入母屋破風に置紋、入八双。垂木、隅木端、長押金具。天井格縫金具
絵 画	なし	材 質	檜
影 刻	透彫り彫刻付幕股動物に植物の組み合わせ、板支輪に波頭の彫刻		



写80-11 正面



写80-12 侧面



写80-13 内部

表80-5 隨神門

建造年代／根拠	17世紀中期(波己曾社殿と同時期)／建築様式	構造・形式	3間1戸八脚門(5.09m)、側面2間(3.03m)、切妻造、平入、銅板葺(当初柿葺)
工 匠	不明	基 础	方形切石、地覆石
軸 部	丸柱、地覆長押、腰貫、飛貫、頭貫	組 物	柱上に平三斗組拳鼻付 絹様満巻付実肘木
中 備	耳付轟股	軒	二軒繁垂木、地垂木、飛檐垂木
妻 飾	二重虹梁大瓶束	柱 間 裝 置	棟通り中央部は解放、両脇間は羽目板張
縁・高欄・脇障子	なし	床	なし
天 井	化粧裏板堅張	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	弁柄塗、墨塗、黄土塗	飾 金 物 等	柱根巻、煮黒味(鉄)、破風板八双、小口、鬼、菊紋、漆箔(銅板)
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	なし		



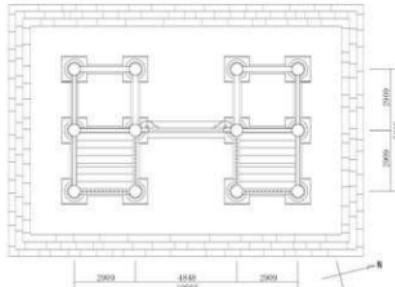
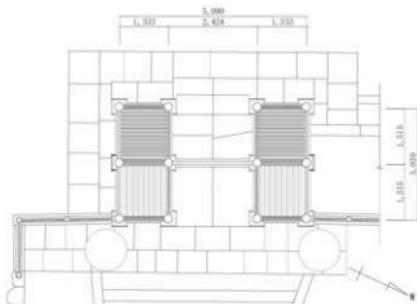
写真80-14 正面



写真80-15 側面



写真80-16 内部組物



總門(图80-6、表80-6、写80-17~80-19)

3間1戸八脚門の形式を持つ切妻造りで屋根は銅板葺(当初柿葺)で東向きに建っている。正面両脇間に仁王像が立ち、仁王門とも呼ばれている。三棟造りの古式を残すが建ちが高く屋根が大きい事や彫刻の様式等、江戸時代後期の特徴を示している。建立は小屋東の墨書きより安永2年(1773)。奉納額持送り鳥天狗彫刻には、底面に山ノ神住豊琳斎(岸亦八)の刻銘がある(国指定重要文化財)。

神楽拝観所(图80-7、表80-7、写80-20~80-22)

正面6間、側面2間、切妻造銅板葺。本社殿、唐門と同じく境内奥の一画にある。正面は解放されている。この建物だけ素木である。昭和53年(1978)に拝観所下部の石垣積み替え工事に伴い解体修理を実施し、屋根を柿葺から銅板葺に葺き替えた。この工事で破風の飾り金具や懸魚から宝曆6~7年の墨書きが発見された。建立は明確な年代指標に欠くが、建築様式等から18世紀後半と推定する。

表80-6 総門

建造年代／根拠	安永2年(1773)／墨書	構造・形式	3間1戸八脚門(10,666m)、側面2間(5,818m)、切妻造、平入、銅板葺(当初柿葺)
工 匠	[大工]大棟梁：群馬郡金井村住岸豊後守、八木原村住畠田文右衛門、妙義住松本五兵衛他 [彫工]山ノ神住豊麻斎(岸亦八)	基礎	方形加工石、布切石(礎石、礎盤がひとつの石から造りだされている)
軸 部	丸柱、頭貫	組物	[外部]和洋出組(拳鼻付)、実肘木(渦巻絵様) [内部]和様出三斗(拳鼻付)
中 備	丸彫影刻付幕股	軒	二軒本繁垂木、地垂木、飛檣垂木、化粧裏板 堅張り
妻 飾	二重虹梁大瓶束	柱間装置	羽目板堅横張、額縁付堅連子
縁・高欄・船障子	なし	床	なし
天 井	化粧裏板堅張	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	朱塗、黒漆塗、弁柄漆塗、平彩色、緑青塗、 胡粉塗、黄土塗	飾金物等	柱根巻、木口 銅板(煮黒味)、貫木口 銅板(鍍金)
絵 画	なし	材質	檜
彫 刻	柱頂部波の蘿彫、幕股内(菊、牡丹、薄)、妻部(唐獅子)		



写80-17 正面



写80-18 側面



写80-19 組物

表80-7 神楽拝観所

建造年代／根拠	宝暦6年(1756)18世紀後半推定／建築様式、 金物の墨書	構造・形式	正面6間(10,00m)、側面2間(3,636m)、切妻造、銅板葺
工 匠	不明	基礎	方形切石
軸 部	角柱	組物	なし
中 備	なし	軒	一軒深垂木
妻 飾	木連格子	柱間装置	板戸
縁・高欄・船障子	なし	床	板張
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	素木、古色塗装	飾金物等	破風入り八双、長押出八双、鬼板
絵 画	なし	材質	杉、修理化粧材 米松
彫 刻	なし		

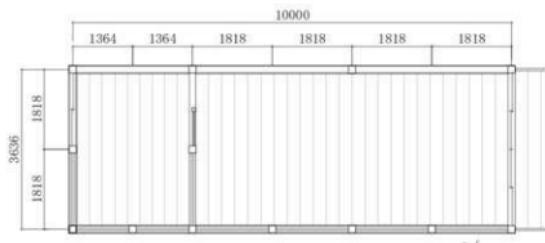


図80-7 平面図(神楽拝観所)



写80-20 正面



写80-21 側面



写80-22 内部

長床・袖廻廊(図80-8、表80-8、写80-23~80-25)

正面3間、側面1間、切妻造銅板葺。木部弁柄塗り。随神門の脇にあり、正面は解放、背面、左側面は連子窓である。垂木より上の部分は後補の改造が窺える。建立は古文書や様式から旧本社である波己曾社が造営された17世紀中期の明暦2年(1656)頃に一連で整備されたものとみられる。

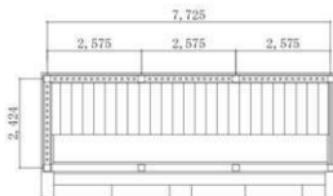


図80-8 平面図(長床・袖廻廊)

御殿(図80-9、表80-9、写80-26~80-28)

総門右手の石垣上にあり、宮様御殿とも呼ばれて



図80-9 平面図(御殿)

表80-8 長床・袖廻廊

建造年代／根柢	17世紀中期／建築様式	構造・形式	正面3間(7,725m)、側面1間(2,424m)、切妻造、銅板葺
工 匠	不明	基 础	礎 切石
輪 部	面取り角柱、腰貫二段、内法貫	組 物	平三斗、絵様渦巻付肘材
中 備	なし	軒 柱	一軒疊垂木
妻 鮒	虹梁幕板	間 裝 置	西面解放、堅羽目板張、連子窓、腰羽目板張
縁・高欄・監障子	なし	床 土間	板敷
天 井	井化粧裏板横張り	須弥壇・層子・宮殿	なし
塗 装	弁柄塗、墨塗、黄土塗	飾 金 物	等 破風板八双、木口、拝菊紋 漆箔(銅板)
絵 画	なし	材 質	檜
影 刻	なし		



写80-23 正面



写80-24 側面



写80-25 内部

写80-9 御殿

建造年代／根拠	安政3年(1856)／棟札	構造・形式	正面11,454m、側面10,50m、入母屋造、銅板葺(当初柿葺)
工 匠	[大工] 棟梁：安藤忠摩藤原一親、安藤三平藤原成美 他	基 础	切石礎石(凝灰角礫岩)、東石
輪 部	方柱、綱長押、内法長押、天井長押	組 物	なし
中 備	なし	軒	地垂木・飛檐垂木の二軒平行垂木で木負・茅負・裏甲(上、下材)を設けた反り軒
妻 飾	木連格子、鰐付猪口懸魚	柱 間 裝 置	漆喰壁、腰板、障子
縁・高欄・監障子	南、東二方樽縁、高欄なし	床	疊敷、板張
天 井	竿縁天井、上段のみ格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	薺木	飾 金 物 等	化粧隅木銅板巻、棟に菊紋、鬼板
絵 画	なし	材 質	杉
彫 刻	なし		



写80-26 正面



写80-27 側面



写80-28 内部

いる。寛永13年(1636)妙義神社が江戸上野東葛山寛永寺の座主輪王宮の隠居所になり、その宿所として御殿が建てられた。その後嘉永元年の火災により、御殿・宝殿等を焼失した。指定時は嘉永5年(1852)再建とされている。前身は膨大な大きさであったが現存する建物は4分の1程度で社務所と廊下で一体となっている。内部は4室からなり、南西隅の8畳間は上段の間で正面に床と棚天袋を備えている。各室共部屋の広さに比べて天井が高く、幕末の住宅の傾向を示している。明治36年(1903)屋根修理、土台板壁等木部の部分修理が行われた。昭和31年(1956)屋根を柿葺から銅板に葺き替えた。その後平成29年(2017)屋根及び緑側、壁等の修理を実施した際、安政3年(1856)の棟札が発見された(市指定重要文化財)。

社務所 (図80-10、表80-10、写80-29~80-31)

3棟の建物が中庭を挟んで廊下等で接続し御殿と繋がっている。南社務所は建物位置から接客の機能を持ち、南面の玄関は式台形式、唐破風屋根を付ける他、柱の断面も大きく、床板も幅4尺を使用する等格付けしている。東社務所は事務所機能を持つ他、北社務所と共に宮司家族の居住に使用されてい



図80-10 平面図(社務所)

表80-10 社務所

建造年代／根据	江戸末期／御殿と同時期頃	構造・形式	〔南社務所〕桁行14.99m、梁間9.39m切妻造、銅板葺、平入　〔東社務所〕桁行16.65m、梁間8.91m、一部二階建 寄棟造、銅板葺、妻入 〔北社務所〕桁行16.46m、梁間9.40m、一部二階建切妻造、銅板葺、平入
工 匠	不明	基 础	地覆石、〔南社務所玄関〕方形切石(凝灰角礫岩)
軸 部	角柱	組 物	平三斗
中 備	南社務所玄関；和様平三斗が2組	軒	〔主屋〕一軒疊垂木　〔玄関〕正面唐破風板、茨垂木　一軒疊垂木
妻 飾	南社務所主屋：二重虹梁形式、東、貫。玄関：虹梁太瓶束。東上大斗肘木で化粧樋木を受ける。	柱 間 裝 置	漆喰壁、火頭窓、板壁、アルミサッシ
縁・高欄・脇障子	なし	床	板張、疊敷
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	杉、南社務所玄関 檜
彫 刻	南社務所玄関 正面柱間頭貫絵様渦文、木鼻絵様		



写真80-29 正面



写真80-30 背面



写真80-31 唐破風水虹梁

る。建立は御殿と同じ幕末頃と思われる。明治36年(1903)に屋根葺き替え、土台・柱根縫等木部修理、豊替え。昭和34年(1954)屋根を柿葺から銅板葺に変更。昭和50年(1975)東社務所、昭和53年北社務所修理。平成30年(2019)南社務所の便所、浴室、接続部分の台所、居間、北社務所の便所修理を実施した。

まとめ

妙義神社は総延長183m、高さ9.1mに及ぶ石垣を築造して得た平坦地に構築された近世社寺建築であり、自然と一体になった神社の佇まいが特徴である。本殿拝殿を始めとする境内の諸建造物は江戸時代前期から後期にかけての物で江戸時代建築の壯麗な趣を持っている。貫前神社等の江戸初期の建物に比較して、彫刻パネルが壁面に造及んでいる建物としては県下では早期な物である。特に江戸中後期の本社殿は18世紀頃の県内を代表する建築として貴重な存在である。

(松井良一)

【参考文献】

- 『重要文化財 妙義神社 本殿・幣殿・拝殿 附神饌所 附透塀 唐門 総門 修理工事報告書』財團法人文化財建造物保存技術協会編 平成元年
- 『妙義神社隨神門・袖廊廻保存修理工事報告書』財團法人文化財建造物保存技術協会編 平成19年
- 『妙義神社波己曾社社殿保存修理工事報告書』財團法人文化財建造物保存技術協会編 平成14年
- 『妙義神社社務所及び御厨調査報告書』財團法人文化財建造物保存技術協会編 平成元年
- 『妙義神社御殿保存修理工事報告書』㈱町田工業編 平成30年
- 『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会 文化財保護課 昭和54年
- 『北甘楽郡神社財産社殿及工作物登録台帳』群馬県
- 『上野国国社明細帳10』群馬県文化事業振興会 平成17年
- 『妙義町誌下巻』妙義町 平成5年
- 『寺社の彫刻開闢編』平成24年
- 『歴史と信仰の山妙義山』昭和55年

81 (妙義) 菅原神社 ((みょうぎ)すがわらじんじゃ)

表81-1

神社名	菅原神社	所在地	富岡市妙義町菅原1423
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 菅原神社
主祭神	菅原道真公	神事	歳旦祭(1/3)、勤学祭(1月～3月)、春季例祭3月(太々神楽)、秋季例祭10月(太々神楽)、除夜祭(12/31)
創立・沿革	創建は天暦4年(950年)2月と伝えられ、祭神は菅原道真公で25歳の時に自ら彫ったとされる木像が伝えられている。また他説には延喜元年(901年)に菅原道真公が大宰府に流された時、道真公第十一子、滋賀命とともに召使いであった菅根の乙彦の故郷、上野国妙義山麓菅根の里に落ちのび住まいを移したゆかりがもともとある。		
文化財指定	菅原神社本殿(市重文 昭和63年3月)、菅原神社の大ヒノキ(県天記 平成6年3月)		

位置・配置 (図81-1、写81-1)

富岡市妙義町菅原地区にある神社である。富岡市役所から西へ12kmの山間部にあり、北側には妙義山、妙義神社があり、城山と称する山の西南部に位置し石段が数段に分かれた参道の脇には杉がたくさんあり、杉木に囲まれた中にある。また道真公幼少期時代の足形を刻んだといわれる「御足石」という石が残っており、江戸時代には寺子屋で子ども達が

素足で上り下り学業成就を祈願したと伝えられている。

由来および沿革

現存する菅原神社本殿の建立時期は、寛政8年(1796)の落雷により、山門だけ残り社殿は焼失し、当時の領主小幡藩松平玄蕃守忠恵によって、文政5年(1822)再建されたといわれている。また落雷火災の時に本殿の鬼面の彫刻だけが残り、再利用されて

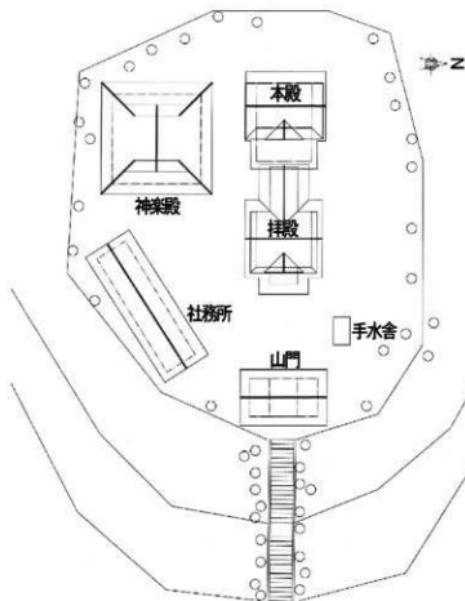


図81-1 配置図

いる。板壁の彫刻は菅原道真公が大宰府へ流された様を表され、波と扇で妙義神社本殿の影響を受けたと思われ、江戸中期の建築様式として富岡市の重要文化財に指定されている。

本殿 (図81-2、表81-2、写81-2~81-7)

建立時期は、寛政8年(1796)の落雷により、山門だけ残り社殿は焼失し、当時の領主松平玄蕃守忠恵によって、文政5年(1822)再建され奉納されたのが



写81-1 境内全景

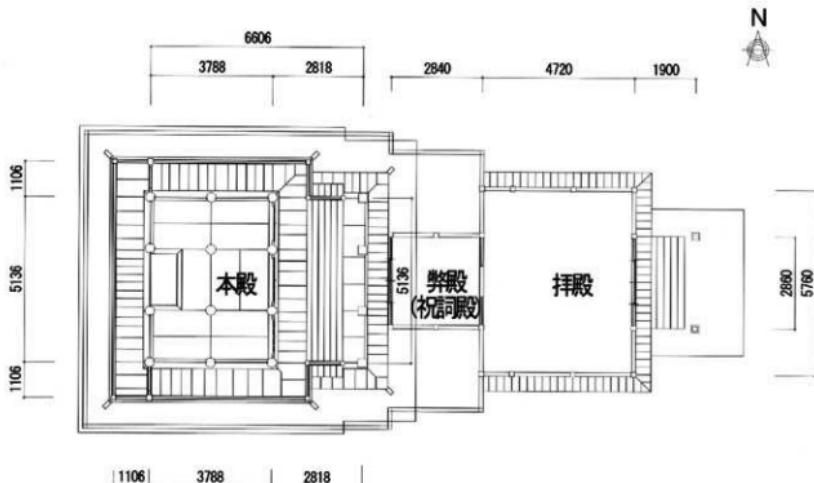


图81-2 平面図(本殿)

表81-2 本殿

建造年代／根据	19世紀前期／建築様式	構造・形式	三間社流造(5.13m)、側間(3.78m)、千鳥破風付、向拝3間、軒唐破風付、亞鉛鉄板葺
工 匠	不明	基 础	石造亀割、高縁束石、浜縁布切石
軸 部	土台、丸柱、切目長押、腰長押、頭貫、内法 長押、向拝角柱、唐獅子木鼻、婆木鼻、手扶	組 物	二手先拳鼻付、絵様実肘木
中 備	幕板	軒	二軒累垂木
要 飾	二重海老虹梁、蕉懸魚、雲文懸魚	柱 間 装 置	折棟唐戸、桟唐戸開戸
緑・高欄・脇障子	高欄四周、脇障子、擬宝珠高欄	床	不明
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇、扇子
塗 装	朱塗、極彩色(桐羽目彫刻)、柱、虹梁、組物	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	虹梁、木鼻、欄間、板壁		



写81-2 全景



写81-3 背面・側面



写81-4 向拝



写81-5 裏面



写81-6 虹梁



写81-7 組物

本殿と神楽殿と伝える。本殿内部中央に架けられている錦旗に文政5年(1822)の墨書銘が見られること、建物細部様式から推測すると文政年間(19世紀前期)の建立とされている。

中期を思わせる浮彫であり、妙義町に所存する国指定重要文化財妙義神社本殿の影響を受けた装飾であると思われ、類似建築としての価値が認められる。

(三好建正)

まとめ

菅原神社本殿は彫刻やその他の細工がしっかりとしていており、江戸後期でありながら壁面彫刻は江戸

【参考文献】

『菅原神社本殿調査報告書』財団法人文化財建造物保存技術協会 昭和61年

82 高太神社【たかたじんじゃ】

表82-1

神社名	高太神社	所在地	富岡市妙義町下高田661
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 高太神社
主祭神	大山咋命、磐田別命、息長足姫命	神事	例祭(3/15)、禊祭(7/18)、秋祭(10/15)、新嘗祭(11/22)
創立・沿革	高太神社は、かつての村社の一つで、弘仁年間に創建された旧日枝神社、その後長禄2年(1458)に再建される。現在地に鎮座していた旧日枝神社と同村字新光寺鎮座の旧八幡神社を合祀して高太神社と改称した(平成10年3月富岡市教育委員会現地説明文)〔妙義町誌〕。		
文化財指定	高太神社本殿(市重文 昭和63年3月)		

位置・配置(図82-1、写82-1)

高太神社は富岡市妙義町に位置する神社である。北道路より30m程進み、22段石段を上り、鳥居をくぐる。そこから83段石段を上ると境内平地に出る。北向きを避け石段と直交する形で、右に拝殿、本殿(覆屋)があり、拝殿の北側に社務所、石段の左に神楽殿、石段の正面の一段高い所に天満宮がある。拝殿と本殿覆屋は繋がって建っている。神楽殿東側より道を降ると北道路と繋がっている。



写82-1 境内全景

由来および沿革

高太神社は、かつての村社の一つで、かつては山王宮と称していた。昭和21年宗教法人届出書類によると、現在地に鎮座していた旧日枝神社と同村字新光寺鎮座の旧八幡神社を合祀して高太神社と称した。旧日枝神社は、弘仁年間(810~824)に創立され、その後、安貞元年(1227)火災に遭うが不思議な

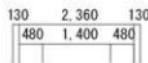
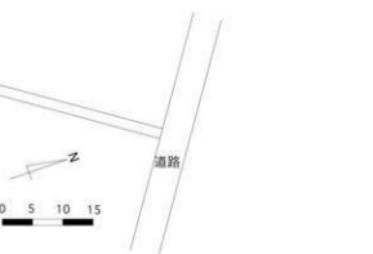


图82-2 平面图(本殿)



图82-1 配置图



ここに御神体は火中より出て、神木の根なる洞窟の中にあり現存する。長禄2年(1458)に当村城主多加太肥前守が社殿を移築した。旧八幡社本殿は当社境内に保存されている。

はんてん
本殿 (図82-2、表82-2、写82-2~82-7)

建造年は、本殿内部に3枚の棟札が納められているが、細部の様式等から寛政5年(1793)の建立と判断する。棟札には大工、直砂孫八、矢野市五郎、佐藤

助太郎、3名の名を記す。

その規模は正側1間、側面1間の隅木入り春日造で、柿葺、1間向拝軒唐破風付、身舎棟に千木、堅魚木が載る。身舎柱は丸柱（内部、縁下は八角）組物は三手先で二段の尾垂木（隅は三段）を入れる。雲水などの浮彫を施した二段の軒支輪を廻し、中備は草花の浮彫を施した幕股、腰組付高縁（切目縁）を四方に廻し、唐獅子と牡丹の透彫の脇障子で見切る。腰組中備は幕股とし、縁東頂部に拳鼻を付け

表82-2 本殿

建造年代／根拠	寛政5年(1793年)／棟札	構造・形式	一間社隅木入り春日造正面1間(2.36m)、側面1間(2.81m)、向拝1間、軒唐破風付、柿葺
工 匠	[大工]直砂孫八、矢野市五郎、佐藤助太郎	基 础	玉石敷基壇あり [身舎]亀腹 縁廻り、向拝廻り：切り石基礎の上に土台
軸 部	[身舎]丸柱、切目長押、腰長押、内法長押、頭貫、木鼻：正面側面、獅子 [向拝]角柱、組物、水引虹梁、海老虹梁、手挟	組 物	[身舎]三手先尾垂木付、腰組：拳付出組 [向拝]拳付出三斗三段、手挾
中 備	[身舎]幕股 [身舎腰組]幕股 [向拝]彫刻幕股、二重虹梁	軒	二軒本繁垂木、二段支輪
妻 鋸	[身舎]正面：大瓶束菱形、蕪懸魚繕付 背面：二重虹梁、幕股、軒支輪、大瓶束菱形、斗	柱 間 裝 置	正面：両開き桟唐戸、側面、背面：板壁
縁・高欄・脇障子	向拝：浜縁(切目縁)腰組付高縁(四方切目縁)擬宝珠高欄、登高欄 脇障子	床	板張
天 井	[身舎]無し	須弥壇・扇子・宮殿	内部に扇子
塗 装	素木、黒塗(垂木)弁柄塗(木負、茅負)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎外部]正面幕股(菊)正面軒支輪(菊、波、鳳凰)側面軒支輪(菊、雲水、笛)側面幕股(植物)木鼻(獅子)脇障子(唐獅子、牡丹) [向拝]兎の毛通(鶴、菊)水引虹梁、拳(唐草絵様)幕股(龍)海老虹梁(龍丸彫り)手挾(牡丹、猪目)角柱(地紋)木鼻(獅子、像)正面中備幕股(龍)		



写82-2 全景



写82-3 側面・組物・軒支輪・幕股



写82-4 背面



写82-5 海老虹梁・手挾



写82-6 身舎正面・棟唐戸・幕股



写82-7 本殿内部

る。背面妻飾は、二重虹梁、臺股、浮彫支輪、大瓶東菱形とする。向拝は柱三面に地紋彫を施し、浜縁（切目縁）が付く。海老虹梁は龍の丸彌、手挾は牡丹の透彫、軒唐破風に鶴の兎毛通を付ける。水引虹梁上組物間に龍の彫刻（見返しは板状）が入る。木鼻は身舎正面側面獅子、向拝正面獅子、側面像、材質は櫛、塗装は胡粉が塗ってあった形跡があるが、現状は素木。垂木は黒塗、木負、茅負、獅子の口などは弁柄塗。内部に箱形厨子を置く。

まとめ

本殿内部に本殿に関する3枚の棟札が納められている。宝暦12年(1762)、天明6年(1786)、寛政5年(1793)、この3枚の棟札は全て「奉修復三王宮大願成就懇氏子繁昌祈所」と記してある。細部の様式、水引虹梁の浮彫彫刻、龍の丸彌海老虹梁、脇障子の透彫彫刻、向拝の組物が4段であること、詰め組の斗が多く並ぶことなどから寛政5年(1793)の建立と判断する。したがって、その他の棟札はそれ以前の

本殿修復時のものであると推察する。

高太神社本殿は、保存状態が良好である。材質は櫛で垂木、木負、茅負以外は素木でしっかりと造りで、特に彫刻に於いて、虹梁絵様、海老虹梁、手挾、軒支輪、臺股、兎毛通、木鼻、脇障子などの仕上がりが良く、18世紀後半の神社建築の様式を顕著に表している。また、棟札もしっかりと保存されており、大工、世話人など当時のことがよく分かる貴重な建築である。

神社としては、3月15日例祭、7月18日禊祭、10月15日秋祭、11月22日新嘗祭、と祭事を行い、今も地域に根ざした神社である。

(久保田和人)

【参考文献】

- 『高太神社本殿調査報告書』文化財建造物保存技術協会
昭和62年
- 『妙義町誌（下）』妙義町 平成5年
- 『富岡甘楽平成神社明細誌』群馬県神社庁富岡甘楽支部・
群馬県神社総代会富岡甘楽支部 平成5年

84 (安中)熊野神社 ((あんなか)くまのじんじゃ)

表84-1

神社名	熊野神社	所在地	安中市安中3-22-47
旧社格	村社	所有者・管理者	熊野神社
主祭神	大穴 単邊神	神事	春祭(4/10)、夏越大祓(7/30)、秋祭(10/10)、除夜祭(12/31)
創立・沿革	安中忠政が、永禄2年(1559)安中城を野後に築き、城の鬼門の守護神として創設した。明治以前には熊野大権現と呼ばれたが、魔仏毀釈により熊野神社となり近郊の總鎮守となる(『上野国碓氷郡神社明細帳 上』)。		
文化財指定	熊野神社社殿・熊野神社祭典絵巻・熊野神社指絵図・絵馬・唐金下げ燈籠(市重文 昭和37年3月)、大ケヤキ(市天記 昭和37年3月)		

位置・配置(図84-1、写84-1)

高崎市から安中市へ向かう国道18号線を、旧の安中市へ入る信号は直進して二つ目の信号(城下)を左折し、約100m程にある路地を右に入ると、熊野神社の「安中市指定重要文化財」の立て看板がある。小さな山門(1門1戸、切妻屋根切妻銅板葺き、控え柱付き建造年代は繊細な絵様から、文政後期頃)(19世紀中頃)をくぐり、社殿に向かって進むと右に庚申堂、正面2.12m、側面1.80m、1間向拝付、屋根入母屋銅板葺、向拝中備に三猿の彫刻、建築は向拝木鼻の特徴から明治期(19世紀後期)とする。左手奥が社務所、正面の階段を登ると左に手水舎があり、その奥2mほどの高台に源訪神社、正面2.87m、側面3.74mがあり、その隣に市指定、天然記念物の大槧の根元がある。極彩色の拝殿は目の前である。右手隣接地は寺(東光院)の境内である。

付、屋根入母屋銅板葺、向拝中備に三猿の彫刻、建築は向拝木鼻の特徴から明治期(19世紀後期)とする。左手奥が社務所、正面の階段を登ると左に手水舎があり、その奥2mほどの高台に源訪神社、正面2.87m、側面3.74mがあり、その隣に市指定、天然記念物の大槧の根元がある。極彩色の拝殿は目の前である。右手隣接地は寺(東光院)の境内である。

由来および沿革

当社は野後郷の鎮守として古くより鎮座した。安中忠政が永禄2年(1559)安中城を築城の際、越後国、新発田の熊野神社を勧請するとともに、城の鬼門の守護神として創設した。その後慶長年間依頼、安中藩の總鎮守として崇敬されてきた。とくに藩主板倉公の時代には、正月、5月、9月にお初穂の奉納があり、隔年にてお神楽とお神輿渡御が行われ、

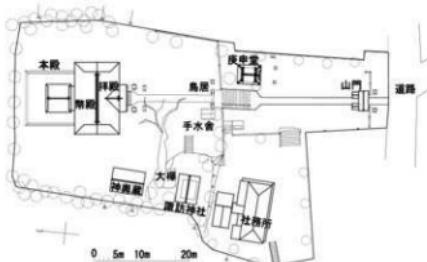


図84-1 配置図



写84-1 境内



図84-2 平面図(全体)

大手前には棧敷が設置され諸役人が出席し、祭りが盛大におこなわれた。板倉勝明公は、嘉永7年(1855)、五穀豊饒を祈り唐鐘下げ燈籠(市指定重要文化財)を奉納された。文久2年(1862)には皇女和宮の無事下向祈願の大絵馬(市指定重要文化財)が、安中宿より奉納された。明治以前まで熊野大権現と呼ばれたが、神仏分離令により熊野神社となり、近郊の總鎮守となっている。

社殿及び、熊野神社指絵図四幅も市指定重要文化財(昭和37年3月27日)。

ほんでん
本殿(図84-2、84-3、表84-2、写84-2~84-4)

本殿平面は、指絵図から見ても正面と背面の柱割が違う〔正面1間、背面3間、側面2間〕。三間社春日造変形(2.78m)、側面2間(2.17m)、背面3間、向拝1間、銅板葺、隅木入春日造(正面入母屋背面切妻)。内陣は、櫛御気野命、大穴牟運命、少名毘古那神の3神が祭られている。正面に庇があり、向拝となっている。幣殿内部から見れば、本殿

正面は板戸で形は諸折両開き。虹梁には出三斗組、幕股は変形した彫刻になっている。本殿海老虹梁は、外部から龍の丸彫の彫刻が確認できる。木鼻は獅子頭、二手先出組、軒は二間繁垂木、妻飾は三手先出組、尾垂木、二重虹梁、大瓶束。

周縁の高欄は擬宝珠高欄切目縁を四方にまわし、身舎隅角部に脇障子(2つうち本殿向かって右部分は壊れている)腰部分の出組は三手先、木鼻は丸刻、彫刻は正面、両側面、背面に、腰部分から壁

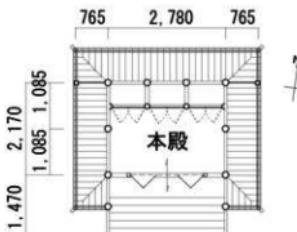


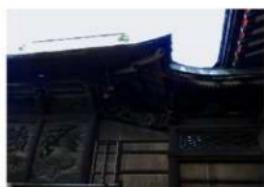
図84-3 平面図(本殿)

表84-2 本殿

建造年代／根柢	江戸時代中期／建築様式	構造・形式	三間社春日造変形(幣殿が屋根補部分もつながっている)。銅板葺文献資料によっては、「建設当初は拝殿なく、本殿と拝殿は離れていた……」等の記述もある。
工 匠	大工棟梁: 安中市 吉田當道(絵図面)	基 础	切石基礎、亀腹
軸 部	「身舎」円柱、土台、腰組、腰長押、地長押、内法長押、台輪 「向拝」方柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	「身舎」獅子鼻、三手先出組、尾垂木 「向拝」獅子鼻、出組、手扶
中 備	「身舎」三手先出組、尾垂木 「向拝」出三斗、幕股	軒	二軒、繁垂木
妻 飾	二重虹梁、出組、大瓶束、支輪、懸魚	柱 間 装 置	正面: 諸折両開戸、側面背面: 全面彫刻
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、擬宝珠高欄、平行地覆、架木、桶束、斗東	床	拭床
天 井	竿縁	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	板戸前面: 花模様
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	〔本殿〕各側面(柱間部分2面)と背面(柱間部分3面)の計7面	〔向拝〕手扶、海老虹梁、水引虹梁、幕股	



写84-2 本殿内部



写84-3 本殿側面向拝虹梁



写84-4 本殿背面

面、妻の壁面まで埋め尽くされている。これらの建築様式から建立は18世紀後半と推定される。

幣殿(图84-2、84-4、表84-3、写84-5～84-7)

幣殿は平面として指絵図と同一であり、本殿と拝殿とをつないでいる。正面1間(2.78m)、側面2間(2.17m)両下造、拝殿の屋根と本殿の屋根とをつないで3殿の屋根を一体にしている。柱間に幕板、格子欄間。室内は拭板張り、天井は格天井、外

観は指絵図と異なる部分がある。

拝殿(图84-2、84-5、表84-4、写84-8～84-10)

拝殿は、正面(10.22m)、側面(4.66m)、入母屋造り、平入、向拝1間、軒唐破風付き、銅板葺き、大工棟梁は指絵図を作成した吉田富道と想定される。妻飾りは、狐格子、前包、懸魚、千鳥破風、大瓶束。基壇基礎は切石、蟻宝珠高欄、三方切目縁、脇障子付。身舎組物は大斗肘木、向拝虹梁、海

表84-3 币殿

建造年代／根据	江戸時代中期／建築様式	構造・形式	本殿間口と同一の、1間、側面2間切妻銅板葺
工 匠	安中棟梁 吉田富道と考えられる現在社殿のものと一致する署名いりの絵図面あり	基 碇	切石
輪 部	[東柱] 8角 [柱]円柱足固、台輪、内法長押、頭貫	組 物	獅子鼻、出三斗
中 備	幕板	軒	一軒 繁垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	正面：諸折両開戸、側面背面：全面彫刻側面
縁・高欄・脇障子	なし側面の両側：擬宝珠高欄	床	拭床
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 质	不明
彫 刻	なし		



写84-5 币殿内部



写84-6 币殿側面



写84-7 币殿側面

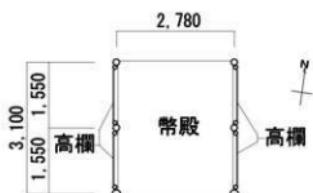


图84-4 平面図(幣殿)



图84-5 平面図(拝殿)

表84-4 拝殿

建造年代／根拠	江戸時代中期／建築様式	構造・形式	間口3間、側面2間、入母屋、銅板葺、平入 [向拝]軒一間、唐破風
工 匠	安中棟梁 吉田富道と考えられる現在社殿のものと一致する署名入りの絵図面あり	基 础	基壇、切石
軸 部	[身舎]円柱、腰長押、内法長押、頭貫 [向拝]方柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[新舎]龍頭 [向拝]龜、連三斗、手挟
中 備	[新舎]棊股 [向拝]彫刻	軒	二軒、半繁垂木
妻 飾	入母屋破風：鳳格子、前包、懸魚 軒唐破風：千鳥破風、大瓶束、懸魚	柱 間 姿 置	正面：建具、側面：建具 [向拝]彫刻
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、平行、地覆、栈木、檼束、斗束	床	拭床の上カーペット
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	なし	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	[新舎]正面貫部分 [向拝]水引虹梁上、海老虹梁		



写真84-8 拝殿内部



写真84-9 拝殿正面



写真84-10 拝殿海老虹梁

老虹梁に龍の彫物、連三斗、手挟、身舎中備は棊股、拝殿内部の床は中央で幣殿の床の高さに合わせてある。拝殿の中には、唐金下げ燈籠、および大きな絵馬がある。

野神社祭礼絵巻の巻末には、元文4年(1739)9月の記述があるが、社殿の建立は、その建築様式から江戸中期と推定される。

(城田富志夫)

まとめ

神社保管の棟梁吉田富道の署名入りの指絵図は、図面の作成年が不明であるが本殿、幣殿、拝殿の平面図、及び立面図は現況建物に極めて近い。市指定重要文化財の大きな絵馬と唐鐘吊燈籠は、拝殿内部にある。現在社殿の落成を祝しての可能性の高い熊

【参考文献】

- 『安中市の文化財』及び『ふるさとの至宝』平成23年 安中市学習の森より
- 安中志(上巻)『碓氷郡誌 上野国神社明細帳11』(3 P, 4 P) 昭和48年
- 『上州のお宮とお寺神社編』(176 P, 177 P) 昭和53年

85 (松井田)八幡宮 ((まついだ)はちまんぐう)

表85-1

神社名	八幡宮	所在地	安中市松井田町新堀1497
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 八幡宮
主祭神	兼田別命、息長足姫命、玉依姫命	神事	秋まつり(10/15)、2年参り(12/31~1/1)
創立・沿革	創立年代不明。建久8年(1197)源頼朝が善光寺参拝の折に立ち寄った〔校正安中志〕-明治31年出版 国立国会図書館デジタル版より」とある。慶安元年(1648)に徳川三代将軍家光より朱印地13石6斗を賜る。その後明治4年(1871)上地、明治43年(1910)許可され、境内末社三峯神社、秋葉神社、および松井田駅無格社稻荷神社を合併する。		
文化財指定	松井田八幡宮本殿(県重文 昭和33年8月1日指定)		

位置・配置(図85-1、写85-1)

[地理的位置] 松井田駅より約1.5km北に進むと旧中山道が東西に走り、更に北側に位置する。更に北に向かうと国道18号線が通る。東側には小学校が隣接する、南北に縦長の敷地である。

[配置] 正面は南側とし、道路沿い右手の石鳥居をくぐると北に向かって参道が続く。社務所を超えると左側に六角堂があり、そして石段を数段上ると拝殿がある。拝殿をくぐると幣殿、本殿を覗く。



写85-1 境内全景

由来および沿革

創立は不明であるが、最古は鎌倉時代、「建久8年(1197)源頼朝が善光寺参拝の折に立ち寄った」という謂がある。また、「慶安元年(1648)に徳川三代将軍家光より朱印地13石6斗を賜る」という記録も祭礼經に残されている。後に、明治4年(1871)上地、明治41年(1908)境内末社三峰神社、秋葉神社、及び松井田駅無各社稻荷神社を合併した。現在の本殿は寛永年間に建造されたものと推定されており、棟板などからも当時の建築意匠も確認されている。その後に幣殿や拝殿を増設し、本殿と拝殿の軒がつなげられており、更にその間の軒下に床を設け、幣殿として使われていたことから、権現造のような形状をしており、解体調査の際に万治4年(1661)の墨書きが発見され、拝殿の建造年代が確認された(『松

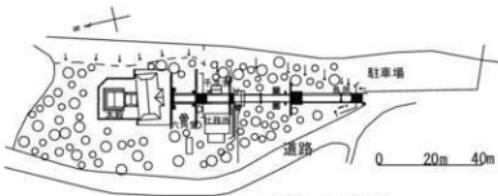


図85-1 配置図

井田八幡宮修理報告書』より)。

長きに渡り幾度となく改修工事が行われてきたが、平成12年から平成14年(2000~2002)にかけて行われた改修工事では、本殿、拝殿それぞれの建物の軒を切り離し、建造当初の本殿の形式を復元した。

本殿(図85-2、表85-2、写85-2~85-7)

三間社流造で銅板葺。基礎は基壇有。桁行3間、梁間2間。向拝を備え、正面には観音開きの扉を設ける。身舎柱は円柱で、頭貫で繋ぎ、隅は相欠で繋ぎ、端は木鼻を造出。向拝は方形柱で面幅は細く、水引虹梁型頭貫で繋ぎ、棟板を置く。海老虹梁で身

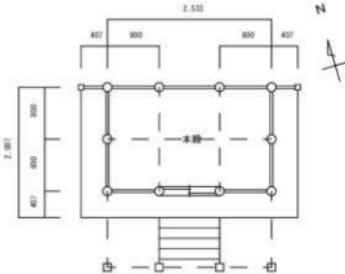


図85-2 平面図(本殿)

表85-2 本殿

建造年代／根拠	17世紀前期／建築様式	構造・形式	正面(桁行)、3間(2.5m)、側面(梁間)2間(2.067m)、3間社流造、平入、銅板葺
工 匠	不明	基 础	基壇有、亀腹無、土台有、礎盤無
軸 部	[身舎]丸柱 [向拝]角柱	組 物	[腰組]和様出三斗 [向拝]和様出三斗
中 備	[正面]轟股 [側面・背面]撥束	軒	[正面]二軒繁垂木 [側面]確認未
妻 飾	虹梁大瓶束、猪目懸魚、桁隠	柱 間 裝 置	身舎正面板戸
縁・高欄・脇障子	正面三方切目縁、擬宝珠高欄、背面端部脇障子	床	大引、堅板張り、浜床
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮鏡	なし
塗 裝	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜、杉、栗
彫 刻	[向拝]轟股、東側表:竹、裏:桐、中央表:菊、裏:三つ巴に菱格子、西側表:松と藤、裏:桃と菱格子、軒回り破風板:若葉上向き [身舎]轟股、東:桐、中央:桃、西:杜若 [木鼻]頭貫木鼻:若葉が上向き、若葉が下向き [東側手鉄]菊、面高 [西側手鉄]桐、菊		



写真85-2 正面



写真85-3 背面・側面



写真85-4 背面



写真85-5 側面西



写真85-6 向拝柱・擬宝珠高欄



写真85-7 側面東

舍柱と繋ぎ、その上には大瓶束を立てる。装飾は比較的簡素であり、中備は植物を題材にした透かし蔓股を各間に置き、水引虹梁に唐草絵様の彫刻と、その先端の木鼻は模をつける。蔓股や手鉄がやや平面的である事などから、建造年代は寛永年間(1624～1643)である、17世紀前期と考えられる。最後に、平成14年の改修工事の際に報告されている文面を以下に紹介する。「身舎の組物は柱上に出三斗を置き、その間の中備として撥束を置き、共に通肘木を受ける。正面には撥束の代わりに食物を題材にした蔓股を各間に置く。大斗は下端に櫛の角太柄を用いて柱に載せている。また方斗には斗助けが施され、各斗の下端には竹を円形に加工した太柄を用いて肘

木に固定されていた。

撥束は各柱間を1枚物で通した琵琶板の前面に置き、頭貫天端に薄い平柄で留まる。蔓股は釘を用いて頭貫天端に留められている。身舎蔓股の彫刻の題材は東が桐、中央に桃、西が杜若と思われるが、桐のものが作風や足の意匠が異なる事から、後補のものと思われる」。

割拝殿 (図85-3、表85-3、写85-8～85-9)

正面を南に向く7間の割拝殿である。正面3間唐破風向拝付の入母屋造、銅板葺、東に神楽殿、西に神輿殿があり、その中央に敷石の通路がある。基礎は切石の上、土台、軸部は身舎角柱を差鴨居、頭貫

表85-3 割拌殿

建造年代／根拠	18世紀後期～19世紀初期／建築様式	構造・形式	正面7間、側面2間、正面3間入母屋平入、正面に向拝3間軒唐破風付銅板葺
工 匠	不明	基 础	切石
軸 部	[身舎]柱角 [向拝柱]方柱	組 物	[身舎]拳鼻付出三ツ斗
中 備	[身舎]板、幕股(内外共)	軒	二軒繁垂木
妻 飾	猪目懸魚	柱 間 裝 置	[神楽殿]板戸
縁・高欄・脇障子	なし	床	[神楽殿]拭床張 [神奥殿]拭床張
天 井	[中央]格天井 [神楽殿]竿縁天井 [神奥殿]竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	[身舎]朱塗(丸桁、裏甲、茅負、胴木) [向拝]朱塗(向拝柱、飛燕垂木、化粧野地、唐破風天井) [向拝]朱塗(丸桁、裏甲、茅負、胴木) [向拝]朱塗(向拝柱、飛燕垂木、化粧野地、唐破風天井) [向拝]朱塗(丸桁、裏甲、茅負、胴木)	飾 金 物 等	なし
繪 画	格天井墨書き	材 質	檜、杉
影 刻	[外部]虹梁(唐草絵様)木鼻、板、幕股 [内部]差鴨居(唐草絵様)、板幕股 [向拝]唐破風鬼瓦通(鳥、松) [向拝柱]地紋 [水引虹梁]唐草絵様[海老虹梁]唐草絵様 [木鼻]象、獅子		



写真85-8 全景



写真85-9 向拝柱・木鼻

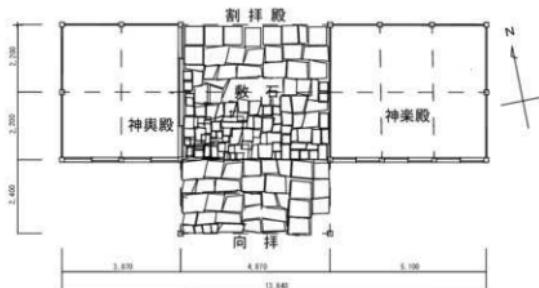


図85-3 平面図(割拌殿)

で固め、台輪を廻らす。内部は東に神楽殿、西に神奥殿。中央に通路があり、天井は格天井。東西の拝殿の天井は竿縁天井である。向拝柱は地紋彫の角柱で水引虹梁には唐草絵様の彫刻が施されている。木鼻は正面が象、側面が獅子で、湾曲の強い海老虹梁には唐草絵様の彫刻が描かれ、身舎正面と繁ぐ。身舎正面の組物は拳鼻付出三斗で中備は板幕股である。この唐草絵様の彫刻などから、建造年代を18世

紀後半から19世紀初期と考えた。また、松井田八幡宮祭礼綱にある、「寛政12年(1800)松井田八幡宮前殿再建、上棟」という記録は、割拌殿の事ではなく、本殿に付す拝殿の事であるだろうと解釈した。

六角堂(太いし堂)(図85-4、表85-4、写85-10～85-12)

寛政12年(1800)に建造された建物で、棟札があ

表85-4 六角堂

建造年代／根拠	寛政12年(1800)／棟札	構造・形式	六角堂(1辺1.60m)銅板葺
工 匠	[大工]久保田弥兵衛 小林塗右衛門 関口仲右衛門 神戸権兵衛 他10名	基 础	土台有、礎盤石有
軸 部	六角柱	組 物	[外部]斗供、三手先 [内部]拳鼻付岡組
中 備	板葺股	軒	二軒繁垂木
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	正面、半蔀戸
縁・高欄・脇障子	なし	床	拭板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇、扇子
塗 装	素木	飾 金 物 等	木口棟木金具
絵 画	なし	材 質	櫛、杉、松
彫 刻	[内法長押]絵様 [木鼻]若葉 [幕股]唐草		



写真85-10 全景



写真85-11 幕版



写真85-12 聖徳太子像

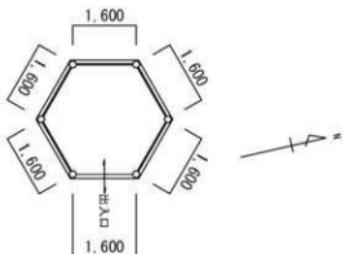


図85-4 平面図(六角堂)

る。正面を東に向く六角形の建物で銅板葺。基礎は礎盤、土台有。棟札には太子堂と記載があり、須弥壇の上には聖徳太子像が安置されている。柱は六角形で、1辺辺り1.6m。柱間装置は半蔀戸。正面外部内法長押には唐草絵様の彫刻が施され、朱塗り塗装をされている。中備は板葺股で、中に桐の紋章が彫られており、割拝殿と同じ形状とみられる。

まとめ

松井田八幡宮本殿は鎌倉時代源頼朝が善光寺参拝の際に立ち寄ったとされる謂れもあり、長い歴史をもつ神社である。寛永年間(1624~1643)に建てられ

たと推定される意匠も残されており、県重要文化財に指定されている。浅間山に近く、何度も噴火の降灰を受けながらも、今に至った背景には、地域の人々の篤い信仰心によるものが大きく、それは、平成の改修工事の際の形状技法調査によって、新たに確認された。その概要を以下にまとめると、「降灰を防ぐために、本殿には覆屋を併せ持つものであったと推測される。基壇に沿うように四方に野面石の石列が発見された。建物の規模に比して明らかに基壇が大きく、これらの事からこの石列は覆屋の柱の礎石と推測された。更に拝殿から天明期の屋根葺替の棟札が発見され、浅間山噴火の数年後にあたる事から、噴火による影響で飢饉が起きたにも関わらず苦悩の思いで屋根の葺替を行った……。」という事である。

創建以来幾度となく修理を行いながら、長い歴史の重みを感じさせる建物を守るかのように、その周囲には緑の木々が生い茂っている。

(堤 雅之)

【参考文献】

『上野国碓氷郡神社明細帳11』群馬県文化事業振興会 平成17年

『群馬県史 通史編3』群馬県 平成元年

86 新羽神社【にっぽんじや】

表86-1

神社名	新羽神社	所在地	多野郡上野村新羽540
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 新羽神社
主祭神	豊受別命、蓬山姫命、大日靈尊、建御名方神 命、武之カ槌神、大山祇命、第橋媛命	事神	以前は川下げる神事が嚴やかに行われた。神樂殿で野栗の人達による神楽、境内では野栗沢の人達による獅子舞が奉納された。
創立・沿革	明治42年(1909)の県令に基づき、新羽村の地主神社、野栗村の野栗神社、羽白社、熊野社を八幡村の八幡神社へ合祀し新羽神社と改称した。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図86-1、写86-1)

新羽は上野村の東端に位置する。国道299線を西に登り上野村に入って間もなく新羽方面に左折、神流川を経て野栗沢川を東に望む山懐の高台に位置す

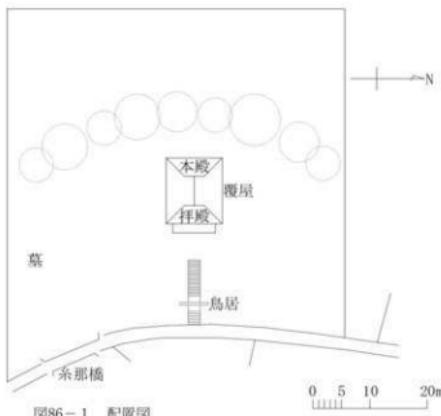
る。鳥居をくぐり石段を上がった所に拝殿と本殿の覆屋がある。

由来および沿革

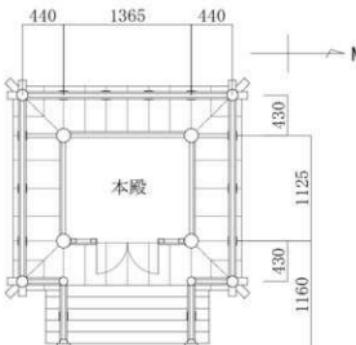
明治42年(1909)の県令に基づき、新羽村の地主神社、野栗村の野栗神社、羽白社、熊野社を八幡村の八幡神社へ合祀し新羽神社と改称した。新羽神社は合祀後も地元の人達に支えられ、神奥の川下げる神事が引き継がれている。建物や境内の清掃が行き届いて、信仰の拠り所となっている様子が窺える。地名の付いた神社は新しい証拠となる。

本殿 (図86-2、表86-2、写86-2～86-4)

覆屋の中にある本殿は一間社流造 (1.37m)、側面1間 (1.13m)、千鳥破風付、向拝1間、軒唐破



写86-1 境内全景



写86-2 平面図(本殿)

表86-2 本殿

建造年代／根据	19世纪前期／建築様式	構造・形式	一間社流造(1.37m)、側面間(1.13m)、千鳥破風付、向拝1間、板葺
工 匠	不明	基 础	礎 基壇なし、基礎なし
軸 部	[身合]丸柱、水引虹梁、台輪 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身合]木鼻(彫刻) [向拝]三手先
中 備	[身合]幕股 [向拝]幕股部分彫刻で埋まっている。	軒	二軒繁垂木
要 飾	[身合]蕉懸魚	柱 間 装 置	正面:棟唐戸、側面:横羽目板張
縁・高欄・脇障子	縁、大床(三方)、擬宝珠高欄、脇障子(彫刻)	床	板張り
天 井	桧板張り	須弥壇・扇子・宮鏡	なし
塗 装	朱塗、極彩色(彫刻板支輪、胴羽目彫刻)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質 檜	
彫 刻	[身合]台輪、長押(地紋彫)、支輪(紅葉・波浮彫)、木鼻(波)、幕股(鳥浮彫) [向拝]海老虹梁(龍に花 丸彫)、水引虹梁(梅浮彫)、手鍊(花、透し彫)、木鼻(正面:獅子、側面:象)、柱(地紋彫)、幕股(龍透し彫)		



写86-2 正面



写86-3 側面



写86-4 向拝 虹梁 手鍊

風付、板葺。三方に縁を廻し、擬宝珠高欄や鯉の滝登りが彫刻された脇障子が付く。向拝の水引虹梁は梅花の浮彫、地紋彫された向拝角柱上部龍や花の丸彫り海老虹梁、花の籠形手鍊、波頭の木鼻等小規模ながら彫刻には目を見張るものがある。以上の特徴から19世纪前期と推定される。工匠は村外から来た宮大工親子との言い伝えがある。

拝殿 (図86-3、表86-3、写86-5～86-10)

拝殿は正面3間(7.44m)、側面2間(3.79m)、入母屋造、妻入、向拝1間、軒唐破風付屋根、鉄板葺(当初は茅葺)。

三方の縁には擬宝珠高欄、板の脇障子が付く。向拝柱には地紋彫、木鼻は獅子や狛の彫刻、3段の組物、海老虹梁には波に花の浮彫が施され、村社としての格式を持つ。特に水引虹梁の刻線とレリーフが合体した唐草絵様や2対になった手挾は珍しい。創建は本殿と同時期の19世纪前期と思われる。

拝殿は川下げるの神事後に野栗の人達による神楽が

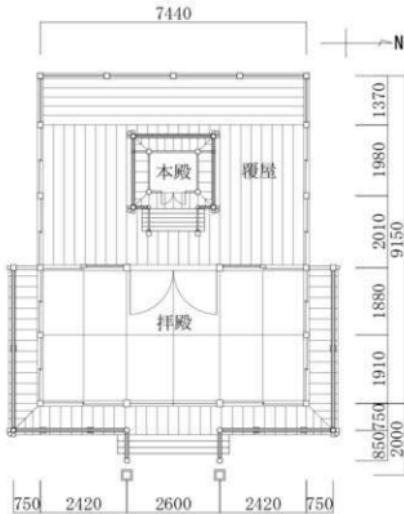


表86-3 拝殿

建造年代／根拠	19世紀前期／建築様式	構造・形式	正面7.44m、側面3.79m、入母屋造、妻入、向拝1間、軒唐破風付屋根、鉄板葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	基礎なし、自然石基礎、高欄廻切石
軸 部	[身合]角柱、水引虹梁、台輪なし　[向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身合]舟肘木、木鼻なし　[向拝]出組、木鼻彫刻
中 備	[身合]幕股なし　[向拝]幕股部分彫刻で埋まっている。	軒	軒天井板張り(板軒)、せがい造
要 飾	[身合]蕉懸魚　[向拝]兔の毛通	柱 間 装 置	正面：蔀戸、側面：舞良戸
縁・高欄・脇障子	縁、大床(三方)、擬宝珠高欄、脇障子、板(彫刻なし)	床	彫刻なし
天 井	杉板棹縁	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、極彩色(向拝彫刻、手挾)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質 標	質標
彫 刻	[身合]虹梁(唐草絵様)　[向拝]海老虹梁(花、波浮彫)、肘木(唐草絵様)、手挾(唐草絵様)、木鼻(正面：獅子、側面：狛)		



写86-5 正面



写86-6 側面



写86-7 向拝組物



写86-8 向拝虹梁



写86-9 側面肘木



写86-10 脇障子

奉納され、神楽殿として兼用していた事が伺われる。拝殿内の寄進者名を記載した額に昭和41年(1966)10月上屋修繕と書かれている。

まとめ

石段を昇った平地には正面に唐破風を持った入母屋造りの拝殿(神楽殿)と覆屋がある。周辺には数基の石灯籠が配置され、向拝や覆屋内の本殿彫刻・組物等、小規模ながら格式を持った存在感を持って

いる。上野村内の神社建築としては江戸時代後期の特徴を残している貴重な存在と言える。

(境内の石灯籠には安永7年(1778)の刻銘がある。)

(松井良一)

【参考文献】

- 『上野村の民俗(改訂版)』上野村誌(IV) 上野村教育委員会編 平成31年
- 『上野村の文化財・芸能・伝説』上野村誌(V) 上野村教育委員会編 平成13年

87 土生神社〔はぶじんじゃ〕

表87-1

神社名	土生神社	所在地	多野郡神流町大字小平460
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 土生神社
主祭神	埴山姫命、須御名方命、木花開耶姫命、大日孁命、大雷命、速玉之男命	神事	なし
創立・沿革	社伝では大宝年間(701~704)創立、和銅4年(711)總鎮守となると伝える。元禄7年の棟地のころ法佛神社となり、天明4年(1784)御幣を勧請した。その後文政8年(1825)再靈體勸請、それが今の御神体とされる。		
文化財指定	石碑(町重文 平成3年10月)		

位置・配置(図87-1、写87-1)

土生神社は、神流町万場市街を抜け1kmほど上流に進み、左に橋を渡りさらに左に下った神流川右岸にある。敷地は北の道路に面し、石段を10段ほど登った先に鳥居、その先が境内となる。境内配置は北西に消防詰所、西に公民館、南に拝殿を兼ねた覆屋が建ち、その中に本殿がある。さらに南の一段上がったところに数件の末社を祀る。

由来および沿革

社伝では、大宝年間(701~704)創立、和銅4年

(711)總鎮守となると伝える。元禄7年(1694)の検地の頃に法佛神社となり、27年後には社の修理をしたとされる。後、天明4年(1784)甲辰8月13日に紙紙官僚ト部良延に告げて宇津の御幣を勧請した。この時はまた土生大明神となっている。その後文政8年(1825)正月14日に再靈體勸請をト部良宗源に願い幣束を受けた。それが今の御神体とされる。その時に社の修理、屋根替え、彫刻も行われたとされる。合祀は明治41年(1908)7月25日、土生神社境内の諏訪社、樺名社、琴平宮、秋葉社と宇元郷の熊野神社(三社)と稻荷社他を合祀したとする。

本殿(図87-2、表87-2、写87-2~87-7)

覆屋を兼ねた拝殿の奥に本殿はあり東面する。一間社流造板葺とし屋根正面に千鳥破風を付け、向拝は軒唐破風とする。



図87-1 配置図



写87-1 境内

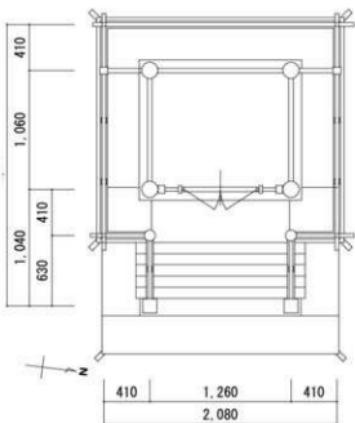


図87-2 平面図(本殿)

表87-2 本殿

建造年代／根拠	寛政4年(1792)／棟札	構造・形式	一間社流造(1.26m)、側面1間(1.06m)、千鳥破風付、向拝1間、軒唐破風付、板葺
工 匠	[大工]松浦雅栄(寛政4年(1792)棟札)	基 础	切石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、切目長押、内法長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎]拳鼻付三手先 [向拝]連三斗
中 備	[身舎]幕股 [向拝]嵌込彫刻	軒	二軒繁垂木、彫刻板支輪
妻 飾	三重虹梁大瓶束、彫刻詰組	柱 間 装 置	正面棧唐戸
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、跳高欄、登高欄、擬宝珠高欄、脇障子有、浜縁、浜床	床	板張
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[身舎]素木(全体)極彩色(彫刻)、黒塗(垂木) [向拝]素木(全体)極彩色(彫刻)、黒塗(垂木)	飾 金 物 等	なし
繪 画	棧唐戸(絵模様)	材 質	檜、檜
彫 刻	[身舎]虹梁(唐草絵様、波に魚)、獅子鼻、尾垂木(龍)、妻虹梁上、支輪彫刻、幕股彫刻、長押(地紋彫)、脇障子(人物)、縁下四面(猿、幕股) [向拝]手挾(植物)、水引虹梁上(龍)、向拝柱(地紋彫)		



写真87-2 正面



写真87-3 側面



写真87-4 背面



写真87-5 海老虹梁



写真87-6 虹梁 彫刻



写真87-7 縁下彫刻

屋根は板葺で、軒は飛燕打越二軒繁垂木としている。向拝に二対の手挾を付ける。正側面及び背面の四方に大床を廻らし、脇障子を置く。組物は身舎を拳鼻付三手先、向拝を連三斗としている。身舎の中備は彫刻付幕股で、水引虹梁上部に龍の彫刻を嵌込んでいる。海老虹梁は反りが少なく、内側に唐草絵様、外側に波模様に魚の彫刻が付く。虹梁の唐草絵様は刻線彫で巻きは緩い。彫刻は身舎の正面棧唐戸両脇と、両側面背面に中国故事の彫刻を嵌める。縁下四面にも幕股、唐獅子、猿の彫刻とする。組物先と、尾垂木には須頭。妻飾には板支輪に波の彫物としている。向拝水引虹梁上には龍、手挾は植物の籠彫、海老虹梁には水と魚の彫刻としている。彫刻、

組物には極彩色が施され、垂木は黒色に塗られている。

まとめ

建造年は慶長15年(1610)の棟札があるが、現在の本殿はそこまで遡らない。他に寛政4年(1792)の棟札がある。海老虹梁の唐草絵様の巻き具合や、彫刻の豪華さから、18世紀末から19世紀初期の建造とみてよい。多彩な彫刻と彩色など建築的価値は高い。

(羽鳥 悟)

【参考文献】

『万場町誌』万場町教育委員会 平成6年

88 (万場)八幡宮 ((まんば)はちまんぐう)

表88-1

神社名	八幡宮	所在地	多野郡神流町大字万場72
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 八幡宮
主祭神	建御名方命、麻津主命、他	神事	なし
創立・沿革	古くより神明宮、鎌倉時代に八幡宮が祀られ、南西の川端にも古くから春日宮が祀られていたが、寛保2年(1742)の大雨で塩沢川が出し、春日宮が流されて後、八幡宮に合祀され、三社宮と称するようになったといわれる。		
文化財指定	流鏑馬の的と謙(町重文 昭和63年12月)		

位置・配置 (図88-1、写88-1)

当地は神流町大字万場地区（旧万場町大字生利）にあり、国道462号を上野村方面に向かい神流町役場を過ぎ200m程の右手塩沢川と神流川との合流地点に位置する。国道462号線に面して鳥居があり、潜ると正面に拝殿、奥に覆屋、拝殿左に社務所、右に山車倉が並び、境内左には樹齢数百年の大桜が

立っている。覆屋内は一番左に春日宮、中央に八幡宮と天照大御神、右に鹿島宮、諏訪大神、天満宮、稻荷大神を祀った社が配置されている。

由来および沿革 (図88-2)

古くより神明宮、鎌倉時代に八幡宮が祀られ、南西の川端にも古くから春日宮が祀られていたが、寛保2年(1742)の大雨で塩沢川が出し、春日宮が流されて後、八幡宮に合祀され、三社宮と称するようになったといわれる。八幡宮は黒沢氏、春日宮は高橋氏が代々神主をしていたが明治中期以後三社宮を高橋氏が兼ね、昭和の中期より新井氏が神主となつた。

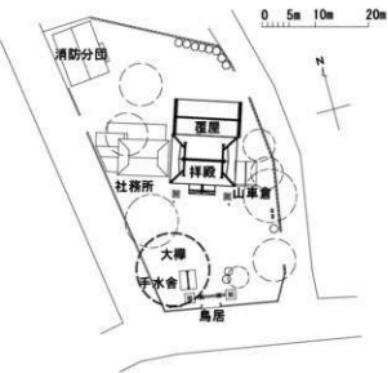
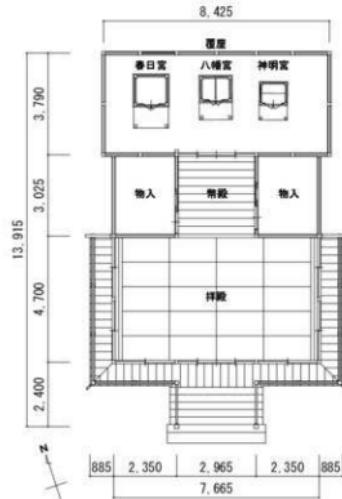


図88-1 配置図



写88-1 境内



写88-2 平面図(本殿・幣殿・拝殿)

春日宮（図88-3、表88-2、写88-2～88-4）

一間社流造板葺屋根で向拝を設け、南面する。身舎は間口1間、側面1間で正面に1間の向拝を設け階はない。屋根は板葺で軒は身舎向拝共一軒半繁垂木とし、正面浜床のみで、他に大床ではなく、脇障子もない。見世棚造と呼ばれる形態である。床は板張りで、天井も板張りとする。

軸部身舎は面取角柱で、足固貫、腰貫を通し、内法長押、切目長押共四方に回す。向拝は面取角柱とし頂部に異形虹梁を架ける。柱間は正面板戸で、両側面背面は組込の板張とする。

組物は身舎を舟肘木、向拝を出三斗（側面は連三斗）、中備は身舎ではなく、向拝は斗とする。彫刻はわずかに向拝に木鼻を付ける。向拝木鼻の唐草絵様は円形に近い渦である。塗装は全体素木であるが、懸魚と降懸魚のみ彩色されている。当春日宮は全体が簡素な造りで、年代様式的な特徴は木鼻程度であり、18世紀中期の建築が妥当とみる。

八幡宮（図88-4、表88-3、写88-5～88-7）

一間社流造板葺屋根で向拝を設け、南面する。身舎は間口1間、側面1間で正面に1間の向拝を設け

階はない。屋根は板葺で軒は身舎向拝共一軒半繁垂木とし、正面浜床のみで、他に大床ではなく、脇障子もない。春日宮に同じく見世棚造である。床は板張りで、天井はない。

軸部身舎は面取角柱で、足固貫、腰貫を通し、内法長押、切目長押共四方に回す。向拝は面取角柱とし頂部に異形虹梁を架ける。柱間は正面板戸で、両側面背面は組込の板張とする。

組物は身舎を舟肘木、向拝も舟肘木で、中備もない。塗装は全体素木である。当八幡宮は天照大御神

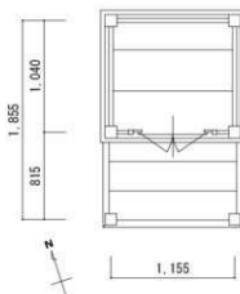


図88-3 平面図(春日宮)

表88-2 春日宮

建造年代／根拠	18世紀中期／建築様式	構造・形式	一間社流見世棚造(1.16m)、側面1間(1.04m)、向拝1間、板葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎
軸 部	[身舎]角柱、切目長押、内法長押 [向拝]角柱、水引虹梁(異形)、繁虹梁	組 物	[身舎]舟肘木 [向拝]連三斗、出三斗
中 備	[身舎]なし [向拝]斗組	軒	一軒半繁垂木
妻 飾	家紋抜き	柱 間 装 置	正面板戸、両側面背面板張
縁・高欄・脇障子	浜床	床	板張
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[身舎]素木、懸魚のみ彩色 [向拝]素木、降懸魚のみ彩色	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	杉
彫 刻	[身舎]舟肘木、懸魚 [向拝]木鼻		



写88-2 全景



写88-3 虹梁 木鼻



写88-4 向拝 虹梁

表88-3 八幡宮

建造年代／根拠	18世紀中期／建築様式	構造・形式	一間社流見世棚造(1.06m)、側面1間(0.84m)、向拝1間、板葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎
軸 部	[身舎]角柱、切目長押、内法長押 [向拝]角柱、虹梁	組 物	[身舎]舟肘木 [向拝]舟肘木
中 備	[身舎]なし [向拝]なし	軒	一軒半繁垂木
妻 飾	家紋首	柱 間 装 置	正面板戸、両側面背面板張
縁・高欄・脇障子	浜床	床	板張
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	[身舎]素木 [向拝]素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	杉
影 刻	[身舎]なし [向拝]なし		



写88-5 全景



写88-6 組物



写88-7 向拝

と合祀されており、全体が簡素な造りで、年代様式的な特徴も無い。前述の春日宮と同じく18世紀中期の建築が妥当である。

神明宮 (図88-5、表88-4、写88-8～88-10)

一間社春日造板葺屋根で向拝を設け、南面する。身舎は間口1間、側面1間で正面に1間の向拝を設け階はない。屋根は板葺であるが、他2社は一間社流造に対しこの社は、屋根が正面妻入の春日造である。軒は身舎、向拝共一軒繁垂木とし、正面浜床のみで、他に大床ではなく、脇障子もない。床は板張

で、天井はない。他の2社と同じく見世棚造と呼ばれる形態である。

軸部は身舎は面取方柱で、足固貫、腰貫を通し、内法長押、切目長押共四方に回す。向拝は面取方柱とし頂部に虹梁を架ける。柱間は正面板戸で、両側面背面は組込の板張とする。

組物は身舎を舟肘木、向拝は出三斗で、中備もない。塗装は全体素木である。当神明宮は全体が簡素な造りで、年代様式的な特徴も無い。前述の春日宮、八幡宮と同じく18世紀中期の建築が妥当である。

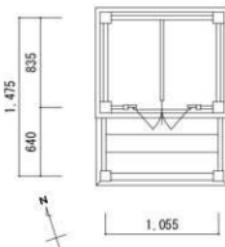


図88-4 平面図(八幡宮)

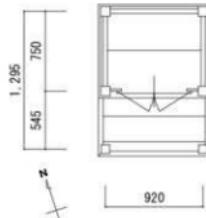


図88-5 平面図(神明宮)

表88-4 神明宮

建造年代／根拠	18世紀中期／建築様式	構造・形式	一間社春日見世棚造(0.92m)、側面1間(0.75m)、向拝1間、板葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎
軸 部	〔身舎〕角柱、切目長押、内法長押 〔向拝〕角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	〔身舎〕舟肘木 〔向拝〕出三斗
中 備	〔身舎〕なし 〔向拝〕なし	軒	一軒簷垂木
妻 飾	束	柱 間 装 置	正面板戸、両侧面背面板張
縁・高欄・脇障子	浜床	床	板張
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	〔身舎〕素木 〔向拝〕素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	杉
彫 刻	〔身舎〕舟肘木 〔向拝〕なし		



写真88-8 全景



写真88-9 組物



写真88-10 向拝 虹梁

まとめ

覆屋に三社が並び、共通点は皆見世棚造であり、縁もなく質素な造りである。違いは左2社、春日宮、八幡宮は流造であり、右の神明宮は春日造である。他に春日宮は比較的良材を使用し、若干の装飾がみられるが、他の2社は簡素な杉材で造られているなど多少の違いはあるが形式的に共通点も多い。拝殿内に元禄14年(1701)に春日宮建築とされる棟札、また、覆屋の屋根葺替え時に残された垂木と思われる

木材に宝曆9年(1759)の墨書きがある。簡素な材料と建築様式など総合的に判断すると、三社はほぼ同時期の建築で、18世紀中期の建築であると判断する。

(羽鳥 悟)

【参考文献】

『万場町誌』 万場町教育委員会 暦和2年

89 中山神社【なかやまじんじゃ】

表89-1

神社名	中山神社	所在地	多野郡神流町大字魚尾719
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 中山神社
主祭神	右 天御中主命、左 稲津主命	神事	お川瀬下げ(9/1)
創立・沿革	社伝によると富岡の貫前神社の末社とし、元魚尾宮地にあって「魚尾神社」または「神明様」と呼んでいた。天明5年(1785)災害により現在の地に遷宮したと伝える。その後明治45年(1912)4月村内にあった各社を合祀して一村一社とし、中山郷にちなみ中山神社とした。		
文化財指定	鈴口(町重文 昭和52年12月)、神流川のお川瀬下げ神事(県重無民 平成17年3月)、中山神社の太々神楽(町重無民 平成元年4月)		

位置・配置(図89-1、写89-1)

中山神社は、神流町魚尾地区にあり、中里市街の国道462号を上野村に向かい、魚尾郵便局を過ぎ100m程の道路に面した右にある。石造りの鳥居を潜り正面に拝殿を兼ねた覆屋、左に集会所がある。

由来および沿革

富岡の貫前神社の末社と伝える。もとは魚尾宮地にあり「魚尾神社」または「神明様」と呼ばれていたが、天明2年(1782)8月の豪雨で社地が崩れ、当時の名主「黒田金太夫」が私財を投じ、天明5年

(1785)現在の地に遷宮したと伝える。その後明治45年(1912)4月村内にあった各社を合祀して一村一社とし、中山郷にちなみ中山神社となった。社宝に鈴口2個〔応仁2年(1468)、天明3年(1783)〕、轡1個〔享保19年(1734)〕がある。

本殿(図89-2、表89-2、写89-2~89-7)

覆屋を兼ねた拝殿の奥に本殿はあり南面する。二間社流造柿葺とし屋根正面に千鳥破風を付け、向拝は軒唐破風とする。

屋根は柿葺で、軒は二軒繁垂木としている。向拝に二対の手挾を付ける。正側面及び背面の四方に大床を廻らし、脇障子を置く。組物は身舎を拳鼻付二手先、向拝を連三斗としている。身舎の中備は彫刻付の幕股で、水引虹梁の唐草絵様は浮彫の梅、海老虹梁は反りが少なく、装飾的な唐草絵様が彫られていく。

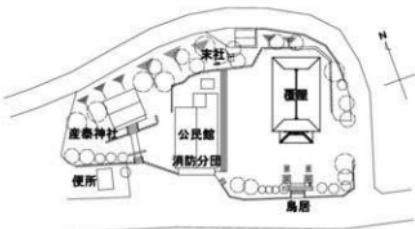


図89-1 配置図



写89-1 境内

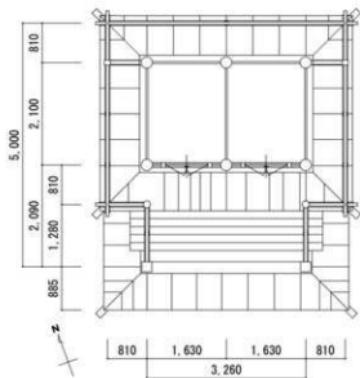


図89-2 平面図(本殿)

表89-2 本殿

建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	二間社流造(3.26m)、側面1間(2.10m)、千鳥破風付、向拝1間、軒唐破風付、柿葺
工 匠	不明	基 础	切石基礎
軸 部	〔身舎〕丸柱、切目長押、内法長押 〔向拝〕角柱、水引虹梁、海老虹梁、手鉤	組 物	〔身舎〕拳鼻付二手先 〔向拝〕連三斗
中 備	〔身舎〕幕股 〔向拝〕嵌込彫刻	軒	二軒蟄垂木、彫刻板支輪
妻 飾	二重虹梁大瓶束、彫刻詰組	柱 間 装 置	正面棟唐戸
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、跳高欄、登高欄、擬宝珠高欄、脇障子有、浜縁、浜床	床	不明
天 井	井 不明	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	〔身舎〕極彩色(彫刻)、黒塗(垂木)、他素木 〔向拝〕極彩色(彫刻)、黒塗(垂木)、他素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	櫛、檜
彫 刻	〔身舎〕海老虹梁(唐草絵様)、獅子鼻、尾垂木(龍)、妻虹梁上彫刻詰組、支輪彫刻、幕股彫刻、長押(地紋彫)、脇障子(人物) 〔向拝〕手鉤(植物)、水引虹梁上(龍)、向拝柱(地紋彫)		



写真89-2 全景



写真89-3 侧面



写真89-4 背面



写真89-5 海老虹梁 手鉤



写真89-6 虹梁 木鼻



写真89-7 彫刻

二つの祭神を祭るため、中央に柱を立てる2間の造りで、棟唐戸も2対となる。彫刻は身舎は正面棟唐戸両脇と、両側面背面に中国故事の彫刻を嵌める。縁下は高床になっているが、そこには彫刻はない。組物先と、尾垂木には模頭、妻飾には板支輪に波の彫物としている。向拝水引虹梁上には獅子の彫物、手鉤は植物の籠彫としている。彫刻・組物には極彩色が施され、垂木は黒色に塗られている。

まとめ

建造年については棟札等はないが、社伝によれば天明5年(1785)の建造としている。水引虹梁の絵模

様は浮彫の梅、また反りの穏やかな海老虹梁とその絵模様も単純でなく凝った彫りになっている。幕股の彫刻も前に浮き出ていて、18世紀中期以前には遡らない。それから18世紀末から19世紀初めの建造とみてよい。多彩な彫刻と彩色など建築的価値は高い。

(羽鳥 悟)

【参考文献】

『中里村の民俗』中里村教育委員会 平成7年
『中山神社の調査報告』桑原稔他

表90-1

神社名	諏訪神社	所在地	長野県下仁田町下仁田319
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 諏訪神社
主祭神	御子神、八坂刀賣命	神事	元始祭(1/3)、禊祭(7/1)、例祭(10/17に近い日曜日)、七五三節(11/15)、除夜祭(12/31)
創立・沿革	元は八幡社で、甲斐の武田氏の勢力が上信国境を越えてこの地域に進出した時に、社名が変えられたとされる。豪華で精巧な社殿が作られたのは、義姫による町の繁栄を背景に、それにふさわしいように天保8年(1837)に建設されたとされる。		
文化財指定	諏訪神社社殿の彫刻(町重文 昭和54年6月)、諏訪神社の大櫻(町天記 昭和54年6月)		

位置・配置 (図90-1、写90-1)

諏訪神社は、下仁田町役場の西約1kmのところに鎮座している。国道254号線を西へ向かい南牧村への入口、下仁田信号を南へ入って100m程の所を右へ曲がると参道になっている。神社東側に大きな駐車場がある。参道を西に進むと右手に手水舎、すぐ

鳥居があり、その先の石段を上ると拝殿、幣殿、本殿と続く。諏訪神社右手前には近戸神社があり、その西には町指定天然記念物の大きなケヤキがある。ケヤキの北側には一段下がったところに社務所がある。境内の西側はすぐ崖となっており、鏑川が流れる。

由来および沿革

創建は戦国時代、旧八幡神社遷座地に小幡の国峰城主・小幡尾張守が武田信玄を通じて信州諏訪大社

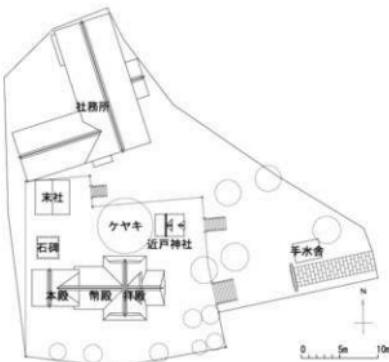


図90-1 配置図



写90-1 境内全貌

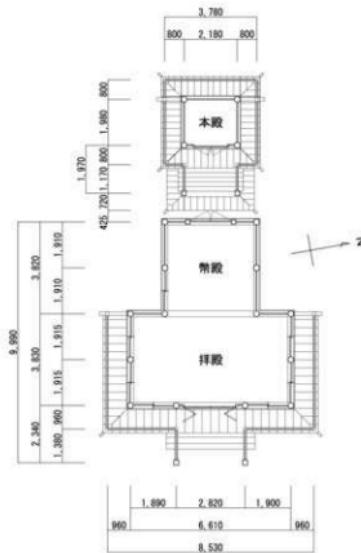


図90-2 平面図(諏訪神社)

(長野県諏訪市又は下諏訪町) の分靈を勧請したのが始まりと伝えられている。江戸時代に入ると幕府から庇護され朱印地として 6 石が安堵され、享和 2 年(1802)には嵯峨御所から挑灯と絹幕が寄進されている。

古くから神仏習合し、隣接する龍栖寺が祭祀を司ってきたが、明治時代初頭に発令された神仏分離令により佛教色が一掃され、明治41年(1908)に村社に列している。

本殿 (図90-2、表90-2、写90-2~90-7)

江戸時代後期の天保 8 年(1837)矢崎豊前掾昭方に再建されたものとされている (「大隅流の建築 柴

表90-2 本殿

建造年代／根据	江戸末期／建築様式	構造・形式	一間社流造(2.18m)、側面 1 間(1.98m)、向拝 1 間、銅板葺
工 匠	[大工]矢崎豊前掾昭方、「大隅流の建築 柴宮長左衛門矩重伝」(現存大隅流建造物一覧)	基 础	地覆石、亀腹
軸 部	[身舎]丸柱、長押、頭貫、丸桁、土台 [向拝] 角柱、虹梁、海老虹梁、手扶	組 物	[身舎]三手先 [腰組]三手先 [向拝]出三斗
中 備	彫刻棗股	軒	二軒繁垂木、支輪(彫刻)
妻 飾	燕懸魚、虹梁、大瓶束	柱 間 裝 置	両開戸唐戸、板壁
縁・高欄・監障子	[身舎]四方切目縁、擬宝珠付高欄、彫刻監障子 [向拝]浜床(三方切目縁)	床	板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	垂木飾
繪 画	なし	材 質	漆・楠(彫刻)
彫 刻	[身舎]虹梁(絵様)、尾垂木(雲)、木鼻(獅子頭)、支輪(鶴、兎、雲、波)、棗股(鶴、雲)、胴羽目(孔雀、牡丹、鳳凰、桐、山鶲、松)、監障子(鯉、龍、仙人) [腰組]支輪(流水文) [向拝]木鼻(獅子頭、狛)、海老虹梁(龍)、手扶(牡丹)		



写90-2 外観：側面



写90-3 外観：側面・背面



写90-4 向拝：海老虹梁



写90-5 向拝：木鼻



写90-6 側面：胴羽目・脇障子



写90-7 内部

宮長左衛門矩重伝)。規模是一間社流造、側面 1 間、向拝 1 間、銅板葺である。四方に擬宝珠高欄付の切目縁を廻らし、脇障子を建て、正面に三方切目縁の浜床、木階 5 級を付す。

組物は、身舎および腰組は三手先、向拝は出三斗とし、中備は彫刻棗股とする。柱間装置は、身舎正面を両開戸唐戸とし、残り三面は板壁とする。軒は二軒繁垂木とし、妻飾は燕懸魚、虹梁、大瓶束を飾る。通し肘木の上に斗を 3 つ並べる大隅流の特徴が見られる。細部にわたり彫刻が施され、特に龍の海老虹梁は見事である。

表90-3 拝殿

建造年代／根拠	江戸末期／建築様式	構造・形式	正面3間(4.72m)、側面2間(3.83m)、入母屋造、平入、正面千鳥破風付、向拝1間、軒唐破風付、銅板葺
工 匠	[大工]矢崎房之進昭房／「大隅流の建築 柴宮長左衛門矩重伝」(現存大隅流建物一覧)	基 础	礎石、切石
軸 部	[身舎]丸柱、長押、頭貫、丸桁、土台 [向拝] 角柱、虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎]二手先 [向拝]出三斗
中 備	彫刻蟇股	軒	二軒繁垂木、支輪(彫刻)
妻 飾	[身舎]大瓶束 [向拝] 兎毛通	柱 間 装 置	引連板戸、板壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠付高欄、彫刻脇障子	床	板張
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	素木飾
繪 画	天井画	材 質	檜・楠(彫刻)
彫 刻	[身舎]虹梁(鯵様)、木鼻(獅子頭)、支輪(菊水、山鶴と柏、獅子、牡丹、鰐、波、鳥)、幕殿(鶴、雲)、脇障子(獅子、山鶴、牡丹) [向拝]木鼻(龍)、海老虹梁(龍)、手挾(麒麟、亀)		



写90-8 外観：正面



写90-9 外観：側面



写90-10 外観：側面・背面

拝殿 (図90-2、表90-3、写90-8～90-10)

本殿と同じく江戸時代後期の弘化3年(1846)矢崎房之進昭房に再建されたものとされている(『大隅流の建築 柴宮長左衛門矩重伝』)。規模は正面3間、側面2間、入母屋造、平入、正面千鳥破風付、向拝1間、軒唐破風付、銅板葺である。三方に擬宝珠高欄付の切目縁を廻らし、脇障子を建て、木階三級を付す。

組物は、身舎は二手先、向拝は出三斗とし、中備は彫刻蟇股とする。柱間装置は、身舎正面中央を両開板折戸とし、正面両脇、南面、北面は引連板戸とする。軒は二軒繁垂木とし、妻飾は大瓶束、向拝に兎毛通を飾る。通し肘木の上に斗を3つ並べる大隅流の特徴が見られる。本殿同様細部にわたり彫刻が見られ、向拝に施された龍の彫り物や、海老虹梁、手挾は見たえがある。

拝殿の奥には凸型に突き出た幣殿があり、こちらも様々な彫刻が施されている。建造年代は拝殿と同時期と推定する。

近戸神社 (図90-3、表90-4、写90-11～90-13)

江戸時代後期の天保5年(1834)二代善司(専司)に再建されたとされ(『大隅流の建築 柴宮長左衛門矩重伝』)、旧東村箕輪地区(下仁田町東村)から移転されたものとされる。規模は一間社流造、側面

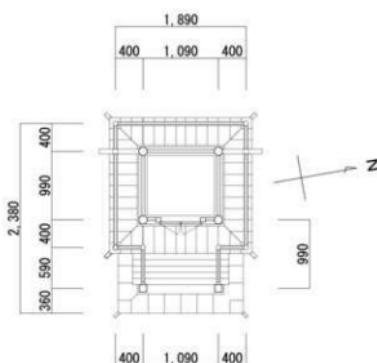


図90-3 平面図(近戸神社)

表90-4 近戸神社

建造年代／根拠	江戸末期／建築様式	構造・形式	一間社流造(1.09m)、側面1間(0.99m)、正面千鳥破風付、向拝1間、軒唐破風付、銅板葺
工 匠	[大工]二代善司(専司)／[「大隅流の建築 荘宮長左衛門矩重伝」(現存大隅流遺物一覧)]	基 础	切石基礎、龜腹
軸 部	[身舎]丸柱、頭貫、長押、丸桁 [向拝]角柱、虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎]四手先、三手先 [向拝]出三斗
中 備	彫刻蟇股	軒	二軒繁垂木、支輪(彫刻)
妻 飾	[身舎]蕪懸魚鱗付、大瓶束 [向拝]兎毛通	柱 間 装 置	両開桟唐戸、板壁
縁・高欄・脇障子	[身舎]四方切目縁、擬宝珠付高欄、彫刻脇障子 [向拝]浜床(三方切目縁)	床	不明
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮殿	不明
塗 装	素木	飾 金 物 等	長押・桟戸戸に銅板装飾
繪 画	不明	材 質	不明
彫 刻	[身舎]虹梁(絵様)、木鼻(獅子頭)、支輪(菊水、楓、波)、蟇股(龍)、胴羽目(亀に乗る仙人、白鶴に乗る仙人、瀧を見ている仙人)、脇障子(鷹と松) [向拝]柱(地紋彫)木鼻(獅子頭、楓)、海老虹梁(龍)、手挾(牡丹)		



写90-11 外観：正面



写90-12 外観：側面



写90-13 外観：背面

1間で、正面千鳥破風付、向拝1間、軒唐破風付、銅板葺である。四方に擬宝珠高欄付の切目縁を廻らし、脇障子を建て、正面に三方切目縁の浜床、木階5級を付す。

組物は、身舎は三手先、腰組は四手先、向拝は出三斗とし、中備は彫刻蟇股とする。柱間装置は、身舎正面を両開桟唐戸とし、残り三面は板壁とする。軒は二軒繁垂木とし、妻飾は蕪懸魚鱗付、虹梁、大瓶束、向拝に兎毛通を飾る。向拝柱に地紋彫、身舎には菱紋彫が見られる。本殿・拝殿同様に通し肘木の上に斗を3つ並べる大隅流の特徴が見られる。建物の規模は小さいが細部にわたり彫刻が施され、見ごたえがある。

まとめ

諏訪神社は、前方に拝殿とその後方の凸型に突き出た幣殿があり、さらに奥に本殿がある。本殿は一間社流造である。本殿と幣殿の間の床が途切れているのに、屋根の方はつながっている事は大変珍しい。また、この建築で特筆すべき点は各所に施され

た彫刻である。大規模で力強く精巧な加工の彫刻を見る事ができる。多数の素木の彫刻で飾った社寺建築は、江戸後期から明治前期にかけて流行したが、この諏訪神社は関東地方での幕末期の作風の特徴をよく示した、代表作といえる。近戸神社は、諏訪神社本殿よりも3年早く建てられたとされる。諏訪神社本殿・拝殿、近戸神社ともに大隅流の技を伝える建築として、一見の価値がある。

(齊藤朋行)

【参考文献】

- 『上州下仁田 諏訪神社社殿の建築彫刻』下仁田町商工会 平成22年
- 『下仁田町史』下仁田町史刊行会 昭和46年
- 『諏訪神社社殿の彫刻の鑑定について 報告書』下仁田町 教育委員会 平成10年
- 『群馬縣北甘楽郡史』本田龟三著 昭和3年
- 『上野国神社明細帳10』群馬県文化事業振興会 平成17年
- 『富岡甘楽平成神社明細帳』群馬県神社総代会富岡甘楽支部 平成5年
- 『大隅流の建築 荘宮長左衛門矩重伝』矢崎秀彦・伊藤富夫著 平成6年

91 檜沢神社【ひさわじんじゃ】

表91-1

神社名	檜沢神社	所在地	甘樂郡南牧村桧沢651
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 檜沢神社
主祭神	鹿屋野比売神、経津主神、宇氣母智神、大日孁命、速須佐之男命、市寸島比売神、火座盤神、品陀和氣命、大山津見神、末花佐久夜比売神、建御名方神、天玉主命	神事	節分祭(2/3 前の日曜日)、祈念祭(5/5)、みそぎ祭(7/19に近い日曜日)、例祭(9/15に近い日曜日)
創立・沿革	はじめ、萱神社と称したが明治40年(1907)4月26日、檜沢神社(同所字根草)を合併し(同41年6月10日許可)新たに檜沢神社と改称した。応永6年(1399)8月1日、社殿改築の棟札の記載によればその創立は白鳳2年(673)である(『南牧村誌』)。		
文化財指定	檜沢神社本殿(村重文 昭和59年12月)		

位置・配置(図91-1、写91-1)

県道下仁田上野線を南下し、左に桧沢公民館を見たところで右折する。道は狭く急な上り勾配の山道となり、500mほど進んだ山中の神社前で行き止ま

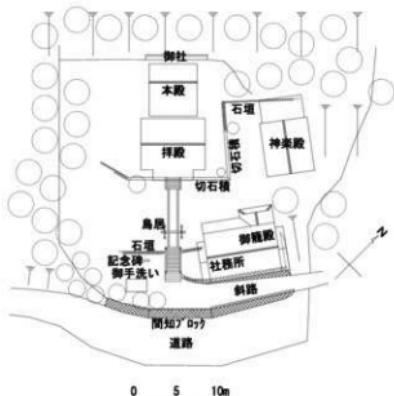


図91-1 配置図



写91-1 境内

りとなる。道幅を少し広くした駐車場から舗装された坂道を上ると、右手に社務所、左手に便所がある。その中央の石段を上ると拝殿、その奥に本殿が配置されている。拝殿の北側の庭の向こうに神楽殿がある。社務所は駐車場から見ると2階建だが、拝殿側から見ると平屋建である。建物は山の斜面をうまく利用して建てられている。境内は杉の大木が生い茂っている。

由来および沿革

はじめ、萱神社と称したが明治40年(1907)4月26日、檜沢神社(同所字根草)を合併し(同41年6月10日許可)新たに檜沢神社と改称した。応永6年(1399)8月1日、社殿改築の棟札の記載によればその創立は白鳳2年(673)という。天文3年(1534)正月、武田刑部がこれを再建したが、慶長5年(1600)12月に焼失したので、同7年(1602)4月、代官中野七蔵が再造営し(最も古い棟札)、かつ社領を寄付した。延宝6年(1678)、岡部治郎兵衛はこれを修理

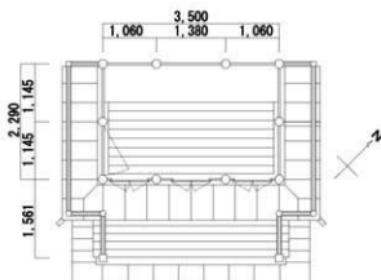


図91-2 平面図(本殿)

し、元禄10年(1697)先例によって社領をおいた(「南牧村誌」)。その後再造営を繰り返し、享保7年(1722)造営が現在の本殿と思われる(5枚中の最近の棟札より)。

はんてん 本殿(図91-2、表91-2、写91-2~91-7)

本殿は残された最近の棟札により享保7年(1722)の造営と思われるが、工匠については不明である。

規模は三間社流造、側面2間で、向拝1間、銅板葺である。三方に組高欄付の切目縁を廻らし、脇障子を建て、正面に浜床、木階6級を付す。軸部は、身舎では切石礎石に丸柱を立てて切目長押、内法長

押、頭貫で固め、向拝に角柱を立てて水引虹梁でつなぎ、身舎とは海老虹梁でつないでいる。

組物は、身舎および向拝は出三斗とし、中備は身舎では板藁股、向拝にも板藁股が取付いていた痕跡が見られた。柱間装置は、身舎正面3間を両開き板戸とし、東面・北面は板壁、西面は片開き板戸とする。軒は正面打越二軒繁垂木で、背面は二軒繁垂木とし、妻飾は両切妻面とも家紋首として蕪懸魚を飾る。彫刻は、脇障子にあり、身舎や向拝の頭貫鼻や虹梁廻りには渦文が見られる。

表91-2 本殿

建造年代／根据	享保7年(1722)／棟札	構 造 ・ 形 式	三間社流造(3.50m)、側面2間(2.29m)、向拝1間、銅板葺
工 匠	不明	基 础	切石基礎
軸 部	【身舎】丸柱、土台、切目長押、内法長押 【向拝】角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	【身舎】出三斗 【向拝】出三斗
中 備	【身舎】板藁股 【向拝】なし(板藁股が取付いていた痕跡あり)	軒	【正面】打越二軒繁垂木 【背面】二軒繁垂木
妻 飾	家紋首、蕪懸魚	柱 間 装 置	【正面】両開き板戸 【東面・背面】板壁 【西面】片開き板戸
縁・高欄・脇障子	浜床、木階六級、登殿宝珠高欄付、三方縁組高欄付、脇障子(板)	床	板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	扇子
塗 装	朱塗(向拝、三方縁組高欄、蕪懸魚)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	【身舎】頭貫鼻(渦紋)、虹梁廻(渦紋)		



写91-2 外観：側面



写91-3 外観：側面妻飾り



写91-4 外観：背面



写91-5 向拝：正面



写91-6 側面：脇障子



写91-7 内部：厨子

まとめ

本殿は三間社流造で、彫刻は脇障子、頭貫鼻や虹梁廻りに見られる程度であり、全体的に簡素な造りで江戸時代の特徴を残している。建造に関する棟札が5枚（慶長7年(1602)、寛永3年(1626)、明暦4年(1658)、延宝6年(1678)、享保7年(1722)）残されているのは貴重なことである。棟札の年代の間隔は20～44年と一定ではないが、社殿を更新する式年造替制があったと考えられる。

(野口忠男)

【参考文献】

- 『群馬縣北甘楽郡史』本田亀三著 昭和3年
- 『上野国神社明細帳10』群馬県文化事業振興会 平成17年
- 『富岡甘楽平成神社明細誌』群馬県神社総代会富岡甘楽支部 平成5年
- 『南牧村誌』南牧村 昭和56年
- 『榛沢神社本殿建築調査報告書』南牧村教育委員会 昭和59年

93 砥山神社〔とやまじんじゃ〕

表93-1

神社名	砥山神社	所在地	甘楽郡南牧村砥沢1301
旧社格	無格社	所有者・管理者	宗教法人 砥山神社
主祭神	石許理度賣命、須佐之勇命、天山津見神、建御名方神、経津主命、大穴牟達神、宇迦之神 御魂神、少名彦御神	神事	みそぎ祭(7月)
創立・沿革	砥沢村砥切職工の氏神として砥山発見當時勧請、年代不明。旧社名砥山社。明治11年(1878)11月許可得て、砥山神社と改称する(『富岡甘楽平成神社明細誌』)。明治41年(1908)12月17日、諏訪神社と合祀(『南牧村誌』)。		
文化財指定	なし		

位置・配置(図93-1、写93-1)

県道下仁田・白田線を砥沢で南に折れて南牧川を渡り、2km程入り込んだ山中に位置する。道路より斜路を登ると鳥居があり、そこから神社はさらに石

段を登ったところにつくられている。周囲は杉の大木が生い茂る斜面で、境内はその斜面を平らにした場所につくられている。本殿は覆屋によってすべて覆われている。

由来および沿革

砥沢村砥切職工の氏神として砥山発見當時勧請したもので、年代不明である。北条時代に青砥藤綱が再興、後に徳川幕府が上野御藏砥として砥山を保護するについて寛永年間、代官岡上甚右衛門に命じて社殿を改造させ、宝曆13年(1763)更に大修理を加えた。明治11年(1878)11月許可得て、砥山神社と改称する。明治41年(1908)12月17日、諏訪神社と合祀した。

本殿(図93-2、表93-2、写93-2~93-7)

本殿は宝曆13年(1763)更に大修理を加えたという記述が『南牧村誌』にあるが、その後の記述は見当たらない。当時、砥山神社が江戸と直結し繁栄していたこと、彫刻などの細工が進んでいる形体からみて、建造年代は宝曆13年(1763)と推定する。工匠については不明である。

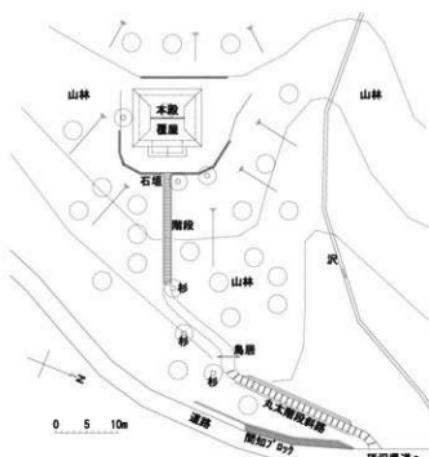
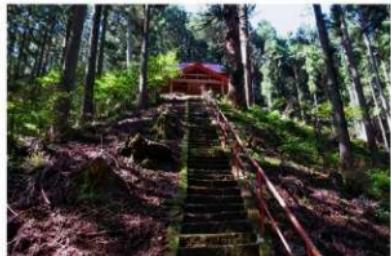


図93-1 配置図



写93-1 境内全景

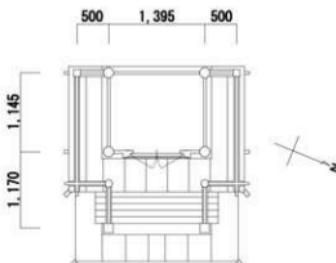


図93-2 平面図(本殿)

表93-2 本殿

建造年代／根拠	18世紀中期／建築様式	構造・形式	一間社流造(1.39m)、側面1間(1.14m)、正面千鳥破風付、向拝1間、軒唐破風付、柿葺
工 匠	不明	基 础	切石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、土台、地長押、切目長押、内法長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]三手先 [向拝]二手先
中 備	[身舎]幕股 [向拝]彫刻嵌込	軒	[正面]打越二軒繁垂木 [背面]二軒繁垂木
妻 飾	笈形付間斗束、鰐(ヒレ)付燕懸魚、降懸魚、兎毛通	柱 間 装 置	[正面]両開板戸 [側面・背面]板壁
幕・高欄・船障子	浜床、木階6級、登擬宝珠高欄付、三方縁組高欄付、脇障子(彫刻)	床	不明
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮殿	不明
塗 装	[身舎]朱塗、檍彩色(彫刻) [向拝]朱塗、檍彩色(彫刻)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	櫻(向拝柱)
彫 刻	[身舎]木鼻(獅子・象)、長押(地紋彫)、虹梁廻(若葉)、両側面・背面壁(彫刻)、両脇障子(彫刻) [向拝]柱(地紋彫)、木鼻(獅子・象)、水引・海老虹梁(若葉)、中備彫刻(龍)、手挾、猿		



写真93-2 外観：正面・側面



写真93-3 外観：背面・側面



写真93-4 向拝：正面



写真93-5 向拝：海老虹梁・手挾



写真93-6 側面：妻飾り



写真93-7 側面：彫刻

規模は身舎正面1間、側面1間、向拝1間で一間社流造の形式である。柱上部を金襴巻きとする。屋根は切妻柿板葺で、正面に千鳥破風、庇に軒唐破風を設け、大棟には千木と鰐木を載せる。三方に組高欄付の切目縁を廻らし、脇障子を建て、正面に浜床、木階6級を付す。軸部は、身舎では切石礎石に丸柱を立てて地長押、切目長押、内法長押、頭貫で固め、向拝に角柱を立てて水引虹梁でつなぎ、身舎とは海老虹梁でつないでいる。

組物は、身舎は三手先、向拝は二手先とし、中備は身舎では幕股、向拝は彫刻嵌込としている。柱間装置は、身舎正面1間を両開板戸とし、側面・背面

は板壁とする。軒は正面を打越二軒繁垂木で、背面は二軒繁垂木とし、妻飾は両切妻面とも笈形付間斗束として、鰐付燕懸魚、降懸魚を飾る。正面の向拝軒唐破風に兎毛通を飾る。彫刻は、身舎では木鼻に獅子・象、長押に地紋彫、虹梁廻に若葉とし、両側面・背面は彫刻壁、両脇障子は彫刻としている。向拝では柱に地紋彫、木鼻に獅子・象、水引・海老虹梁は若葉、虹梁上部に龍の彫刻とし、手挾を飾る。向拝方柱の両脇には猿の彫物が安置されている。

まとめ

徳川幕府によって保護されていた砥山の職工の氏

神である砥山神社は、砥山を保護するについて、幕府によって改造や修理が加えられたと伝えられている。それゆえ、水引虹梁・海老虹梁の彫刻、獅子鼻、象鼻、手挟、側面・背面の壁彫刻などは、相当手の込んだもので彫刻的な見ごたえがある。大工・彫刻師は不明であるが、当時の繁栄ぶりをしのぶことができる価値の高い遺構である。

(野口忠男)

【参考文献】

- 『群馬縣北甘楽郡史』本田亀三著 昭和3年
- 『上野国神社明細帳10』群馬県文化事業振興会 平成17年
- 『富岡甘楽平成神社明細誌』群馬県神社総代会富岡甘楽支部 平成5年
- 『南牧村誌』南牧村 昭和56年

94 大仁田神社〔おおにたじんじゃ〕

表94-1

神社名	大仁田神社	所在地	甘楽郡南牧村大仁田1668
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 大仁田神社
主祭神	速玉之勇命、須佐之勇命、天日豐尊、高皇產靈神、木花開耶姫命、伊弉諾美命、事解之男命、奥津比古神、奥津比賣神、火産靈神、品陀和氣命	神事	歳旦祭(1/1)、みそぎ祭(7月)、例祭(9月中旬)
創立・沿革	由緒不明。明治40年(1907)12月19日許可。本社境内末社の電神社、及宇堂平の無格社八幡宮・同境内末社二社、字丸山無格社神明宮、同境内末社一社を合併、同時に大仁田神社と改称する(「富岡甘楽平成神社明細誌」)。		
文化財指定	大仁田神社の大杉(村天記 昭和53年7月)		

位置・配置(図94-1、写94-1)

県道下仁田・白田線を南牧村役場のところで南に折れて大仁田ダム方向へ大仁田川沿いに、2 km程入り込んだ道路脇の東斜面上の高台に位置する。道路より斜路を登ると鳥居があり、さらにその先の石段

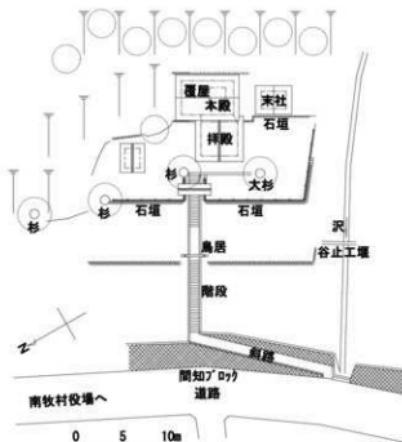


図94-1 配置図



写94-1 境内全景

を登ったところに境内はつくられている。本殿は覆屋によってすべて覆われている。

由来および沿革

由緒不明。明治40年(1907)12月19日許可を受けて、本社境内末社の電神社、及宇堂平の無格社八幡宮・同境内末社二社、字丸山無格社神明宮、同境内末社一社を合併、同時に大仁田神社と改称する(「富岡甘楽平成神社明細誌」)。

本殿 (図94-2、表94-2、写94-2~94-7)

本殿の建造年代は18世紀前期と推定する。工匠については不明である。

規模は身舎正面3間、側面2間、向拝1間、入母屋造、屋根は柿葺である。三方に組高欄付の切目縁を廻らし、脇障子を建て、正面に浜床、木階9級を付す。軸部は、身舎では切石礎石に丸柱を立てて切目長押、内法長押、頭貫で固め、向拝に角柱を立てて水引虹梁でつなぎ、身舎とは海老虹梁でつないでいる。

組物は、身舎および向拝は出三斗とし、中備は身

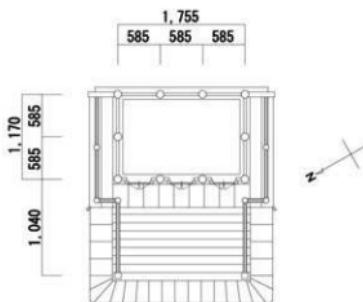


図94-2 平面図(本殿)

表94-2 本殿

建造年代／根拠	18世紀前期／建築様式	構造・形式	三間社入母屋造(1.75m)、側面2間(1.17m)、妻入、向拝1間、柿葺
工 匠	不明	基 础	切石基礎
軸 部	〔身舎〕丸柱、切目長押、内法長押 〔向拝〕角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	〔身舎〕出三斗 〔向拝〕出三斗
中 備	〔身舎〕板幕股 〔向拝〕透幕股	軒	〔正面〕打越二軒繁垂木 〔側面・背面〕二軒繁垂木
妻 飾	菱形付大瓶束、燕懸魚	柱 間 装 置	〔正面〕両開板扉 〔側面・背面〕板壁
縁・高欄・船障子	浜床、木階9級、登擬宝珠高欄付、三方縁組 高欄付、脇障子	床	杉板張
天 井	杉板	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、黒漆(板壁)、極彩色(彫刻)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	〔身舎〕木鼻 〔向拝〕木鼻(獅子、象)、水引・海老虹梁(若葉)、中備幕股		



写真94-2 外観：正面



写真94-3 側面：擬宝珠高欄



写真94-4 向拝：幕股



写真94-5 向拝：柱頭



写真94-6 身舎：正面



写真94-7 正面：妻飾り

舍では板幕股、向拝では透幕股としている。柱間装置は、身舎正面3間を両開き板戸とし、側面・背面は板壁とする。軒は正面打越二軒繁垂木で、背面は二軒繁垂木とし、妻飾は菱形付大瓶束、燕懸魚を飾る。彫刻は、身舎や向拝の頭貫鼻や虹梁廻りに見られる。

まとめ

屋根は入母屋で正面向拝部分を流造とし、柱間は正面3間とする。同じ南牧村の桧沢神社は切妻であるが、三間社造は同じ形式である。大仁田神社の水引虹梁・海老虹梁の渦は円に近く巻込み、若葉も単純である。向拝正面の獅子鼻は珍しい形であるが、象鼻は清楚なもので彫刻化が進んでいない。透幕股もシンプルな彫刻であることから、建造年代は18世

紀前期と推定する。朱塗などは新しく見えるが、背面の化粧垂木、側面の屋根葺材等には年月を感じさせるところがある。敷地内に生える村指定天然記念物の「大仁田神社の大杉」の説明板には「天正10年(1582)に市川別当次郎直方甲斐国より、大仁田へ転居した折り熊野神社を祀り、その際植樹した杉の木である」とある。その当時から、地域の人たちに根付いている歴史ある神社である。

(野口忠男)

【参考文献】

- 『群馬縣北甘樂郡史』本田亀三著 昭和3年
- 『上野國神社明細帳10』群馬県文化事業振興会 平成17年
- 『富岡甘楽平成神社明細誌』群馬県神社総代会富岡甘楽支部 平成5年
- 『南牧村誌』南牧村 昭和56年

96 笹森稻荷神社（ささもりいなりじんじゃ）

表96-1

神社名	笹森稻荷神社	所在地	甘楽郡甘楽町福島1350
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 笠森稻荷神社
主祭神	蒼稻魂神、豊城入彦命	神事	歳旦祭(1/2)、例大祭(3月第2日曜日)、祈念祭(5/1)、禊祭(7月第3日曜日)、秋季大祭(10月第4日曜日)、新嘗祭(11/23)、除夜祭(12/31)
創立・沿革	当神社の勧請は天長2年(825)にて、後、応仁2年(1468)宮鏡を加えて再興す。明和7年(1770)社殿大破し、同年11月に本殿・拝殿を再興す(『富岡甘楽神社明細誌』)。		
文化財指定	笹森古墳(県史跡 昭和58年2月)、富岡製糸場塩馬(町重文 平成25年2月)、笠森神社の太々神楽(町重無民昭和42年5月)、天王塚古墳(町史跡 昭和52年6月)		

位置・配置(図96-1、写96-1)

甘楽町福島に位置し、国道254号線の大鳥居を南に進み右折する。境内は南側の道路に面し入口があり、鳥居を抜け石段を登り、前殿(割拝殿)を通り石段を登ると、拝殿・本殿へと連なる。本殿の南西に神楽殿、東に金毘羅宮、西に白狐奉安所、東北に辨天宮、安産の神、縁結びの神を祭る。また、彦狹島王の御陵と称する稻荷塚があり、入口は、縦



图96-1 配置図

60cm、横75cm、入口より玄室まで約16m、玄室の幅2.4m、奥へ7.2m、高さ2.5m、となっている。周囲は樹木に覆われ、地域から鎮守の森として親しまれている。

由来および沿革

当神社の勧請は天長2年(825)と伝えられ、その後応仁2年(1468)宮鏡を加えて再興す。江戸時代に入ると、小幡藩が立藩、当初の陣屋が下仁田街道(姫街道)の福島宿にある稻荷山東学院の境内に設置され、東学院が当社の別当を担った。そのため、歴代小幡藩主は当社を篤く信仰するようになり、2代藩主織田信良は安産祈願を行い、後に3代藩主となる織田信昌が誕生したことから領内の鎮守とした。

毎年例大祭(3月第2日曜日)に太々神楽(町指定重要無形民俗文化財)が奉納されており、笠森古墳が県指定史跡となっている。

本殿(图96-2、表96-2、写96-2~96-7)

建造年代を示す棟札等は確認できないが、明和7年(1770)に再興すと伝えられている。建物全面に朱



写96-1 境内全景

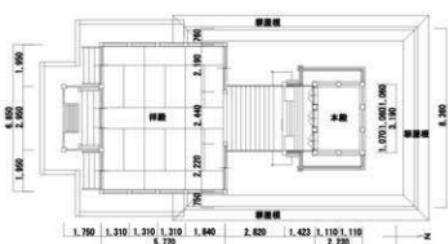


图96-2 平面図(本殿・拝殿)

表96-2 本殿

建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	三間社流造(3.19m)、側面2間(2.22m)、向拝1間、軒唐破風付、銅板本瓦棒葺軒唐破風
工 匠	不明	基 础	切石基礎
軸 部	[身舎]土台、丸柱、切目・腰長押、内法長押、頭貫 [向拝]角柱(地紋彫)、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]出組 [向拝]平三斗
中 備	[身舎]側面・背面臺股 [向拝]龍の彫刻	軒	二軒繁垂木
妻 飾	二重虹梁笠形大瓶束、拝懸魚、降懸魚、一手先	柱 間 姿 置	両開き板扉、板張
縁・高欄・脇障子	浜床、木階6級、大床、三方縁、擬宝珠組高欄、脇障子	床	不明
天 井	不明	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、黒漆塗(木階)、極彩色(彫刻)	飾 金 物 等	[身舎]組高欄・銅板巻、木階・小口銅板巻 [向拝]角柱脚銅板巻
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	[身舎]壁面:妻虹梁(若葉)、木鼻(獅子・狛)、幕股、支輪、脇障子、腰組、腰長押・内法長押・頭貫(地紋彫) [向拝]角柱(地紋彫)、木鼻(獅・狛)、海老虹梁(若葉)、龍、手挾		



写96-2 側面



写96-3 側面組物



写96-4 背面



写96-5 側面



写96-6 木鼻



写96-7 向拝

塗を施しており、彫刻は少なく壁面がないが極彩色の装飾を施している。

規模は、三間社流造、側面2間、向拝1間、軒唐破風付、銅板本瓦棒葺の本殿である。三方に組高欄付の切目縁を廻し、脇障子を建て、正面に浜床、木階6級を付す。軸部は、身舎では切石基礎(亀腹)に土台を敷き、丸柱を立てて切目・腰長押・内法長押、頭貫で固め、向拝に角柱を立てて水引虹梁でつなぎ、身舎とは海老虹梁でつなげている。組物は、身舎は出組(一手先)、向拝は平三斗とし、中備は身舎では幕股、向拝は彫刻嵌込としている。柱間裝置は、身舎正面3間を両開き板戸とし、側面・背面

は板張とする。軒は打越二軒繁垂木とし向拝に一对の透彫の手挾を付ける。妻飾は両妻面とも二重虹梁、大瓶束とし、拝懸魚、降懸魚を飾る。正面の向拝軒唐破風には懸魚を飾る。彫刻は、身舎では木鼻に獅子・狛・長押・頭貫に地紋彫、虹梁に若葉、幕股、支輪として、両脇障子は透彫としている。向拝では柱に地紋彫、木鼻に獅子・狛、海老虹梁は若葉、中備は龍とし、手挾を飾り、極彩色としている。

拝殿 (写96-2、表96-3、写96-8～96-10)

建造年代は、本殿と同様に明和7年(1770)再興すと伝えられている。昭和38年(1963)に増築を加えた

表96-3 拝殿

建造年代／根据	江戸末期／建築様式	構造・形式	正面3間(6.85m)、側面4間(5.77m)、切妻造、妻入、向拝1間、瓦葺
工 匠	不明、増築部 [大工]棟梁 相川政一 [高]源下次郎／梁墨付	基 础	切石基礎
軸 部	[身合]土台、角柱、切目、内法長押、虹梁 [向拝]角柱、水引虹梁、繫虹梁	組 物	[身合]なし [向拝]三斗組、木鼻
中 備	なし	軒	[身合]一軒半繁垂木 [向拝]一軒繁垂木
妻 飾	[向拝]懸魚彫刻	柱 間 装 置	[身合]正面・背面：板戸 側面：板張
縁・高欄・脇障子	なし	床	[身合]疊敷 [向拝]土間コンクリート
天 井	[身合]格天井 [向拝]竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	[身合]朱塗、黒漆塗(格天井の格縁) [向拝]朱塗、彫刻：極彩色	飾 金 物 等	[身合]破風板小口銅板巻 [向拝]破風板小口、桟破風板銅板巻
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	[身合]虹梁(絵様) [向拝]虹梁(絵様、鳥)、木鼻(龍、亀)、懸魚(狐)		



写真96-8 正面



写真96-9 正面・側面



写真96-10 内部

墨付が建物の小屋梁に遺されている。

規模は正面3間、側面4間で、切妻造(起屋根)、向拝1間(切妻造、起屋根)、桟瓦葺である。軸部は、身合では切石基礎に角柱を立てて地覆、切目、内法長押、頭貫で固め、向拝に角柱を立てて水引虹梁つなぎ、身合とは繫虹梁でつないでいる。組物は、向拝は三斗組とする。柱間装置は、正面板戸、背面両脇間板戸、側面は板張とする。軒は、身合では一軒半繁垂木、向拝は一軒繁垂木とする。妻飾は、透彫を飾る。彫刻は、身合では虹梁の若葉、向拝は木鼻に龍・亀、虹梁に若葉・鳥、懸魚には狐が彫られている。天井は身合が格天井、向拝が竿縁天井とする。塗装は全体を朱塗、格天井の格子(黒) 天板(白) 彫刻を極彩色としている。

割拝殿 (写真96-3、表96-4、写96-11~96-13)

境内の前殿屋根復元工事記念碑(1993)によれば、明治36年(1903)に茅葺を瓦屋根に葺替えたと地域の古老は伝えているが、その他の記述は見当たらぬ。天井画の落款、彫刻などの状況からして、江戸後期の建造と推定する。工匠については不明である。

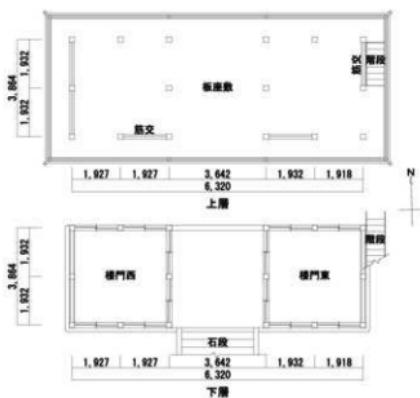


写真96-3 平面図(割拝殿)

規模は、正面5間、側面2間、入母屋造、2階建桟瓦葺、千鳥破風とする。基礎は自然石基礎で、軸部は下・上層共、方柱とし、組物は大斗肘木、上層に擬宝珠高欄を付けた切目縁を四方向に廻す。中備は大斗肘木、軒は二軒半繁垂木。妻飾は板張大瓶

表96-4 割拝殿

建造年代／根拠	江戸後期／建築様式	構造・形式	正面5間(11.34m)、側面2間(3.86m)、入母屋造2階建、瓦葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎
軸 部	〔上層〕柱頭・頭貫 〔下層〕土台・角柱・虹梁、 桁梁、妻梁	組 物	〔上層〕大斗絵様肘木 〔下層〕絵様肘木
中 備	〔上層〕板壁 〔下層〕なし	軒	〔上層〕二軒半繁垂木
妻 飾	板壁、懸魚	柱 間 装 置	〔下層〕アルミ引違戸、アルミ引違窓、板張
縁・高欄・脇障子	〔上層〕四方擬宝珠縁高欄付	床	〔上層〕板張 〔下層〕土
天 井	〔上層〕なし 〔下層〕鏡天井(通路部分)、他不 明	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、虹梁・肘木(彩色)	飾 金 物 等	なし
繪 画	〔下層〕天井画(法眼探雲守照の筆落款)	材 質	不明
彫 刻	〔上層〕大斗肘木、奉鼻、懸魚 〔下層〕肘木、虹梁(花)		



写真96-11 正面



写真96-12 背面・側面



写真96-13 内部・天井

東、拝懸魚、塗装は全体を朱塗、彫刻の虹梁、肘木、懸魚を極彩色とする。上層部に外壁は無く吹き放しである。神楽を観覧する場所ではなかったのかと推測する。下層中央間の鏡天井には、龍、孔雀の天井画が描かれ、法眼探雲守照(1724~1812)の筆落款が残されている。

肘木、懸魚等彫物は極彩色で塗られている。本殿・拝殿・割拝殿は建物全体を朱色で統一しており、これらが一体となって社殿を形成し、貴重な建物である。春の例大祭には露店市がたち賑わい、地域における信仰の深い歴史ある神社である。

(久保喜由)

まとめ

6世紀後半に築造されたと推定される前方後円墳上にある三間社流造の本殿は、壁面に彫刻はなく、木鼻、蟇股、支輪、手挟、両脇障子、海老虹梁の若葉の彫物、拝殿向拝は木鼻に龍・亀、虹梁に若葉・鳥、懸魚には狐が彫られている。割拝殿は、虹梁、

【参考文献】

『群馬懸北甘楽郡史』本田亀三著 昭和3年

『甘楽町史』甘楽町役場 昭和54年

『上野国神社明細帳10』群馬県文化事業振興会 平成17年

『富岡甘楽平成神社明細誌』群馬県神社総代会富岡甘楽支部 平成5年

97 (沼田) 榛名神社 ((ぬまた) はるなじんじゃ)

表97-1

神社名	種名神社	所在地	沼田市櫻町2851
旧社格	県社	所有者・管理者	宗教法人 種名神社
主祭神	埴山姫命・日本武命・磐原道真命・建御名方	神事	恒例祭(8/4)、諏訪祭(旧7/24)、大國祭(10/15)
創立・沿革	永仁6年(1298)天満大神(薄根大明神)の社地(薄根川落合)に、宝高大明神(武尊)を移す。『上野国明神帳』永祿2年(1559)櫻名大神を根岸に移す。諏訪大神を寛政年間(1789~1801)根岸に移す。明治末に合祀、三柱一座となる。昭和3年(1928)県社に昇格。昭和28年(1953)宗教法人櫻名神社となる。「櫻名神社御由緒」		
文化財指定	なし		

位置・配置(図97-1、図97-2)

沼田駅より、台地に向かう八間通り（駅前通り）の交差点を北へ向かうと、一の鳥居、参道があり榛名神社はその正面に位置する。境内は南北面が道路、東西が道路と駐車場、西面が道路と住宅に囲まれている。南面の石段から先に1対の狛犬、石鳥居、1対の御神灯、拝殿、幣殿、本殿がある。本殿は板塀に囲まれ、南を正面として鎮座している。石

殿の東に手水舎、南西の隅に神楽殿、その北に御札授与所を配している。さらに、本殿の北に大黒様の覆屋、神輿庫、本殿の西に多目的ホールがある。社務所は南面道路脇参道の東面にある。石鳥居は、寛永17年(1640)真田内記信政の建立で、源訪神社の鳥居であったものが合祀により移設されたものである。

由来および沿革

沼田氏十二代幕岩城主沼田万鬼斎頤泰は倉内城を築城するにあたり、幕岩城内に祀られていた冥輪の鎮守権名大神を、天満大神を祀る薄根大明神（現在の権名神社）に奉遷した。ここに権名大神、宝高大神、薄根大神の三社を祀ることとなった。これより権名満行大権現を名のり根岸村を権名村と称した。享保19年（1734）権名満行大権現は正一位となる（『沼田万鬼録 第三十二号』）。

諏訪大神は滝瀧より、寛政年間(1789~1801)に移された。明治2年(1869)に棟名満行大権現を棟名神社と改め、明治6年(1873)郷社となる。明治41年(1907)諏訪神社を合祀し三柱一座となる。昭和3年(1928)2月県社に昇格し、昭和28年(1953)2月宗教法人棟名神社となる。

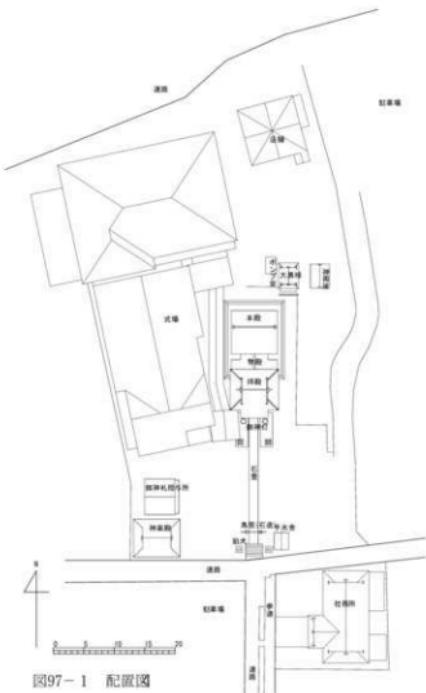


图97-1 配置图



写97-1 境内

本殿 (図97-2、表97-2、写97-2~97-7)

建造年代にかかる資料として延享2年(1745)、明和3年(1766)、文政5年(1822)、嘉永6年(1853)、年代不詳の棟札を残しているが、これらは屋根葺替、お祓い、修復に関するもので建造当初の物ではない。『県社榛名神社御由緒』によれば、当造構の建造は、寛永4年(1627)11月真田河内守の建立であるという。現時点ではそれを直接裏付ける資料がないことや、蟇股、象鼻、組物、唐草絵様など建築の各種の特徴から、建造年代を17世紀初期頃と推定する。壁面彫刻は後補とみられる。

拝殿、幣殿、祝詞殿と続き、階5段、本殿向拝、

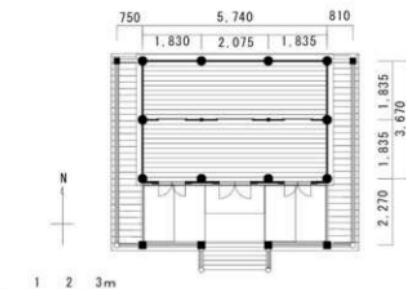


図97-2 平面図(本殿)

表97-2 本殿

建造年代／根据	17世紀初期／建築様式	構造・形式	三間社流造平入、正面3間(5.74m)側面2間(3.67m)、平入、向拝1間、銅板瓦棒葺
工 匠	不明	基 础	自然石
軸 部	柱柱部土台 [身舎]地覆(背面)、丸柱 [向拝]	組 物	[身舎]出三斗 [向拝]連三斗
中 備	[身舎]なし [向拝]蟇股	軒	二軒繋垂木
妻 飾	虹梁、妻授首、大幣束	柱 間 裝 置	開戸、板張
縁・高欄・脇障子	擬宝珠高欄 正面、三方縁(正面彫刻、側面切目縁)、脇障子	床	拭板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、(輪部、地覆、地長押)、極彩色(長押、頭貫、妻壁、壁面彫刻)、金襷巻(柱)、黒塗(垂木)	飾り金物等	破風: 拝み、腰、破風尻 御扉: 銅金具 長押・地長押: 角金具
繪 画	[御屏上]鳳凰図、極彩色 [妻毬芭板]花と雲	材 質	桧
彫 刻	虹梁・蟇股・木鼻・壁面(後補)、懸魚		



写97-2 正面



写97-3 背面・側面



写97-4 妻面



写97-5 向拝-海老虹梁



写97-6 向拝正面



写97-7 向拝-木鼻・出組

浜床、御扉の奥が外陣、そして内陣となる。三間社流造平入、銅板瓦棒葺、正面3間、侧面2間、内陣化粧屋根裏、外陣板張、軒は二軒繁垂木、組物は出三斗、豕投首、三方縁（正面疊敷、側面切目縁）、擬宝珠の高欄、一部極彩色。床は拭板張。材質は桧である。身舎丸柱は石場建てとし、足固め、床梁を施す。柱に大斗、出三斗にて実肘木、丸桁を受ける。破風拝みに蕪懸魚（鰐付）、本殿と幣殿の間を屋内に囲い込み、祝詞殿としている。

まとめ

本殿外部壁面、軸部は全体的に朱色、垂木は黒、彫刻・木鼻・組物・虹梁は多色に彩色されている。向拝正面は組物・琵琶板・頭貫・海老虹梁・幕股に

極彩色が施されている。これらは後補のため、建造当初の彩色は不明である。海老虹梁は肩が低く、幕股の肩は甲高、象鼻は板状、妻飾は大瓶束・豕又首など、江戸初期の特徴が表れている。東西壁面にそれぞれ一对の唐獅子牡丹団柄の彫刻板（後補）が取付けられている。

（石坂孝司）

【参考文献】

- 『沼田市史 別巻2 沼田の建物編』沼田市史編さん委員会 平成11年
- 『利根郡史』群馬県利根教育会 昭和50年
- 『樽名神社由緒記』樽名神社
- 『沼田万華鏡 第三十二号』伊藤武 平成2年

98 須賀神社 [すがじんじゃ]

表98-1

神社名	須賀神社	所在地	沼田市中町1141
旧社格	郷社	所有者・管理者	宗教法人須賀神社
主祭神	素戔嗚尊・穗高見命	神事	元旦祭(1/1)、祇園祭(8/3-5)、御神迎(旧11/1)、新嘗祭(11/23)、大祓式(12/31)
創立・沿革	文和年中(1352～1356)城下の鎮守として駿府町に住吉社と素戔嗚命を合祀したのがはじめとされる。室町・戦国時代を経て、慶長17年(1612)天王を現在の地、中町に鎮座させた。		
文化財指定	須賀神社の大ケヤキ(県天記 昭和29年3月)		

位置・配置(図98-1、写98-1)

沼田市内本町通り中町の信号を南に向かうとその正面の広場が須賀神社の境内である。境内は周りを道路に囲まれた敷地であり石柵を周囲に巡らしている。石製の神明鳥居を抜け、一対の狛犬、拝殿、幣殿、その他の建物は、本殿の北に稻荷社を祀った覆屋、南西に坊新田町・中町のまんど小屋、その南に上之町のまんど小屋が置かれている。また、拝殿の西には手水舎があり、西面と南面の角に休憩所、西面中央に便所が置かれている。本殿北側には市五郎



図98-1 配置図



写98-1 境内全骨

稻荷社が祀られている。境内南東部に石宮群が立ち並んでおり、境内末社14社、神明宮・松尾社・稻荷社・菅原社・大巳貴社・少彦名社・山祇社・櫛真智社・加茂社・猿田彦社等があったと中町町誌に記録されている。本殿裏に樹齢400年以上と推定される大ケヤキがあり、県指定天然記念物となっている。

由來および沿革

社伝によると、創建は文和年中(1352～1356)に沼田城主沼田小太郎が、城下の鎮守として鍛治町に住む吉社と素戔鳴命を合祀したのがはじめとされる。この後、室町、戦国時代を経て、真田信幸が天正18年(1590)から治め、慶長17年(1612)台地の上にまちづくりを行い、牛頭天王宮を現在の地、中町に鎮座させた。牛頭天王は商人の市神である。明治元年(1868)11月には素戔鳴命が出雲の国、須賀の邑にいたことから須賀神社と改称した。同6年(1873)村社となり、昭和3年(1928)郷社に昇格した。

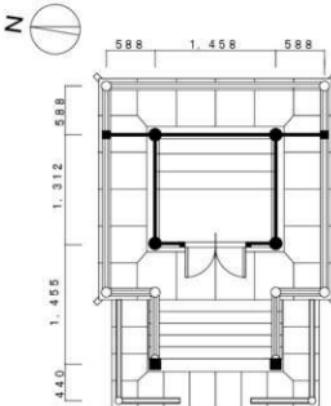


图98-2 平面图(本段)

本殿（図98-2、表98-2、写98-2～98-7）

文化5年(1808)と嘉永7年(1854)の棟札を残しているが、当造構の建造年代は、建築の各種特徴から後者とする。大工棟梁、吾妻郡四万村の田村若狭正源喜之、脇棟梁、山田茂八寿久、青柳藤七、彫工棟梁として下之町の閑安太郎、小川専藏長義、小林源太郎、石原甲斐之輔知信、その他に石工棟梁、登内文蔵親誠が記されている。

一間社流造銅瓦葺とし、千鳥破風付、軒唐破風とする。身舎及び向拝の軒は二軒繁垂木とし、向拝は唐破風とする。大床を正面、側面、背面の四方に巡らし、脇障子を付ける。組物は向拝を三斗積上変形、身舎を三手先、腰組を三手先と持送の併用、軒は三重の板支輪、中備は向拝に設けず身舎を彫刻板

嵌込とし、妻飾には二重虹梁、組物、彫刻を配している。軒及び妻の出はともに深い架構となっている。身舎柱・向拝柱の太さに比して海老虹梁、水引虹梁を大きく木取り、籠彫としている。階の下に浜縁（擬宝珠高欄付）、階の上に大床（擬宝珠高欄付）を四方に回し脇障子を設ける。

彫刻は精巧かつ多彩である。虹梁の他、手挾、持送、木鼻（獅子、狛）、兎毛通、束（天邪鬼）、彫刻板（草花、波）等どれをみても精巧なつくりである。床は拭板張、天井は竿縁天井とする。

檜の良材で造られており、状態は非常に良好。彫刻の彩色は龍の口、腹、および獅子の口の中に朱を入れてあるがその他は素木造とし、素材の良さがそのまま生かされている。

表98-2 本殿

建造年代／根拠	嘉永7年(1854)／棟札	構 造 ・ 形 式	一間社流造(1.45m)、側面1間(1.31m)、千鳥破風付、向拝1間唐破風付、銅板瓦葺
工 匠	[大工]棟梁 田村若狭正源喜之、脇棟梁 山田茂八寿久 [彫工]棟梁 閑安太郎義正	基 础	基壇、亀腹地覆(石製)
軸 部	[身舎]九柱、地覆、地長押、内法長押、[向拝]角柱、地覆	組 物	[身舎]三手先 [腰組]三手先、持送 [向拝]三斗積上変形
中 備	[身舎]彫刻板嵌込	軒	[身舎]二軒繁垂木、板支輪 [向拝]二軒繁垂木
妻 飾	二重虹梁、組物、彫刻板、蕪懸魚	柱 間 裝 置	両開戸(棧唐戸)、落込板(壁)
緋・高欄・脇障子	浜縁(擬宝珠高欄付)、大床(擬宝珠高欄付)	床	拭板張
天 井	竿縁天井、板支輪(三重)	須弥壇、扇子、宮殿	なし
塗 装	素木、朱塗(龍の口、獅子の口)	飾 金 物 等	破風金物(拌み中・破風尻)、角金具(長押・地覆)、小口金物(垂木・桁)
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	柱、虹梁、組物、木鼻、妻飾、水引虹梁、海老虹梁、持送、脇障子(鯉躍登図)		



写98-2 全景



写98-3 背面・側面



写98-4 向拝



写98-5 大床



写98-6 妻虹梁



写98-7 腰組

拝殿（図98-3、表98-3、写98-8～98-10）

文化5年(1808)の棟札と明治33年(1900)の正面図、側面図を残している。建築の各種特徴から見て、建造年代は後者とする。正面3間、側面3間、入母屋造平入とし、正面に1間の唐破風の向拝を付ける。

明治33年の図面に大工棟梁森山盛八、他副棟梁1名、脇棟梁3名が記されている。平成24年(2012)に漏水のため、屋根を瓦から銅板に葺き替えた。軒は身舎、向拝とも二軒繁垂木とし、向拝は唐破風とする。身舎柱は丸柱とし、向拝柱は角柱とする。妻飾に木連格子を配し、柱間装置に正面棧唐戸、側面舞良戸・落込、脇障子を配す。内部天井は一手出組格天井とし、床は床垫張となっている。全体的に素木仕上げであるが、向拝獅子頭の眼に金色の彩色がある。

向拝手引虹梁上に置く大斗出三斗積み重ねにて、唐破風の桁及び虹梁を受ける。向拝に組物、彫刻を集中させ、海老虹梁にて身舎に繋ぐ。身舎虹梁両脇には龍(正面右)、虎(正面左)の彫刻版が取り付けられている。獅子が持つ玉は籠彫である。正面棧

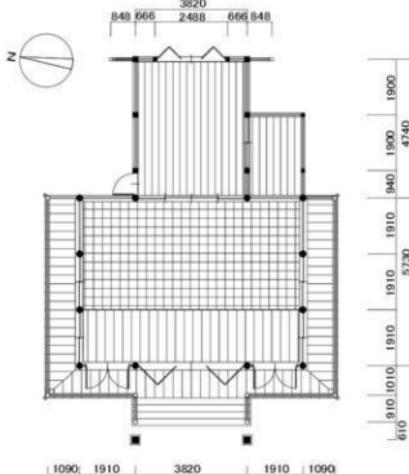


図98-3 平面図(拝殿・幣殿)

表98-3 拝殿

建造年代／根据	明治中期／設計図	構造・形式	正面3間(7.64m)、側面3間(5.73m)、入母屋造、平入、向拝1間唐破風付、銅板葺
工 匠	[大工]棟梁 森山盛八、副棟梁 酒井仁平、脇棟梁 高橋竹次郎、米庄長作、山田貞助 [彫工] 棟梁 間安太郎義正	基 础	切石
軸 部	[身舎]丸柱(桧)、地長押、内法長押、土台 [向拝]角柱(櫛)、手扶	組 物	[身舎]出三斗 [向拝]皿斗、大斗、二手先、詰組
中 備	[身舎]出三斗、斐蒼板絵模様妻虹梁、透彫彫刻 [向拝]妻股、詰組、虹梁斗拱幕股(二重)	軒	[身舎]二軒繁垂木 [向拝]茨垂木
妻 飾	[身舎]妻虹梁、木連格子、平三斗	柱 間 装 置	[正面]棧唐戸 [側面]舞良戸、落込板、脇障子
縁・高欄・脇障子	[正面側三方]擬宝珠高欄、登高欄、三方切目縁	床	床垫
天 井	一手出組格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、彩色の痕跡(彫刻)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	[向拝柱・彫刻]檜 [身舎丸柱]桧
彫 刻	[向拝]虹梁受手肘木(波・亀)、虹梁(鳥)、葵股(人・動物・鳳凰)、兎毛通(鳳凰)、手挾(龍)、木鼻(玉獅子) [身舎]欄間(龍虎透彫一对)		



写98-8 全景



写98-9 向拝



写98-10 内部

表98-4 幣殿

建造年代／根拠		明治中期／設計図	構造・形式	正面1間(3.82m)、側面3間(4.74m)、切妻造銅板平葺
工 匠	[大工]棟梁 森山盛、副棟梁 酒井仁平、脇棟梁 高橋竹次郎、米庄長作、山田貞助	基 墓	礎 切石	
輪 部	角柱、地長押、内法長押、土台	組 物	軒 [外部]出三斗、大斗肘木	
中 備 束			一軒繁垂木	
妻 飾	懸魚蕉	柱 間 裝 置	[建具]両開折戸、片開戸、嵌戸窓、板壁	
縁・高欄・脇障子	脇障子(板)	床	拭板張	
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし	
塗 装	素木	飾 金 物 等	[長押]釘頭金物	
繪 画	なし	材 質	桧	
彫 刻	虹梁(波・亀)、木鼻			



写真98-11 側面



写真98-12 妻面



写真98-13 内部

唐戸に織田木瓜の神紋の浮彫が嵌め込まれている。

◆◆◆ 幣殿（図98-3、表98-4、写98-11～98-13）

拝殿と一体で建造され、正面1間、側面3間の簡素な切妻である。柱上に台輪を廻し、大斗平三斗、妻大斗出三斗にて丸桁を受け、木鼻にて頭貫の小口を整えている。本殿正面に面する虹梁に「波に亀」の図柄が彫り込んである。壁面の明り取り窓には七宝繋ぎに彫り抜いた彫刻板が嵌め込まれている。

まとめ

幣殿袖壁よりの板塀に三方を囲まれた中に本殿がある。屋根は銅板棒葺とし千鳥破風に向拝の唐破風と照屋根と起屋根を組み込み、箱棟を銅板鬼板に止め、覆板を二段とし、鳥糞を配す。妻は箕甲納めのため破風の照りが増し、屋根が一層そびえ立つ感がある。軒付及び裏甲を銅板一段刻み納めとしている。妻は身舎丸柱に三手先実肘木にて妻虹梁を受け、さらに一手先に二重虹梁を配することで、板支輪を四重とし、柱間に妻の出を大きくしている。

彫刻は水引虹梁（亀と渦）・海老虹梁（龍と波）・手挾（鳥と松）の籠彫、身舎木鼻（獅子）・向拝木鼻（猿・麒麟）の丸彫、頭貫中央に付く（牡丹）・

脇障子（鯉の滝登）・階両脇の彫刻板（龍・鳳凰）の透彫、腰組三手先を受ける手肘木（渦）の丸彫、妻の束（天邪鬼）の彫刻板と多種多様でどれを見ても完成度が高い。彩色は龍と獅子の口に朱の痕跡がみられる。

拝殿屋根は一字葺とし箱棟を鬼板止とし入母屋を降り棟にて納める。

向拝に彫刻が集中している。木鼻（玉獅子）を丸彫、手挾（渦）・手肘木（亀と渦）・彫刻板（物語図）・兎毛通（鳳凰）を透彫としている。水引虹梁の中央部に鳥が彫り込まれている。玉獅子の眼に金色の彩色がみられる。身舎の海老虹梁取付け部両脇に透彫の彫刻板（龍・虎）が嵌め込まれている。御扉棟唐戸には織田木瓜神紋が取り付けられている。拝殿内に一之宮、二之宮の2基の宮神奥が格納されている。

幣殿の七宝繋ぎの彫刻板は櫛一枚板の彫り抜きで七宝の繋ぎ目を8辺の花弁柄としその花弁の中央に穴明を施した精巧な造りである。

（石坂孝司）

【参考文献】

- 『沼田市史 別巻2 沼田の建造物』 沼田市史編さん委員会 平成11年
- 『中町々誌』 中町々誌刊行委員会 平成8年

99 (戸鹿野)八幡宮 ((とがの)はちまんぐう)

表99-1

神社名	八幡宮 ^{はちまんぐう}	所在地	沼田市戸鹿野町800
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 八幡宮
主祭神	兼田別尊 ^{かいたべつそん}	神事	元旦(1/1)、春祭(4/15)、秋祭(10/5)
創立・沿革	創立年月は不明。倉内城(沼田城)の南の守護神として城内に建立。その後、享禄3年(1530)現在の地に遷宮。その後も真田氏によって代々厚く祀られた。		
文化財指定	戸鹿野八幡宮(市史跡 昭和51年3月)、戸鹿野八幡宮の絵馬(市重文 平成12年3月)		

位置・配置 (図99-1、写99-1)

県道269号線増形小学校入口を西に曲がり、沼田南中の前を通り、南に下がる途中の沼田台地の南端に位置する。南面から西面を道路、北面を雜木林、東面の北側から石段にかけて杉林に囲まれた敷地である。入口は南面と北西面の2ヶ所あり、南面入口より石段を進むと1対の石灯籠(宝暦8年(1758))、さらに上ると、1対の献灯(明和9年(1772))があり、拝殿、幣殿、本殿へと進む。一方、北西面入口より石橋を渡り、参道を進むと石鳥居(宝暦3年(1754))があり、1対の御神灯を抜け、拝殿の南西に至る。本殿の西側に諏訪神社が鎮座している。本殿の北側に石宮が一列に置かれ、諏訪神社との間に石地蔵などの石仏が数体置かれている。

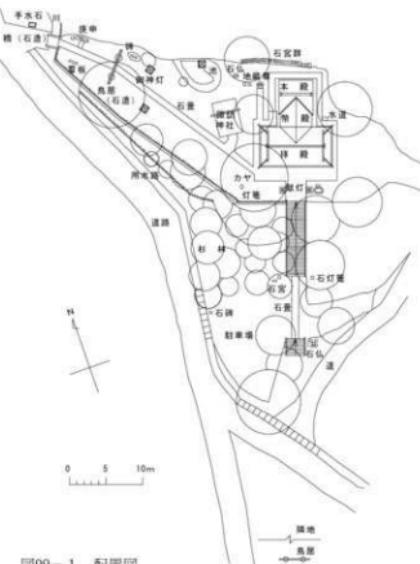


図99-1 配置図



写99-1 境内全景

由来および沿革

創立年月は不明。倉内城(沼田城)の南の守護神として城内に建立。その後、享禄3年(1530)城主沼田万鬼斎顯泰によって現在の地に遷され社殿を建立。弘治2年(1556)沼田上野介祭祀。その後も真田氏によって代々厚く祀られた。

本殿 (図99-2、表99-2、写99-2～99-7)

棟札によると、明暦3年(1657)に着工もしくは上

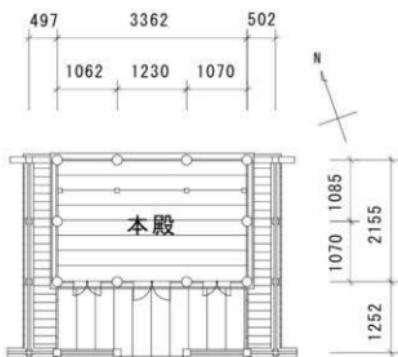


図99-2 平面図(本殿)

表99-2 本殿

建造年代／根拠	明暦3年(1657)／棟札	構造・形式	三間社流造(3.36m)、側面2間(2.15m)、向拝1間、銅板瓦棒葺
工 匠	大何原恵吉(棟札)	基 础	基壇1段、布基礎
軸 部	〔身舎〕丸柱、土台、地長押、腰長押、内法長押、頭貫、〔向拝〕角柱	組 物	〔身舎〕出三斗、〔向拝〕出三斗、連三斗(端部)
中 備	〔向拝〕板幕股	軒	二軒繁垂木
妻 飾	虹梁大瓶束家又首	柱 間 装 置	正面御扉、板壁、火灯窓
縁・高欄・脇障子	三方縁、跳高欄、板脇障子	床	板張
天 井	竿縁天井	須弥壇、扇子、宮鏡	扇子
塗 装	朱塗(外部)、〔向拝〕組物、幕股	飾 金 物 等	なし
絵 画	琵琶板、頭貫、御扉上部(花柄)	材 質	不明
彫 刻	幕股、懸魚		



写99-2 全景



写99-3 背面・側面



写99-4 向拝



写99-5 内部



写99-6 身舎彩色の痕跡



写99-7 身舎内部

棟 万治元年(1658)に竣工、また寛政10年(1798)に修復をしたことが分かる。当遺構は三間社流造、側面2間、銅板瓦棒葺とし軒は二軒繁垂木とする。大床を正面、側面の三方に巡らし、脇障子を付ける。組物は向拝を出三斗(端部は連三斗)、身舎を出三斗とする。中備は向拝を幕股とし身舎には設けていない。向拝と身舎は古風な繋梁で繋いでいる。妻飾は虹梁大瓶束家又首とする。床は拭、天井は竿縁天井とする。彫刻は虹梁・幕股・木鼻などにみられる。外部塗装は全体的に赤色としているが、幣殿側から身舎正面を見ると、長押上部壁面・頭貫・組物・柱上部に極彩色を施していることがわかる。

拝殿 (図99-3、表99-3、写99-8～99-10)

建造年代を直接示す資料は残されていないが、遺構内に残る祈祷札絵馬の年代、葦戸、舟肘木を用い



図99-3 平面図(幣殿・拝殿)

表99-3 拝殿

建造年代／根拠	18世紀初期から中期／建築様式	構造・形式	正面5間(9.11m)、側面2間(3.94m)、入母屋造、平入、銅板瓦棒葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	基礎1段、置石
軸 部	角柱、地長押、土台	組 物	舟肘木
中 備	なし	軒	せがい造
妻 飾	木連格子、猪目懸魚	柱 間 装 置	蔀戸
縁・高欄、脇障子	なし	床	疊敷
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	桧、松、杉
彫 刻	虹梁(茨絵様)		



写99-8 側面



写99-9 妻面



写99-10 内部・絵馬

る等建築様式の特徴より、18世紀初期～中期頃の建造と推定できる。正面6間、側面2間入母屋造平入とする。屋根は銅板瓦棒葺とするが当初は茅葺である。拝殿内部書によると明治20年(1887)、明治27年(1894)、昭和34年(1959)、平成27年(2015)に修繕が行われたとある。組物は舟肘木とするが、中備は用いていない。床は疊敷とし、天井は竿縁天井とする。沼田市指定重要文化財の絵馬を保管している。

(境内社諏訪神社本殿 (図99-4、表99-4、写99-11～99-13))

建造年代は向拝に繋ぎ梁を使用すること、妻虹梁の唐草絵様が簡素でよく巻き込んでいる等建築の各

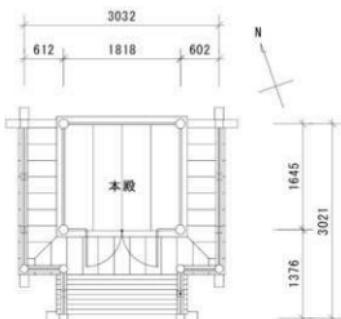


表99-4 境内社諏訪神社本殿

建造年代／根拠	17世紀末期／建築様式	構造・形式	一間社流造(1.18m)、側面1間(1.64m)、向拝1間、トタン瓦棒葺
工 匠	不明	基 础	切石
軸 部	[身舎]丸柱、土台、切目長押、内法長押、頭貫 [向拝]角柱	組 物	[身舎]出三斗 [向拝]連三斗
中 備	[向拝]板幕股	軒	打越二軒繁垂木
妻 飾	家紋首	柱 間 装 置	正面板扉、板張
縁・高欄、脇障子	三方縁、擬宝珠高欄、脇障子	床	板張
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	桧
彫 刻	虹梁、幕板、木鼻		



写99-11 正面



写99-12 妻側



写99-13 内部

種特徴より17世紀末期と推定される。修復歴の棟札によると寛政3年(1791)、享和2年(1802)、文化9年(1812)、天保8年(1837)、嘉永7年(1854)に修復を施している。大床を正面、側面の三方に巡らし、脇障子を付ける。組物は向拝を連三斗、身舎を出三斗とする。中備は向拝を幕股とし、身舎には設けていない。

まとめ

創建以来、歴代の沼田城主沼田氏、真田氏、本多氏、黒田氏、土岐氏に庇護され各所に名が残っている。沼田町の八幡宮として武士の崇敬が厚く、よく競射が行われた。武士の活躍ぶりが描かれている大小絵馬は、沼田市の重要文化財に指定されている。現在でも地域の方々によって大切に祀られている。

現在は本殿及び幣殿の外部に有色の保護塗装が施されているが、内部の向拝と正面は当初の彩色が僅かながら遺されており、正面円柱には金彩色で塗ら

れていた形跡がある。斗組、虹梁、幕股などの精細な彩色絵様の痕跡も見受けられる。

向拝は3間の両側2か所に水引虹梁を設け、その上の幕股実肘木により、丸桁を受ける構造としている。中央部には虹梁、幕股は設けない架構としている。

拝殿は水平の隅木、出梁に出桁を受ける軒の構造で屋根を支持するせがい造となっている。向拝、縁、階を設げず、柱間装置を蔀戸とし、柱頭部に舟肘木を設ける程度の簡素な佇まいである。

境内社諏訪神社本殿は数多くの棟札が内部に収蔵されており、こちらも長年修復されて今まで保存されてきたことが窺える。

(石坂孝司)

[参考文献]

- 『沼田市史 別巻2 沼田の建物編』沼田市 平成11年
- 『利根郡誌』群馬県利根教育会 昭和50年
- 『利南村誌』利南村史編纂委員会 昭和56年

102 (平川)日光神社 [(ひらがわ)にっこうじんじゃ]

表102-1

神社名	日光神社	所在地	沼田市利根町平川甲777
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 日光神社
主祭神	田心姫命	神事	春祭(4/3)、夏祭(8月最終日曜)、秋祭(11/3(お供餅))
創立・沿革	明治40年(1907)8月26日諏訪神社、熊野神社、八幡宮、大山祇社、千鳥新田の神明宮を、滝尾神社に合併して、日光神社と改称した(『利根村誌』より)。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図102-1、写102-1)

日光神社は沼田市の東部、旧利根村平川地区(旧平川小学校東側)に位置する神社である。南側前面道路から鳥居をくぐり参道を進むと、左手に諏訪社がある。正面に覆屋があり、その中に、本殿が鎮座している。境内北側は樹木が生い茂っている。

由来および沿革

『利根村誌』によると、明治40年(1907)8月26日諏訪神社、熊野神社、八幡宮、大山祇社、千鳥新田の神明宮を滝尾神社に合併して、日光神社と改称した。



図102-1 配置図



写102-1 境内全景

本殿 (図102-2、表102-2、写102-2～102-10)

日光神社本殿の創建は棟札により、天保13年(1842)だと思われる。軸部白木、彫刻を極彩色の作りからも天保年間と考えられる。棟札では、大工後見宇舗丈右衛門藤原堯知、大工棟梁松岡出雲正藤原當盛、彫工石川安兵衛と記されている。裏面には、当時の氏子の名前が記されている。

本殿の規模は、一間社流造椽板葺、側面1間、向拝唐破風付。

組物は、身舎三手先、向拝連れ三ツ斗手挟とし、中備は幕股である。軒は二軒垂木、妻飾りは二重虹梁大瓶束で飾られている。

彫刻は、海老虹梁透かし彫り、高欄、幕股、唐破風(毛毬通)降懸魚、木鼻に極彩色で施されている。壁は、左右背面とも、龍の彫刻がされていて、背面に彫工足利の住石川安兵衛と記されている。

まとめ

日光神社は明治40年8月26日諏訪神社、熊野神

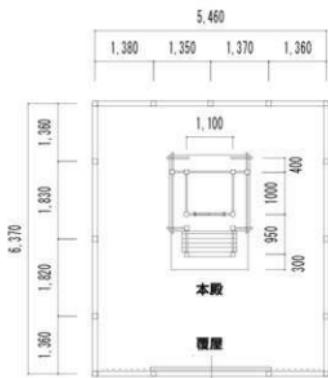


図102-2 平面図(本殿)

表102-2 本殿

建造年代／根拠	天保13年(1842)／棟札	構造・形式	一間社流造(1.10m)、側面一間(1.00m)、向拝1間軒唐破風付、本瓦棒葺、覆屋付
工 匠	[大工]棟梁 松岡出雲正藤原盛當 [彫工]石川 安兵衛	基 碇	切石基礎
軸 部	[身舎]丸柱 土台 [向拝]水引虹梁 海老虹 手挟	組 物	[身舎]三手先 [向拝]連三斗
中 備	幕股	軒	二軒繁垂木
妻 飾	二重虹梁大瓶束 笮形、拝懸魚、降懸魚	柱 間 裝 置	正面：板戸
縁・高欄・脇障子	登高欄 握宝珠高欄 脇障子	床	板張
天 井	井なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木。極彩色(板支輪、嵌込彫刻、海老虹梁)、黒塗(垂木)	飾 金 物 等	破風
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	虹梁 高欄 幕股 唐破風(兔毛通) 降懸魚 木鼻		



写102-2 正面



写102-3 側面1



写102-4 側面2



写102-5 海老虹梁



写102-6 腰廻り



写102-7 妻面

社、八幡宮、大山祇社、千島新田の神明宮を滝尾神社に合併して、日光神社と改称した。同敷地内にある諏訪社には、合併まで祀られていたお宮がある。幕股に鎌の彫刻が施されている。

虹梁の唐草絵様がレリーフになっている事、海老虹梁が透彫、彫刻板支輪、水引虹梁上部を彫刻充填している事、虹梁に見る地紋彫、組物を積上げている事から、江戸末期の様式、棟札の天保13年(1842)

は妥当だと推測できる。

日光神社では今でも年に3回お祭りが行われている。4月3日春祭り、8月最終日曜夏祭り、11月3日秋祭り（お供餅）。現在でも地元の人たちにとって、身近な神社だと言える。

(三代一佳)

【参考文献】

『利根村誌』利根村誌編纂委員会 昭和48年

106 (下古語父)諏訪神社 ((しもこごふ)すわじんじゃ)

表106-1

神社名	諏訪神社	所在地	沼田市白沢町下古語父字櫛反609
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 諏訪神社
主祭神	建御名方命 木花佐久夜鹿亮命	神事	春祭り(4/3)、夏祭り(7/23)、秋祭り(10/2)
創立・沿革	不詳であるが、保存されている棟札から寛文元年(1661)、享和3年(1803)などの年号が確認できる。		
文化財指定	諏訪神社舞殿(市重文 昭和57年2月)、宝鏡印塔(市重文 昭和57年2月)		

位置・配置 (図106-1、写106-1)

諏訪神社は沼田市旧白沢地区下古語父に位置する。県道64号平川横塚線 立岩から東へ600mの下古語父集会所の北100mの雨乞山から連なる尾根の杉木立の中にある。

参道の最初の石段を上ると左右に石灯籠がある。石段ではなく左をたどると宝鏡印塔を経て鳥居へ至る。

正面鳥居から第二の石段を昇ると舞殿があり、そこをくぐると広場がある。広場の東側擁壁の下が駐車場。正面の第三の石段を上ると社殿(拝殿・幣殿・本殿覆堂)がある。拝殿の西に祠・石宮群があり、本殿覆堂の東に石宮群・石碑・祠がある。

由来および沿革

不詳であるが、保存されている棟札から読み取れるのは、寛文元年(1661)に造立され、宝曆11年(1761)に修復を受け、文化12年(1815)に再建、文政

10年(1827)に再建、嘉永6年(1853)に遷宮、文久元年(1861)に遷宮をしている。村社として連綿と続いてきた歴史がある。



写106-1 境内全景

舞殿 (図106-2、表106-2、写106-2～106-7)

舞殿は正面10.02m、側面5.47m、入母屋造、平入で割拝殿形式の参道が建物を貫いている。屋根は

瓦葺(昭和31年(1956)改修前は茅葺)、軒は一軒疎垂木、せがい造。軸部は240角の柱を妻側に6本配し、参道脇の4本は145角で取外可となっている。参道部は床を設置できる様になっている。吹放で壁はない。床高1m、せり出し舞台の仕掛けもある。舞台下は楽屋として使用されていた。舞台では無病息災、安全繁栄を祈願し、これらの満願成就、豊年万作等を祝い、神徳に感謝のための舞を奉じた。拝殿の新築(昭和10年(1935))、舞台屋根の改修祝いには近隣町村より同好者を招き、盛大な地芝居を演じ奉納した。

舞殿の建造年は定かでないが、下古語父区有文書に弘化4年(1847)10

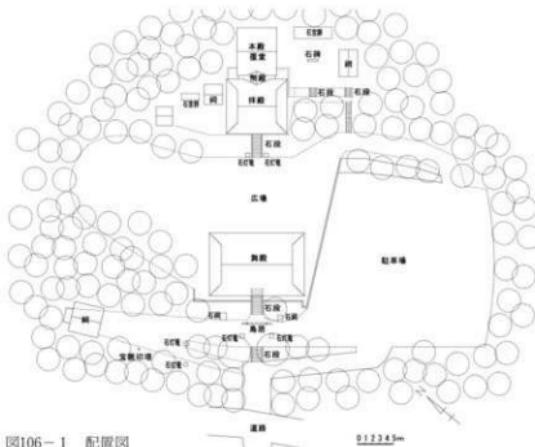


図106-1 配置図

月の「屋根葺替 莖縛割当表」があり、茅葺屋根は40年から50年の耐久性が考えられることから、少なくとも寛政年間(1789~1801)まで遡れると推定され

る(現地看板)。年代指標を欠くが土台がないことと、1間モジュールが6.2尺であることなどから、江戸末期の建造と推定する。

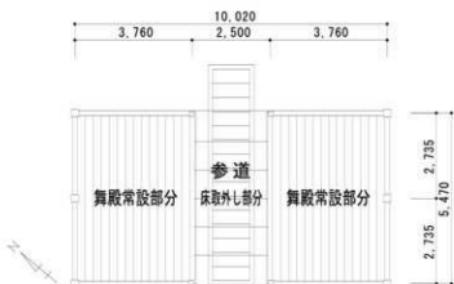


図106-2 平面図(舞殿)

表106-2 舞殿

建造年代／根拠		江戸末期／建築様式	構造・形式	正面10.02m、側面5.47m、入母屋造、平入、茅葺(当初茅葺)
工	匠	不明	基礎	礎石
軸	部	角柱	組物	なし
中	備	なし	軒	一軒蘆垂木、せがい造
妻	飾	なし	柱間装置	なし
縁・高欄・監障子	なし	床	板張	
天	井	野地板表	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗	装	素木	飾金物等	なし
繪	画	なし	材質	不明
彫	刻	なし		



写106-2 正面



写106-3 側面



写106-4 舞殿越しに拝殿を見る



写106-5 舞殿西側を見る



写106-6 舞殿小屋見上げ



写106-7 磯石

107 (花咲) 武尊神社 [(はなさく) ほたかじんじゃ]

表107-1

神社名	武尊神社	所在地	利根郡片品村花咲2021
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 武尊神社
主祭神	日本武尊	神事	猿追い祭り(9月の中の申の日)
創立・沿革	明治41年(1908)花咲村内の栗生武尊神社・柄久保諏訪神社・井戸尻諏訪神社を老ノ沢武尊神社に合併した。創建: 建治2年(1276)、社殿再建: 元禄4年(1691)、社殿改築: 大正5年(1916)(記念碑による)。		
文化財指定	武尊神社本殿(村重文 昭和51年7月)、片品の猿追い祭(国重無民 平成13年2月)		

位置・配置 (図107-1、写107-1)

(花咲) 武尊神社は片品村花咲老ノ沢地区の旧片品南小跡地のすぐ北となりの森の中に鎮座する。敷地南東隅の大権・石門から参道は西へ約25m、そこで北へ向きをかえ鳥居を経て約25mで拝殿・幣殿・覆堂に至る。鳥居右手に、二つの諏訪神社、左手に敷地南側から弁天様・不動堂・八坂神社があり、覆堂裏手北側及び東側には50基をこえる石祠がある。

由来および沿革

由来は不詳であるが記念碑によると、創建: 建治2年(1276)、社殿再建: 元禄4年(1691)、社殿改築: 大正5年(1916)。

明治41年(1908)花咲村内の栗生武尊神社・柄久保諏訪神社・井戸尻諏訪神社を老ノ沢武尊神社に合併



写107-1 摄影全景

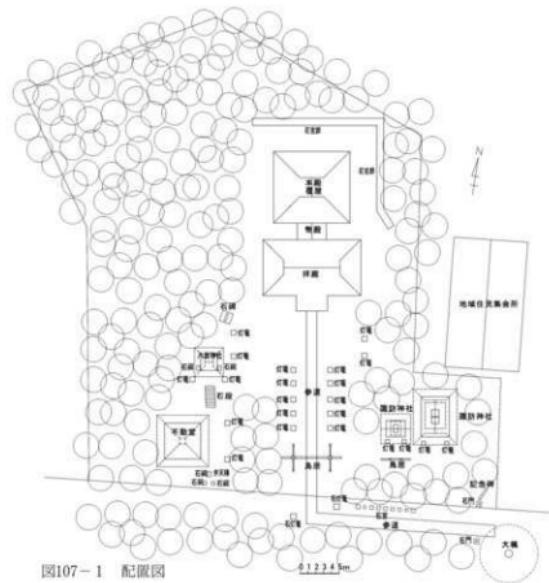


図107-1 配置図

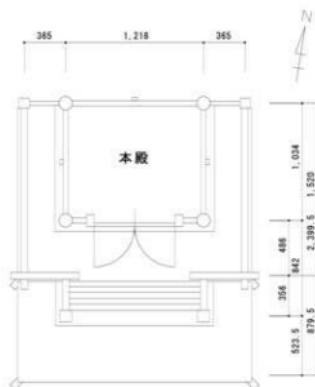


図107-2 平面図(本殿)

した〔片品村史〕。古来保高明神と称され、郡内の總鎮守で武尊山に最も近い靈地と武尊信仰の中心であった。

利根沼田地域にある武尊神社はここから分祀したもの。

本殿 (図107-2、表107-2、写107-2~107-7)

一間社流造板葺目板打、側面1間（間口1.218m、奥行1.034m）、大正5年(1916)改築（記念碑）。軒は二軒繁垂木、支輪はない。大床を三方にめぐらせ脇障子は板壁、階5段を配す。軸部は身舎では丸柱を立て頭貫で固め、向拝柱は角柱を立て海老虹梁で繋ぐ。組物は身舎を出組、連三斗、向拝を連三斗、中備は幕股とする。柱間装置は身舎正面を板戸、その他を板壁としている。妻飾りは虹梁、大瓶束で拝

猪ノ目懸角、降猪ノ目懸角を飾る。木鼻（象）、水引虹梁、海老虹梁の絵様以外には彫刻はない。海老虹梁は反りが少なく水平に近い。手挟はない。色彩のない素木、虹梁の唐草絵様が簡素である。以上のことより17世紀後期から18世紀初頭の建造と考える。

まとめ

本殿の他に拝殿、幣殿、覆堂があるが、明治以降の建物であることから、今回の調査から除いた。

本殿は色彩もなく質素な造りで装飾化が進む前の江戸前期の神社建築を知る上で貴重な建物である。

(荻野 浩)

【参考文献】

『片品村史』片品村史編纂委員会 昭和38年

表107-2 本殿

建造年代／根柢	17世紀後期から18世紀初頭／建築様式	構造・形式	一間社流造1.21m、側面1.03m、向拝1間、目板打板葺屋付
工 匠	不明	基 础	切石
軒 部	[身舎]丸柱、地櫓、虹梁、頭貫 〔向拝〕角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]出組、連三斗 〔向拝〕連三斗
中 備	幕股	軒	二軒繁垂木
妻 飾	虹梁、大瓶束、拝猪ノ目懸魚、降猪ノ目懸魚	柱 間 装 置	正面：板戸、壁：板壁(三面)
総・高欄・脇障子	昇高欄・高欄、脇障子	床	板張
天 井	未確認	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 质	不明
彫 刻	虹梁、幕股、木鼻、懸魚		



写107-2 正面



写107-3 側面



写107-4 向拝



写107-5 向拝組物木鼻



写107-6 向拝組物軒廻り



写107-7 妻面

110 (川場湯原) 武尊神社 ((かわばゆばら) ほたかじんじゃ)

表110-1

神社名	武尊神社	所在地	利根郡川場村川場湯原649
旧社格	村社	所有者・管理者	宗教法人 武尊神社
主祭神	日本武尊	神事	春の祭典(4/18)、秋の大礼祭(10月第1日曜日)
創立・沿革	明治17年(1884)合併合祀により武尊神社となる。それ以前は湯前薬師堂であり、正徳5年(1715)薬師堂普請を始め、享保3年(1718)完成。その後薬師如来を奉戴して帰村し祭る。宝曆5年(1755)改修記録あり。更に後、郡内より募金を募り享和4年(1804)再建(写真集・川場村の文化財・川場村誌)。		
文化財指定	武尊神社(村重文 昭和32年9月)		

位置・配置(図110-1、写110-1)

川場村の北部東、上州武尊山の麓に位置する。山間部地域にしては敷地は狭く、境内には本殿と石鳥居があるのみ。古くは「川場湯原」の地名のごとく温泉街であり、神社もその中心であったが、現在は南側に温泉宿1軒のみが宿を営んでいる。大通りからは少し入った宿の裏手になる旧道沿いに建つ。

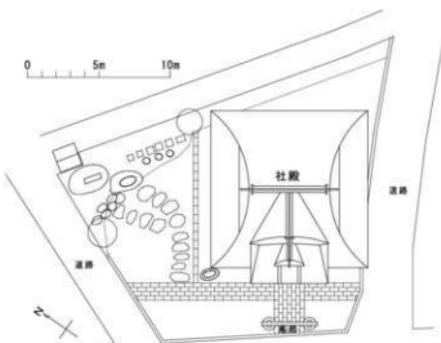


図110-1 配置図



写110-1 境内全景

由来および沿革

武尊山周辺の利根沼田地域には武尊神社は19社(神社庁HP)存在し、その中の片品村花咲の当地方の本社格であった武尊神社の分靈を勧請したのが始まりとの伝えである。元々は湯前薬師を祭っていたお堂である。明治43年(1910)、字中の無格社八幡宮、須賀神社、字木賊川原無格社諏訪神社、字別所無格社三島神社、字太郎無格社地神社、字小住無格社大山祇神社の無格社6社と、境内末社大山祇社と三島社の2社を宇湯の村社武尊神社へ合祀。

社殿(図110-2、表110-2、写110-2~110-7)

湯前薬師堂として建てられたお堂は、名主今井五兵衛の「万覚書」に「正徳5年(1715)薬師堂請負始め享保3年(1718)完成」とある。その後傷みがひどく改築し地元今井孝次氏保管の「募金帳」には、寛政10年(1798)村内湯治客に寄附を募り、享和4年

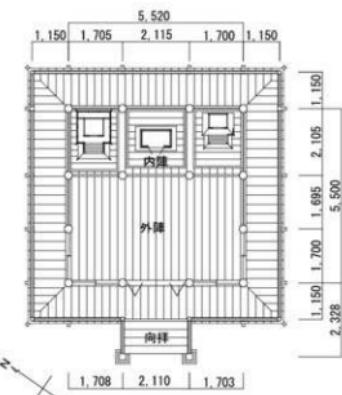


図110-2 平面図(社殿)

(1804)村外広く募金を募り、文化3年(1806)までの出納となっているが、様式から見ても現存の建物の建造年は19世紀初期と見る。村内の虚空蔵堂のお堂と造りは類似しており、正面3間侧面3間の南向き

入母屋造で正面に大きな千鳥破風を付け、以前は茅葺であったが現在は銅板葺、唐破風付の1間の向拝が付く。基礎は自然石、六角の柱が立ち、拳鼻付出組の上に擬宝珠高欄付の縁を四方に廻す。向拝は、

写110-2 社殿

建造年代／根柢	19世紀初期／建築様式	構造・形式	正面3間(5.52m)、側面3間(5.50m)、入母屋造、平入、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	[大工] 梁群馬郡新井村 松岡出雲正(忠藏)、代五郎、栄吉 [彫工] 花輪村 星野甚右衛門(慶助升興) [石工] 浅吉 [屋根工] 伝名 [加治工] 賀治佐吉	基 础	石場建(自然石・独立基礎)
軸 部	[身合]丸柱、切目長押、内法貫、頭貫、台輪 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手扶	組 物	[身合内部]出組(拳鼻実肘木付) [身合外部]三手先(拳鼻尾兼木実肘木付) [向拝]連三斗(実肘木付)、出三斗 [腰組]出組(拳鼻付)
中 備	[身合]本幕殿(彫刻)、斗 [向拝]詰組、斗、彫刻(龍)	軒	二軒繁垂木、板支輪(彫刻、彩色)
妻 鮎	虹梁大瓶束、斗横、蕪懸魚、鰐、降懸魚、彫刻羽目	柱 間 装 置	格子嵌戸戸、格子戸、板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、脇障子(枠のみ)、擬宝珠高欄、登高欄	床	拭板張
天 井	[内陣]格天井(絵画) [外陣]中央:親天井(龍絵画)、縁:格子天井(絵画)	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇、扇子(薬師如来像)、社殿2基
塗 装	素木、極彩色(欄間、羅込欄間、支輪、虹梁、笈形、降懸魚、向拝彫刻、海老虹梁、兎毛通、笈形、垂木、丸桁)	飾 金 物 等	棧唐戸:隅金具、切目長押:装飾金具、腰長押:装飾金具、垂木:小口金物
繪 画	[外陣]天井画(龍・花)狩野探雲筆(落款) [内陣]天井画(詳細不明)	材 质	不明
彫 刻	[内部]欄間(羅漢・龍、鳥と花)、水引虹梁(波)、本幕殿(鳥、木、犬、人)、頭貫(菱紋様)、支輪(波、花)、羅込板(波) [外部]向拝柱(菱紋様)、海老虹梁(波、菱紋様)、虹梁(龍)、虹梁(若葉、水模様)、兎毛通(鳳凰)、向拝正面(麒麟)、唐破風下(鬼)、棧唐戸(菱紋様)、本幕殿(松、動物)、手扶(蘿雲形)、木鼻(獅子)、拳鼻(鳥)、尾垂木(龍、波)、板支輪(波)、欄間(羅漢、鳳凰、花、波)、破風棟鬼飾(鬼、雲)、懸魚(燕)、鰐(雲)、降懸魚(雲)、笈形(波)、頭貫(菱紋様)、腰小壁板(波)		



写110-2 正面



写110-3 侧面



写110-4 組物



写110-5 向拝正面



写110-6 向拝側面



写110-7 外陣

紋様入りの角柱で虹梁三斗、正面唐破風懸魚は鳳凰彫刻。向拝正面内側の海老虹梁には龍が絡みつくように正面虹梁まで連しており正面の木鼻も兼ねている。手挾、木鼻、拳鼻、尾垂木と全て彫刻され彩色されている。外部四方の欄間、頭貫、棊股、支輪と彫刻がされている。内部は、薬師堂として建てられたため、内陣外陣を備え、中央に須弥壇及び厨子が置かれ薬師如来像を安置。前から2間通りの虹梁は鮒尻に突起を付け地紋が施され複雑な唐草模様を彫刻。外陣の欄間には中国故事を表した透かし彫り、彫刻棊股及び支輪、天井は「行年八十歳法眼探雲筆」の落款がある八方睨みの龍が描写。法眼探雲は甘楽郡野上村に生まれ江戸にて狩野探信に学んだとされており、村内には他に吉祥寺所蔵の釈迦降誕図や民家に残った牡丹図の袋戸棚等がある。龍図の周囲の花絵は近年地元住民の共同制作である。奥の内陣も天井絵で飾られ、内外陣の境には樋貢式の格子が縁の下に落とし込まれる構造となっている。

まとめ

現在は銅板葺となっているが、茅葺屋根の量感を残したまま葺き替えられている入母屋造の屋根は、

棟高で重厚さを残しており大変貴重な建物である。向拝正面左右の龍の頭を木鼻とし虹梁まで巻き付くように彫られた彫刻や、欄間彫刻の中国故事を模した透かし彫りと彫刻の数々も見事な物で、欄間裏の墨書の大工を松岡出雲正（新井村）、彫刻師は星野甚右衛門（星野慶助）（花輪村）、天井絵の狩野探雲（野上村）（1725～1812）と遠方からの名のある作者であり、「榛東村誌」や「勢多郡東村誌」からも彫工らの存在や活躍時期を探ることができ、建造年代の確定、近隣の社寺建築との関りや流れを探る上からも、貴重である。大工松岡出雲正は月夜野神社本殿を手掛け、絵師探雲は幕府絵所に務めたとされる人物である。

（関 美和子）

【参考文献】

- 『川場村の歴史と文化』川場村誌編纂委員会 昭和36年
- 『川場村の文化財写真集』川場村の文化財写真集発行委員会 昭和57年
- 『川場村誌』川場村誌編纂委員会 平成28年
- 『榛東村誌』榛東村誌編さん室 昭和63年
- 『勢多郡東村誌』勢多郡東村村誌編纂室 平成10年